余市水産博物館 研究報告

BULLETIN OF
YOICHI FISHERIES MUSEUM

第 15 号 2012 年 3 月

浅野敏昭：「市川文庫」の写真資料目録について(1) …… 1

乾　芳宏：ヨイチアイヌと沖の神「カムイギリ」 …… 33

佐藤美智雄：余市町沢町遺跡GP-20墓壙出土の徳利形土器について
複製土器製作時の考察雑感 …… 45

鈴江英一：北海道町村制度史の中の余市 …… 53

平成23年度博物館活動報告 …… 67

余市水産博物館

余市水産博物館
研究報告

第 15 号 2012 年 3 月

余 市 水 産 博 物 館

余市水産博物館研究報告 15 号：1 - 32. Mar. 2012

「市川文庫」の写真資料目録について（1）

浅 野 敏 昭
北海道余市郡余市町入舟町 21 番地

Ⅰ はじめに

小稿は余市町教育委員会所管の余市町図書に収蔵される「市川文庫」のうち、写真資料を貼付した 20 冊の簿冊（以下、スクラップブック）から作成した、写真資料の一覧を示すものである。

そのスクラップブックを含む「市川文庫」は、市川與一郎氏が収集された樺太関係の文献を中心とした資料群である。昭和 33（1958）年７月 28 日付で、ご子息の市川正氏から図書資料として余市町公民館に寄贈された。寄贈を証明する収蔵証に書かれた品目は、「樺太関係蔵書」が 160 冊、「地図」、「写真」と３つある。「地図」、「写真」の２品目には点数の記載がない。

その後、「市川文庫」は、余市町公民館図書室から、新設された余市町図書館（平成３（1991）年）に移され、同年中に目録『余市町図書館　市川文庫目録』として整理された。

具体的には、同年９月に「尼港事件関件文献－余市町図書館市川文庫第１集－」が、同年 11 月に「樺太関係写真集－余市町図書館市川文庫第２集－」が、同４年３月に「樺太関係図書及び資料－余市町市川文庫第３集－」が整理された。その後、同７年３月 31 日にそれらをあわせて『余市町図書館　市川文庫目録』として刊行された。

『市川文庫』は、ひらがなを付した分類番号、すなわち「に」「い」「か」の記号で３群に分類され、それぞれのひらがなに続いた通し番号で管理された。「に」は「尼港事件関件文献」、「い」は「樺太関係写真集」、「か」は「樺太関係図書及び資料」の各資料群を示す。

目録上の資料の総点数は「に」群が 17 点、「い」群が 19 点、「か」群が 102 点で、総計 138 点である。

小稿で紹介するスクラップブック 20 点は、上記の「い」群である。市販のクラフト紙を使用したスクラップブックで、外寸が高さ 300mm、巾 225mm、背巾 28mm、貼付用の中紙が 30 枚の規格である。背表紙には手書きで、「市川文庫」と書かれ、各簿冊には「1」から「19」の通し番号が付された 19 点と、「その他」と書かれた 1 点の合計 20 点がある。寄贈時のスクラップブック 19 点に、後に写真資料が整理されて 20 点になったものと思われる。写真裏に、市川與一郎氏が書かれたと思われる題名や日付があり、それらを参考にスクラップブックが整理されたものと思われる。

Ⅱ 市川與一郎氏について

市川與一郎氏は、明治３（1870）年、新潟県刈羽郡柏崎町港町３丁目 174 番地に生まれた。以下、同氏の経歴を市川家にのこる「履歴書」から示す（表１）。

表１によると同氏は、明治 41（1908）年に海馬島（モネロン島）に赴いたのが最初の樺太渡島だったようである。そこで同氏は、「海馬島開発合資会社を組織」するも、同年中に同社を解散させている。その後、大正 13（1924）年には小樽新聞樺太支局長となり、樺太拓殖協会豊原支部幹事をはじめ様々な役職に就任し、昭和 12（1937）年には小樽にもどっている。「市川文庫」の文献など諸資料の多くは、大正 13 年以降、同氏が樺太滞在中に入手したものであろう。

表１　市川與一郎氏の経歴

年次	学歴・職歴ほか
明治９年	柏崎小学校に入学
明治 17 年３月	柏崎小学校中等科卒業
明治 17 年４月	実地商業見習を為す
明治 20 年３月	実地商業見習終了

明治 20 年４月	私立柏崎中学院に入学
明治 25 年３月	私立柏崎中学院卒業その後長倉塾に就いて漢学を修む
明治 25 年６月	郷里において商業及び織物製造業に従事す
明治 29 年５月	この間刈羽青年会設立に際し推されて会長となる
明治 29 年６月	北海道に渡航、札幌区南１条西３丁目岡田商店勤務し、次いで札幌商業倶楽部事務主任となり、北海道拓殖銀行期成同盟会及び札幌営業者大会設立の全事務を兼掌す
明治 30 年６月	札幌谷倉庫組支配人となり、前記事務を兼任す
明治 32 年７月	同倉庫組の札幌倉庫株式会社組織に変更し、事務引継後辞職、南２条西３丁目赤星商会支配人となる。 ・明治 29 年８月より、勤務のかたわら露語研究会に入り露語を習得 ・明治 31 年北海露清学校開設され、同校に転じ露語及び清語専修科に入り、33 年３月同校の廃校とともに退学
明治 33 年 12 月	病気のため赤星商会を辞し、小樽に移住
明治 34 年 12 月	小樽海陸物産商組合事務所主任となり、小樽海陸物産商仲立業組合事務を兼務
明治 37 年３月	薩哈嗹島漁業規制同盟会組織され同会幹事となり、次いで上京委員に選任
明治 37 年 10 月	軍役夫供給請負出願許可され、小樽海陸物産商組合を辞し、札幌岡田合資会社代表岡田友次郎氏とともに第七師団司令部に隷属して満州に赴く
明治 39 年２月	同師団凱旋後、小樽商業会議所の嘱託により、北海道海産物販路調査のため満州各地を視察
明治 39 年５月	札幌に帰る
明治 40 年１月	北海道教育会の嘱託を受け、「北海道表忠録」第七師団戦史及び戦死者伝記執筆
明治 41 年２月	海馬島開発合資会社を組織し、支配人として同島の漁業に従事し、６月漁業終了後、都合により同会社を解散
明治 41 年８月	露領黒龍江尼古来斯克市藤山商会主任となる ・在職中、同市日本人居留民会商務部幹事専任となる
明治 41 年 11 月	小樽本店の都合により、商会閉店一切の事務引継
明治 41 年 12 月	家事の都合により新潟に帰省
明治 42 年４月	宝田石油株式会社銅山課廃止、事業費引継川内銅山組織され事務主任引続き鉱山所在地に勤務
明治 44 年５月	柏崎に帰り、越後タイムス社を創立し、「週間越後タイムス」創刊
大正２年４月	同社を他に譲渡、更に夕刊「柏崎商業新報」続刊、これを「柏崎新報」と改題した
大正５年２月	都合により「柏崎新報」廃刊 ・大正３年柏崎実業協会が組織され、同会の幹事として事務担当
大正６年２月	肥料・飼料商を経営
大正８年８月	日光タイムス社を組織し、「日刊日光タイムス」発刊
大正９年５月	薩哈嗹州渡航のため、日光タイムス社を友人に一任、新小樽新聞社の招聘に応じ、入社編集及び営業部を兼務
大正 10 年６月	同社取締役
大正 11 年４月	尼港殉難記念碑建設委員会・宣伝部長に推薦さる。 小樽区長大味久五郎氏の委託により、各府県巡回講演
大正 12 年２月	オホーツク、勘察加最近実測図作成並びに解説編纂し、函館市小島大盛堂より出版

大正 12（1923）年５月	小樽新聞社入社、編集部記者となる
大正 12 年 10 月	小樽新聞社倶知安支局長
大正 13 年９月	ポケット松前追分節歌集著述し、小樽市北海民謡社より出版
大正 13 年 11 月	小樽新聞社樺太支局長
大正 14 年６月	樺太拓殖協会豊原支部幹事
大正 15 年５月	樺太中央協会常任幹事
昭和３年 10 月	豊原商工会議所より東京、大阪、京都など９都市経済事情調査委託
昭和４年	樺太中央記者倶楽部名誉会員に推薦
昭和５年４月	樺太殖産銀行期成会同盟会役員
昭和５年７月	新聞社休職
昭和６年６月	豊原町町史編纂委員を嘱託（豊原町役場より）
昭和６年８月	樺太国士会幹事
昭和６年９月	島選挙確立樺太島民大会準備委員長
昭和６年 10 月	樺太庁移管対策島民大会理事
昭和６年 12 月	樺太国防義会理事
昭和７年７月	樺太中央協会幹事
昭和７年９月	豊原町町史編纂委員を解く
昭和７年 10 月	外交時局対策島民大会準備委員
昭和 12（1937）年	第一回豊原市市議会議員当選
昭和 12 年ころ	小樽に移り、稲穂町にて子息経営の写真館を手伝う
昭和 20 年 12 月 31 日	小樽にて死去享年 75 歳　　以上

Ⅲ　市川文庫写真資料一覧

以下に、市川文庫写真資料一覧を示す（表２～表 29、スクラップブック１～同 10 までの 1086 点）。各写真の裏面には撮影対象や年月日についての記載があるが、本表の各タイトルは、資料保存を優先して、写真が貼付された各頁の記載に拠った。「スクラップブック６」までは年月日の記載が多いが、その後は年月日記載の写真が少なくなる。

次頁に示した写真はほんの一端であるが、樺太の民族、風景、産業などそこから得られる情報は少なくない。今後も整理を続け、撮影時期、撮影地や撮影対象の分類などを行ってまいりたい。

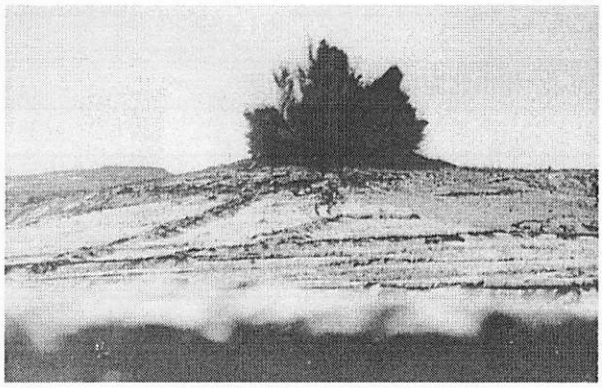


写真１　日露戦役旅順要塞　東鶏冠の爆破

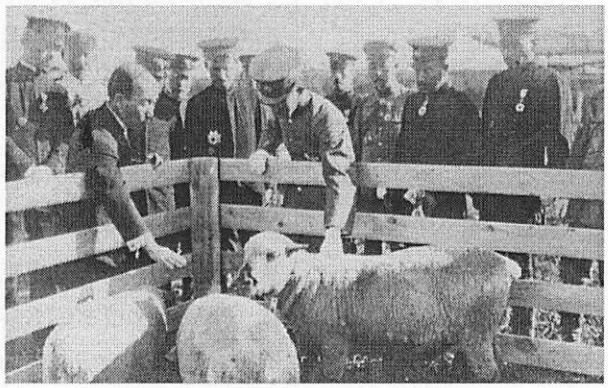


写真２　綿羊を愛でられる皇太子殿下

写真３　朝の豊原駅

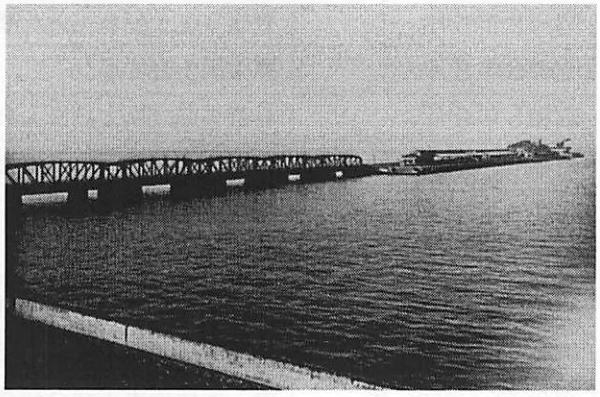


写真４　夏の大泊港

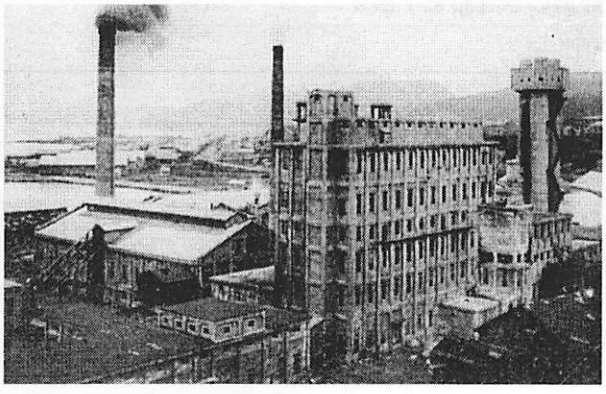


写真５　王子製紙真岡工場

写真６　鱒定置網漁　第二十三号号漁場

写真７　樺太アイヌの家族と住居

写真８　ギリヤーク族の漁獲物の加工

浅 野 敏 昭

真資料一覧『スクラップ1』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	明治37. 12. 18	日露戦役 旅順要塞 東鶏冠の爆破
2	明治37. 12. 28	同上 二龍山砲台の爆破
3	明治37. 12. 31	同上 松樹山補備砲台の爆破
4	明治38. 7. 24	午前九時 我砲艦の第一アルコワ砲撃
5	明治38. 7. 12	戦場より今村少尉の戦死収容光景
6	明治38. 7. 27	午後三時 ルイコフ市街
7	明治38. 7. 31	ハンダサにおける敵の降伏談判 全権委員長の一行
8	明治38. 7. 31	第一ハンダサにおける両全権委員の会合
9	明治38. 7. 31	第一ハンダサにおける両全権委員の会合
10	明治38年	休戦条約協定委員の会見
11	明治38年	福島少将の会見場に至る途上
12	明治38. 8. 6	アレキサンドロフスキー 独立第十三師団兵站監部
13	明治38年	独立第十三師団司令部及其部員
14	明治38. 10. 17	支那芝居
15	明治38. 10. 17	同上
16	明治38. 10. 17	同上
17	明治39年	樺太守備隊及民政署幹部
18	明治39年	大泊渓口町守備隊野戦郵便局
19	明治40. 9. 15	樺太境界劃定委員
20	明治41. 7. 19	豊原諸官衙連合大運動会
21	明治42年	明治四十二年当時の旧樺太庁
22	明治42. 8. 20	露人使用の馬車馬橇
23	明治42. 8. 23	樺太庁移庁式
24	明治42. 8. 24	樺太神社敷地清祓式
25	大正3. 7. 12	西久保少佐以下十八名戦死跡 軍川に於ける招魂祭十周年
26	大正14. 3. 1	豊原劇場における擬島会
27	大正14. 3. 1	同上
28	大正14. 5. 4	海軍飛行機の翔来を待ちつつある大泊港 左端に見ゆるは駆逐艦矢風
29	大正14. 5. 7	大泊船入澗に係留せる海軍飛行機 右Ⅱ七第六十八号機 左エフ第六十九号機
30	大正14. 5. 7	大泊港内 エフ第六十八号機の着水
31	大正14. 5. 7	大泊船入澗に着水せるエフ六十八号機
32	大正14. 5. 7	大泊に着水せるシール第九十六号機
33	大正14. 5. 7	同上 エフ第六十九号機
34	大正14. 5. 8	横須賀海軍航空隊 エフ第六十九号機 大泊町上空飛行
35	大正14. 6. 23	川上炭山 大山神社祭典花角力
36	大正14. 7. 12	樺太招魂社鎮座大祭
37	大正14年	皇太子殿下行啓を前に豊原公会堂建築工事
38	大正14. 8. 9	～十三日に至る五日間、樺太島御巡啓の摂政宮殿下
39	大正14. 8. 9	左に同じ皇太子殿下
40	大正14. 8. 9	～十三日に至る五日間、皇太子殿下と高松宮宣仁親王殿下
41	大正14. 8. 9	～十三日に至る五日間樺太島御巡幸の皇太子殿下と久邇宮朝融王殿下
42	大正14. 8. 9	大泊港内 皇太子殿下奉迎
43	大正14. 8. 9	大泊港碇泊船の皇太子殿下奉迎満艦飾
44	大正14. 8. 9	大泊における皇太子殿下奉迎門
45	大正14. 8. 9	同上
46	大正14. 8. 9	皇太子殿下大泊御上陸
47	大正14. 8. 9	大泊パルプ工場御成の皇太子殿下
48	大正14. 8. 9	皇太子殿下大泊中学校迎上場御成
49	大正14. 8. 9	大泊中学校付近高齢者
50	大正14. 8. 9	楠渓町駅御着 表忠碑に向かわれる皇太子殿下

表3 市川文庫写真資料一覧『スクラップ1』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	大正14. 8. 9	皇太子殿下御覧の大泊楠渓町表忠碑
52	大正14. 8. 10	豊原駅前の皇太子殿下奉迎門
53	大正14. 8. 10	豊原駅より樺太庁へ向かわれる皇太子殿下
54	大正14. 8. 10	豊原駅御着の皇太子殿下
55	大正14. 8. 10	同上
56	大正14. 8. 10	樺太庁御発、樺太神社に向かわれる皇太子殿下
57	大正14. 8. 10	樺太神社境内に御手植の松
58	大正14. 8. 10	樺太神社より豊原中学校へ向かわせらるる在京軍人及び青年団を御観閲
59	大正14. 8. 10	豊原中学校御成
60	大正14. 8. 10	豊原高等女学校運動場御成
61	大正14. 8. 10	皇太子殿下観覧の樺太庁前グランドに於ける各学校連合体操
62	大正14. 8. 10	皇太子殿下御観覧の樺太庁前グランドに於ける豊原中学校生徒の体操
63	大正14. 8. 10	樺太庁前広場に於ける天幕前にて皇太子殿下奉迎のオロッコ、ギリヤーク族と馴鹿
64	大正14. 8. 10	樺太庁前広場に於ける天幕前にて皇太子殿下奉迎のオロッコ族
65	大正14. 8. 10	皇太子殿下奉迎のオロッコ、ギリヤーク族の樺太庁前広場に設けたる天幕
66	大正14. 8. 10	皇太子殿下奉迎のオロッコ族の樺太庁広場における天幕内
67	大正14. 8. 10	樺太庁前広場に於ける天幕前にて皇太子殿下奉迎のオロッコ族と馴鹿
68	大正14. 8. 10	皇太子殿下奉迎の樺太庁前広場における馴鹿
69	大正14. 8. 10	皇太子殿下観覧の樺太庁前における馴鹿競争
70	大正14. 8. 10	皇太子殿下観覧に供せる馴鹿競争
71	大正14. 8. 10	豊原停車場前 皇太子殿下奉迎門夜景
72	大正14. 8. 11	皇太子殿下 小沼農事試験場御視察
73	大正14. 8. 11	同上 小沼農事試験場御視察
74	大正14. 8. 11	小沼農事試験場にて緬羊を愛でらるる皇太子殿下
75	大正14. 8. 13	本斗公会堂御成の皇太子殿下
76	大正14. 8. 12	真岡へ向けて大泊港を御出港の御召艦長門と御見送りの艦船
77	大正14. 8. 13	皇太子殿下樺太工業株式会社真岡工場御成
78	大正14. 8. 13	皇太子殿下観覧 本斗公会堂傍における武道試合
79	大正14. 8. 15	豊原町遊郭内における盆踊
80	大正14. 8. 16	敷香支庁における御使土屋東宮侍従一行
81	大正14. 8. 17	富士製紙㈱落合工場における甘露寺東宮侍従一行
82	大正14. 9. 4	本斗埋立地におけるニューポール機
83	大正15. 2. 6	第四回全日本スキー選手権大会会場 豊原競馬場
84	大正15. 2. 7	豊原町旭ヶ丘に於ける第四回全日本スキー選手権大会のジャンプを見る観衆
85	大正15. 2. 7	ジャンプ競技
86	大正15. 2. 7	ジャンプ競技
87	大正15. 2. 7	ジャンプ競技
88	大正15. 2. 7	ジャンプ競技
89	大正15. 6. 20	樺太庁前グランドに於ける第一回豊原実業連合大運動会仮装行列
90	大正15. 6. 20	第一回豊原実業連合大運動会 応援隊の一部
91	大正15. 6. 20	第一回豊原実業連合大運動会競技の内 バスケット宣伝競争
92	大正15. 6. 20	第一回豊原実業連合 俵運競争
93	大正15. 6. 20	第一回豊原実業連合 流送競争
94	大15. 8. 15	第一回豊原実業連合 豊原遊郭内における盆通り
95	大15. 8. 15	豊原競馬場に於ける樺太第一回飛行大会開催当日の観覧席
96	大15. 8. 15	豊原競馬場に於けるニューポール機前記念撮影
97	大15. 8. 15	豊原競馬場に於けるニューポール機離陸前
98	大15. 8. 15	豊原競馬場に於けるアブロ機前記念
99	大15. 8. 15	豊原競馬場に於けるアブロ機(正面)
100	大正15. 8. 15	豊原競馬場に於ける樺太第一回飛行大会 アブロ機(側面)

表4 市川文庫写真資料一覧『スクラップ1』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	大正15. 8. 15	豊原競馬場に於ける飛翔するアブロ機
102	大正15. 8. 15	同上 アブロ機上より落下せる動物落下傘
103	大正15. 8. 16	大泊埋立地におけるニューポール機上のピン子十四歳
104	大正15. 8. 16	大泊埋立地における節子十五歳
105	大正15. 8. 16	大泊埋立地における鈴木飛行士
106	大正15. 8. 16	大泊埋立地における 上 節子、 下 ピン子
107	大正15. 8. 16	大泊埋立地における ニューポール機の低空飛行
108	大正15. 8. 16	豊原より大泊埋立地へ着陸刹那のニューポール機
109	大正15. 8. 16	豊原より大泊埋立地に着陸せるニューポール機
110	大正15. 8. 22	久春内□□牧場に於ける樺太第三回飛行大会の全景
111	大正15. 8. 22	久春内□□牧場に於ける大会当日の観衆
112	大正15. 8. 22	久春内□□牧場に於ける大会当日ニューポール機着陸刹那の光景
113	大正15. 8. 22	久春内市街上空に飛翔せるニューポール機
114	大正15. 8. 25	第四回樺太飛行大会料理店組合より寄贈の花輪を前にニューポール機撮影
115	大正15. 8. 25	真岡町埋立地にてアブロ機前における記念撮影
116	大正15. 8. 25	同上 ニューポール機における真岡青年団員記念撮影
117	大正15. 8. 25	真岡町埋立地におけるアブロ機
118	大正15年8月	まつけむし被害木伐採記念碑

「市川文庫」の写真資料目録について（1）

表5市川文庫写真資料一覧『スクラップ2』(1)

No.	年月日	タ　イ　ト　ル
1	昭和4. 1. 12	大泊町郊外において□行せる全日本スキー選手権大会樺太地方予選(一)
2	昭和4. 1. 15	豊原町西一条通の大吹雪の後
3	昭和4. 1. 15	豊原町大吹雪の後　江戸っ子呉服店横
4	昭和4年5月	大泊港内鯡大漁　枠船繋留の光景
5	昭和4年6月	伏見宮殿下御来島記念碑
6	昭和4年6月	御来島の伏見宮殿下御旅館に当てたる樺太庁長官官邸の庭の手入れ
7	昭和4. 6. 1	豊原消防組春季演習
8	昭和4. 6. 2	樺太神社裏山火　樺太庁員出動準備
9	昭和4. 6. 2	樺太神社裏山火
10	昭和4. 6. 2	山火事
11	昭和4. 6. 2	山火事
12	昭和4. 6. 2	西一条藤屋出火
13	昭和4. 6. 16	豊原神社祭典
14	昭和4. 6. 16	豊原神社祭典神輿渡御
15	昭和4. 6. 22	豊原競馬の第一日
16	昭和4. 6. 22	伏見宮殿下　御召自動車予行運転
17	昭和4. 6. 24	伏見宮殿下奉迎の予習　豊原駅前通り
18	昭和4. 6. 25	伏見宮殿下奉迎門　大泊船見町アーチ
19	昭和4. 6. 25	同上　大泊本町アーチ
20	昭和4. 6. 25	王子製紙大泊工場の奉迎門
21	昭和4. 6. 25	同上
22	昭和4. 6. 25	豊原町神社通り　伏見宮殿下奉迎の装飾準備
23	昭和4. 6. 25	伏見宮殿下御召艦春日大泊入港
24	昭和4. 6. 26	午前8時　大泊港埠頭駅御上陸の伏見宮殿下
25	昭和4. 6. 26	大泊港鉄橋御通過の御召列車
26	昭和4. 6. 26	御召列車
27	昭和4. 6. 26	伏見宮殿下　豊原駅御着
28	昭和4. 6. 26	伏見宮殿下樺太神社御参拝
29	昭和4. 6. 26	午前十一時三十分　御旅館(長官官邸)へ御着の伏見宮殿下
30	昭和4. 6. 26	伏見宮殿下　長官官邸御着
31	昭和4. 6. 26	同上
32	昭和4. 6. 26	豊原町長より伏見宮殿下への献上品
33	昭和4. 6. 26	午後四時十五分　庁グランドへ御成の伏見宮殿下
34	昭和4. 6. 26	伏見宮殿下の台覧に供せる各学校体操予習(庁グランドに於て)
35	昭和4. 6. 26	豊原中学校における伏見宮殿下
36	昭和4. 6. 26	午後三」時　豊原中学校生徒の軍事教練台覧の伏見宮殿下
37	昭和4. 6. 26	同上
38	昭和4. 6. 27	大泊駅御着の伏見宮殿下
39	昭和4. 6. 27	大泊駅前における奉迎の水難救助会々員
40	昭和4. 6. 27	大泊港外における救護演習に御成の伏見宮殿下
41	昭和4. 6. 27	大泊港外に於ける救護演習台覧御帰還、北船澗埠頭上陸の伏見宮殿下
42	昭和4. 6. 27	伏見宮殿下　大泊駅より御徒歩にて北船澗へ向かわせられる伏見宮殿下
43	昭和4. 6. 27	大泊港外にて鱒漁台覧の伏見宮殿下
44	昭和4. 6. 27	大泊千歳ヶ岡展望台にての伏見宮殿下
45	昭和4. 6. 27	大泊楠渓町表忠碑御成の伏見宮殿下
46	昭和4. 6. 27	大泊神楽ヶ岡グランドにおける学校生徒の体操台覧の伏見宮殿下
47	昭和4. 6. 27	伏見宮殿下の台覧に供せる大泊高等女学校生徒の体操
48	昭和4. 6. 27	殿下の御前における大泊中学校生徒の分列式
49	昭和4・6. 28	伏見宮殿下小沼御成
50	昭和4・6. 28	伏見宮殿下小沼農事試験場御視察

表6 市川文庫写真資料一覧『スクラップ2』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	昭和4. 6. 29	午後一時二十五分 本斗駅ご出発の伏見宮殿下 後方に見えるは喜多長官
52	昭和4. 6. 29	午後一時三十分 本斗公会堂御成の伏見宮殿下
53	昭和4. 6. 29	午後二時十分 本斗築港埋立地における伏見宮殿下
54	昭和4. 6. 29	本斗救護演習台覧の伏見宮殿下
55	昭和4. 6. 29	本斗公園より本斗市街をへだてて港湾を御展望の伏見宮殿下
56	昭和4. 7. 12	豊原招魂祭
57	昭和4. 7. 12	同上の餘興相撲
58	昭和4. 7. 21	小樽新聞社主催実業団野球大会に樺太遊信課優勝 優勝旗を授与するは小樽新聞社代表市川與一郎
59	昭和4. 7, 23	豊原滞在の大谷派本願寺法主大谷光暢台下と智子御裏方
60	昭和4. 8. 13	樺太神社に参拝せる縣樺太庁長官と家族
61	昭和4. 8. 16	豊原遊郭内における盆踊
62	昭和4. 8. 23	樺太神社祭典の神輿
63	昭和4. 8. 23	樺太神社祭典神輿仮装行列
64	昭和4. 8. 23	第二十三回始政記念日祝賀会場の全景
65	昭和4. 8. 24	第十九回豊原競馬
66	昭和4. 9. 20	大泊町最初の町会
67	昭和4. 9. 21	閉会せる豊原最初の町会
68	昭和4. 9. 28	豊原町警察部主催第五回全島武道大会第一日目の柔道(豊原第一小学校運動場)
69	昭和4. 10. 20	大泊町役場
70	昭和4. 10. 20	大泊港
71	昭和4. 11. 3	豊原中学校に於て開催せる第二回偉人讃仰会(鎌倉時代に於ける盛界の偉人)
72	昭和4. 11. 23	樺太神社(人物の右が小原)
73	昭和4. 11. 25	豊原町辻内運道具店
74	昭和4. 12. 16	豊原町西一条南十丁目の昼火事
75	昭和5. 1. 11	第二回明治神宮体育会スキー競技豊原予選会
76	昭和5. 1. 11	同上 ジャンプ競技
77	昭和5. 1. 14	豊原町大吹雪後の道路整理
78	昭和5. 2. 10	陸軍記念日 暴風雪中 豊原大通における模擬演習
79	昭和5. 3. 18	入港の大泊艦
80	昭和5. 4. 16～	大泊春季種痘
81	昭和5. 4. 20	豊原町夜店開き
82	昭和5. 4. 29	大泊山下町初鰊
83	昭和5. 4. 30	大泊港での鰊沖揚げ
84	昭和5. 4. 30	大泊港での陸上ウインチにて鰊沖揚げ
85	昭和5. 5. 1	樺太夜間中学校卒業式
86	昭和5. 5. 3	豊原町における山火防止デー
87	昭和5. 5. 23	豊原駅前における第七師団長 新井亀太郎陸軍中将
88	昭和5. 5. 29	新井第七師団長を豊原駅に見送る
89	昭和5. 5. 30	豊原第一小学校にての徴兵検査
90	昭和5	豊原高女の旅行隊
91	昭和5年5月	豊真線における列車転覆
92	昭和5年5月	同上
93	昭和5年5月	豊真線修理
94	昭和5年5月	同上
95	昭和5. 6. 4	午後四時半 豊原競馬場に着陸せんとする刹那のオイローパ号
96	昭和5. 6. 4	同上
97	昭和5. 6. 4	午後四時半 着陸せるオイローパ号と遠藤操縦士
98	昭和5. 6. 4	同上 新井機関士
99	昭和5. 6. 4	午後四時半 豊原競馬場に着陸せるオイローパ号
100	昭和5. 6. 4	同上

表7 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ2』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	昭和5. 6. 4	同上
102	昭和5. 6. 4	同上
103	昭和5. 6. 4	午時四時半 オイローパ号乗組員と花輪の寄贈
104	昭和5. 6. 5	済川仮飛行場におけるオイローパ号
105	昭和5年6月	オイローパ号機上より撮影したる留多賀町
106	昭和5年6月	同上 小沼
107	昭和5年6月	同上 豊原市街
108	昭和5年6月	同上 豊原市街
109	昭和5年6月	同上 豊原市街
110	昭和5年6月	同上 本斗町
111	昭和5年6月	同上 真岡市街
112	昭和5年6月	同上 真岡市街
113	昭和5年6月	同上 真岡市街
114	昭和5年6月	同上 小能登呂
115	昭和5年6月	同上 野田町
116	昭和5年6月	同上 泊居
117	昭和5年6月	同上 久春内
118	昭和5年6月	同上 真縫山道
119	昭和5. 7. 7	ウイノコルフ家を訪問した木村課長と近藤少佐
120	昭和5. 7. 12	内路における小沢少佐一行
121	昭和5. 7. 12	新城京大総長一行、内路飛行場訪問

表8 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ3』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	大正15. 9. 4	本斗町埋立地に於ける樺太第五回飛行大会 ニューポール機前における記念撮影
2	大正15. 9. 4	同上
3	大正15. 9. 4	本斗町埋立地に於ける樺太第五回飛行大会当日 ニューポール機離陸の光景
4	大正15. 9. 4	同上 ニューポール機着陸前の低空飛行
5	大正15. 9. 4	同上 ニューポール機着陸刹那の光景
6	大正15. 9. 4	樺太第5回飛行大会 当日の観衆
7	大正15. 9. 10	恵須取河口中島に於ける樺太第六回飛行大会開催当日ニューポール機前記念撮影
8	大正15. 9. 10	同上
9	大正15. 9. 10	同上 低空飛行のニューポール機
10	大正15. 9. 10	同上
11	大正15. 9. 10	同上 恵須取河口中島に於ける樺太第六回飛行大会当日飛翔するニューポール機
12	大正15. 9. 12	同月十二日樺太工業(株)恵須取工場を訪問のニューポール機
13	大正15. 9. 22	元泊飛行(赤浦海浜における)
14	大正15. 9. 22	同上
15	大正15. 10. 4	
16	大正15. 10. 4	同上 ニューポール機の離陸前
17	大正15. 10. 4	同上 着陸の刹那
18	大正15. 10. 4	同上 観覧席
19	大正15. 10. 4	知取飛行大会樺太東海岸北遠古丹冨士製紙工場 観客の船遡列車
20	大正15. 10. 12	内路飛行大会
21	大正15. 10. 12	同上
22	昭和2. 4. 30	豊原町旧市街の節句近づく
23	昭和2年頃	豊原高等女学校運動会
24	昭和2年頃	豊原王子パルプ社宅の鯉のぼり
25	昭和2. 5. 1	春に目覚めた豊原郊外の鈴谷嶽
26	昭和2. 5. 1	西湾内時化のため海岸に打ち上げられたる鯨を拾う第三回消遊会江ノ浦会場
27	昭和2. 5. 1	同上
28	昭和2. 5. 25	セントラルグランドにおける、豊原消防組の演習
29	昭和2. 5. 30	豊北村大字富岡 樺太農産興業株式会社富岡農場に向かう開墾口口途上
30	昭和2. 5. 30	樺太農産興業富岡農場 トラクター試運転記念撮影
31	昭和2. 6. 25	豊原駅における尾崎哷堂氏
32	昭和2. 6. 25	同上
33	昭和2. 6. 25	樺太神社境内の尾崎哷堂氏
34	昭和2. 6. 25	豊原公会堂側における尾崎哷堂氏
35	昭和2. 7. 12	第七師団部隊樺太行軍部隊演習 歩兵砲の発砲刹那
36	昭和2. 7. 12	同上 最後の接戦
37	昭和2. 7. 12	大泊表忠碑招魂祭に参列する第七師団部隊の市街通過
38	昭和2. 7. 12	大泊表忠碑招魂祭に参列のため楠渓町通過の第七師団第二十八連隊の一部
39	昭和2. 7. 12	大泊表忠碑招魂祭にて弔辞朗読の第十四旅団長高島少将
40	昭和2. 7. 12	大泊表忠碑招魂祭に参列せる第七師団の一部と参拝者
41	昭和2. 7. 13	留多加湖畔に於ける第七師団部隊行軍演習 水中爆破
42	昭和2. 7. 13	留多加湖畔に於ける第七師団部隊行軍演習 軽機関砲
43	昭和2. 7. 14	第七師団樺太行軍先発隊豊原駅到着第十四師団長高島少将、比良歩兵少佐
44	昭和2. 7. 14	第七師団樺太行軍先発隊 豊原駅到着
45	昭和2. 7. 14	第七師団部隊行軍主力、豊原駅到着
46	昭和2. 7. 14	第七師団樺太行軍先発隊出迎えの豊原在郷軍人分会員
47	昭和2. 7. 14	第七師団部隊樺太行軍主力、豊原町大通り通過
48	昭和2. 7. 14	第七師団部隊樺太行軍主力、豊原町大通り南端到着
49	昭和2. 7. 14	豊原競馬場における第七師団部隊樺太行軍部隊演習の観衆
50	昭和2. 7. 15	豊原競馬場における第七師団部隊樺太部隊、樺太行軍分列式

表9 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ3』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	昭和2. 7. 19	本斗海岸における第七師団部隊樺太行軍演習の海中爆破光景
52	昭和2. 7. 19	本斗海岸における第七師団部隊樺太行軍演習野砲
53	昭和2. 7. 19	本斗海岸埋立地における第七師団部隊樺太行軍分列式
54	昭和2. 7. 28	豊原競馬場へ着陸さる北海タイムス社航空部北斗五号機操縦者永田飛行士に対し樺太中央協力会より贈られる花輪
55	昭和2. 7. 28	同社永田飛行士の挨拶（留多加競馬場）
56	昭和2. 7. 29	留多加競馬場に到着せる北海タイムス社北斗第五号機
57	昭和2. 7. 29	留多加競馬場に着陸せんとする北海タイムス社北斗第五号機
58	昭和2. 8. 1	本斗気屯飛行場へ到着したる先発機下志津陸軍飛行学校陸軍飛行機
59	昭和2. 8. 1	同飛行場へ到着したる下志津陸軍飛行学校陸軍機
60	昭和2. 8. 1	同上
61	昭和2. 8. 1	本斗気屯飛行場へ到着したる下志津陸軍飛行学校の飛行機歓迎
62	昭和2. 8. 1	下志津陸軍飛行機三七五〇米の上空より撮影したる内路内川間の国道
63	昭和2. 8. 3	豊原競馬場に到着せる下志津陸軍飛行機
64	昭和2. 8. 3	豊原飛行場に到着せる下志津陸軍飛行学校陸軍飛行機に対し豊原町より寄贈せる花輪
65	昭和2. 8. 3	豊原飛行場に到着せる下志津陸軍飛行学校陸軍飛行機を囲繞せる観衆
66	昭和2. 8. 3	豊原市街の上空を飛翔せる陸軍飛行機
67	昭和2. 8. 5	本斗郡気主灯台付近の飛行場予定地
68	昭和2. 8. 5	同上
69	昭和2. 8. 20	豊原遊郭内の盆踊り
70	昭和2. 8. 20	同上
71	昭和2年夏	上敷香山火
72	昭和2. 9. 15	留多加町比翼塚 釈尼妙順ほか
73	昭和2. 9. 18	雨龍網場に堰止められたたる木材
74	昭和2. 9. 17	西湾内 多蘭内市街
75	昭和2. 9. 18	西湾内雨龍神社前記念撮影
76	昭和2. 9. 20	鈴谷岳山頂における豊原高等女学校生徒
77	昭和2. 9. 20	泥川の水稲
78	昭和2. 9. 21	泥川市街
79	昭和2. 9. 21	泥川内砂間 馬車
80	昭和2. 9. 22	内砂市街
81	昭和2. 9. 21	大吠 一の辻缶詰工場
82	昭和2. 9. 21	大吠の大根畑
83	昭和2. 9. 21	大吠海岸
84	昭和2. 9. 22	西湾内北緑杖沖に座礁せる丹州丸の残骸
85	昭和2. 9. 22	亜庭湾内毘沙鑽簾瀧 中央記者クラブ員一行の半島視察一行
86	昭和2. 9. 22	来泊海岸
87	昭和2. 9. 22	西湾内来泊付近眼鏡岩
88	昭和2. 9. 22	新二見ヶ浦の知志谷二ツ岩
89	昭和2. 9. 22	登知志谷間 海岸の奇勝
90	昭和2. 9. 22	能登呂灯台高地より見たるモルジェー湾
91	昭和2. 9. 23	能登呂灯台
92	昭和2. 9. 23	西能登呂灯台
93	昭和2. 9. 23	駅逓前より見たる能登呂灯台
94	昭和2. 9. 23	白主海岸
95	昭和2. 9. 23	白主墓地
96	昭和2. 9. 23	北白主 山崎造材部前にて
97	昭和2. 9. 23	菱苫海岸の奇勝
98	昭和2. 9. 23	菱苫海岸の屏風岩
99	昭和2. 9. 24	宗仁市街
100	昭和2. 9. 25	南名好市街

表 10 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ3』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	昭和2. 9. 24	宗仁灯台
102	昭和2. 9. 25	南名好村市街より海岸を望む
103	昭和2. 10. 8	豊原第一尋常高等小学校運動会閉会式
104	昭和3. 1. 4	豊原消防組 春季消防演習
105	昭和3年6月	上敷香の大山火
106	昭和3年6月	同上
107	昭和3. 7. 14	豊原中学校校庭にての樺太全島陸上競技大会
108	昭和3. 8. 10	皇太子殿下行啓記念碑除幕式
109	昭和3. 8. 10	同上
110	昭和3. 8. 23	樺太始政第二十二回祝賀会 庁鉄仮装行列
111	昭和3. 9. 3	豊真鉄道全通祝賀会
112	昭和3. 10. 17	豊原小学校において挙行せる第一回樺太豊原管内自治功労者表彰式
113	昭和3. 10. 24	軍川樺太戦跡記念碑除幕式
114	昭和3. 11. 10	御大典祝賀式(樺太神社)
115	昭和3. 11. 10	御大典祝賀会場(豊原中学校)

表 11 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 4』

No.	年月日	タ イ ト ル
1	—	西久保豊一郎少佐
2	昭和 5.6.15	西久保豊一郎少佐を祀る西久保神社
3	昭和 5.6.15	軍川奥の院 立木前に立てる西久保秀子未亡人
4	昭和 5.6.15	軍川に於ける樺太戦跡記念碑前に立てる未亡人と案内人一行
5	昭和 5.6.16	樺太庁内務部長官舎前に於ける未亡人(中央)
6	昭和 5.6.16	豊原神社祭典の神輿
7	昭和 5.6.16	祭典風景
8	sy飽和 5.6.21	豊原競馬会観衆
9	昭和 5.6.23	樺太神社境内における豊原見番の消遊会
10	昭和 5.7.6	豊原中学校第五回陸上競技会
11	昭和 5.7.6	下志津飛行機 内路歓迎門
12	昭和5年7月	内路飛行場地鎮祭(格納庫内で)
13	昭和 5.7.6	内路における林相撮影の陸軍飛行機
14	昭和 5.7.6	内路飛行場に到着せる下志津陸軍飛行機
15	昭和 5.7.6	内路飛行場における陸軍飛行機
16	昭和 5.7.6	内路安着の乾杯 下志津陸軍飛行機
17	昭和 5.7.6	内路における第一回の飛行
18	昭和 5.7.6	内路にて林相撮影のためカメラを飛行機に取り付ける
19	昭和 5.7.6	内路飛行場にて
20	昭和 5.7.6	同上
21	昭和 5.7.6	下志津飛行機上一〇〇〇米の上空より撮影したる敷香市街
22	昭和 5.7.6	同上
23	昭和 5.7.6	三七〇〇米の上空にて撮影したる上敷香市街
24	昭和 5.8.22	除幕式をあげたる平岡定太郎氏銅像
25	昭和 5.8.22	同上
26	昭和 5.8.22	同上

表 12 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 5』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	昭和 5.7.13	樺太日々新聞社主催 全島少年野球大会
2	昭和 5.7.13～8.31	豊原町旧守備隊跡にて開催せる領有二十五周年記念樺太産業博覧会
3	昭和 5.8.4	樺太庁長官官邸前の松田拓務大臣
4	昭和 5.8.6	松田拓相川上炭鉱視察
5	昭和 5.8.15	豊原遊郭内における盆踊り
6	昭和 5.8.22	元樺太庁長官 平岡定太郎氏銅像除幕式
7	昭和 5.9.14	豊原競馬場へ到着せる大毎機と寄贈の花輪
8	昭和 5.9.14	豊原競馬場へ到着せる大毎機と観衆
9	昭和 5.9.15	大毎機上より撮影したる樺太神社
10	昭和 5.9.15	同上 豊原市街
11	昭和 5.9.15	空中より観たる豊原市街
12	昭和 5.9.15	同上
13	昭和 5.9.15	大毎機上より撮影したる豊原中学校と豊原高等女学校
14	昭和 5.9.15	空中より観たる豊原市街
15	昭和 5.9.15	空中より観たる王子製紙会社豊原工場
16	昭和 5.9.15	同上
17	昭和 5.9.15	大毎機上より王子製紙会社 泊居工場
18	昭和 5.9.15	同上 大泊市街
19	昭和 5.9.15	同上 敷香市街
20	昭和 5.9.15	同上 知取市街
21	昭和 5.9.15	同上 大泊港
22	昭和 6.1.23	明治神宮スキー競技会豊原予選並びに全日本スキー中学校選手権大会大会出場者
23	昭和 6.2.2	豊原中学校 義士会記念
24	昭和 6.2.7	豊原にての第九回全日本スキー大会場のジャンプ観衆
25	昭和 6.2.7	第九回全日本スキー大会におけるジャンプの関口選手
26	昭和 6.3.8	台湾生□□アミ族と豊原消防組常務員との記念撮影
27	昭和 6.3.8	樺太劇場にて港家箪子一座の樺太四季踊り
28	昭和 6.6.7	第一回花祭り会場景徳寺出発の稚児
29	昭和 6.6.7	同上
30	昭和 6.6.7	第一回花祭り行列豊原町大通を進行中の白象
31	昭和 6.6.20	大沢に新設せる豊原飛行場に到着せる下志津陸軍飛行機(4機)
32	昭和 6.6.20	同上
33	昭和 6.6.28	白主土城(霧深し)
34	昭和 6.6.28	同上(南入り口)
35	昭和 6.6.29	白主会所跡
36	昭和 6.6.29	白主港 左手 開島記念碑
37	昭和 6.7.13	御来島の閑院宮載仁親王殿下
38	昭和 6.7.13	閑院宮載仁親王殿下御成記念碑(表面)樺太神社院内にて除幕式
39	昭和 6.7.13	同上(裏面)
40	昭和 6.7.13	閑院宮載仁親王殿下御来島奉迎門(豊原駅前)
41	昭和 6.7.13	同殿下奉迎門のイルミネーション(豊原駅前)
42	昭和 6.7.13	大泊桟橋より御上陸の閑院宮殿下
43	昭和 6.7.13	豊原駅前の閑院宮載仁親王殿下
44	昭和 6.7.13	豊原町民の閑院宮殿下奉迎の提灯行列
45	昭和 6.7.14	樺太神社御参拝の閑院宮殿下
46	昭和 6.7.14	同上
47	昭和 6.7.14	同上
48	昭和 6.7.14	庁グランドにて各学校生徒連合の体操台覧の閑院宮殿下
49	昭和 6.7.14	同上
50	昭和 6.7.14	庁グランドにて閑院宮殿下御親閲を賜りたる樺太青年団辻本団長以下約七百名と青年訓練所員

表 13 市川文庫写真資料一覧　『スクラップ 5』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	昭和 6.7.14	閑院宮殿下、軍川奥ノ院へ御成
52	昭和 6.7.14	軍川奥ノ院西久保少佐戦死の地へ御成閑院宮殿下
53	昭和 6.7.14	小沼農事試験場御休憩所における閑院宮殿下
54	昭和 6.7.15	閑院宮殿下、小沼農事試験場へ御成の途上
55	昭和 6.7.15	閑院宮殿下、小沼農事試験場へ御成
56	昭和 6.7.15	閑院宮殿下、王子製紙豊原工場へ御成
57	昭和 6.7.17	閑院宮殿下、新開より敷香へ向かわせらるる途上
58	昭和 6.7.17	同上
59	昭和 6.7.17	閑院宮殿下、敷香御成
60	昭和 6.7.18	敷香土人部落オタスの森にてアザラシ・オットセイの遊泳を御台覧の閑院宮殿下
61	昭和 6.7.18	敷香土人部落に御成御野営所より鮭網漁、丸木舟競漕を台覧
62	昭和 6.7.18	閑院宮殿下敷香現地人部落オタスの森へ御成
63	昭和 6.7.21	真岡駅御着の閑院宮載仁親王殿下
64	昭和 6.7.21	同上
65	昭和 6.7.22	閑院宮載仁親王殿下、本斗公会堂御出発
66	昭和 6.7.22	閑院宮載仁親王殿下、本斗公園より港湾御展望
67	昭和 6.8.5	国民教育奨励会樺太夏季大会樺太視察団多蘭泊においてアイヌ踊見物
68	昭和 6.10.6	豊原高等女学校、鈴谷登山
69	昭和 6.10.16	豊原高等女学校において、全島美術展覧会
70	昭和 6.10.19	松にかかった神社山の幸
71	昭和6年11月	銘仙宣伝実演、豊原町大通江戸っ子呉服店内マネキン劇
72	昭和 6.11.9	移管反対第二次上京委員、大泊港出発
73	昭和 6.11.9	同上、亜庭丸甲板見送り
74	昭和 6.11.12	明治神宮前
75	昭和 6.11.12	同上
76	昭和 6.11.13	上野広小路にて
77	昭和 6.11.14	首相官邸前にて
78	昭和 6.11.14	首相官邸玄関にて
79	昭和 6.11.14	首相官邸内
80	昭和 6.11.14	首相官邸内応接間にて握り飯の昼食中
81	昭和 6.11.16	内務大臣官邸前にて
82	昭和 6.11.16	同上
83	昭和 6.11.16	大蔵大臣官邸前にて
84	昭和 6.11.17	鉄道大臣官邸前にて
85	昭和 6.11.17	政友会本部前にて
86	昭和 6.11.22	徳川邸前にて
87	昭和 7.7.22	樺太神社境内にて除幕式挙行の閑院宮載仁親王殿下御成記念碑
88	昭和 7.8.4	大泊町役場における巌谷小波先生の講演
89	昭和 7 年 8 月	豊原遊郭内における盆踊り
90	昭和 7.9.23	豊原町新競馬場における競馬会光景
91	昭和 7.11.23	東伏見宮殿下御成記念碑除幕式あり
92	昭和 7.11.3	明治節当日　樺太神社前における島民大会の国旗大行進の一行帝国万歳歓呼
93	昭和 7.11.3	庁前グランドに参集せる国旗大行進の一行
94	昭和 7.11.3	外交時局対策樺太島民大会国旗大行進仮装軍艦とタンク
95	昭和 7.11.3	豊原第二小学校における外交時局対策樺太島民大会
96	昭和 7.12.20	就航の宗谷丸
97	昭和 8.1.5	元農林部長　岡本保三氏　送別スキー大会
98	昭和 8.1.10	ヒュッテ創立に尽力せられたる前農林部長岡本保三氏並に菱沼前樺日主筆を東京より迎えてヒュッテ開き挙行をな
99	昭和 8.5.25	閑院若宮妃両殿下大泊御上陸
100	昭和 8.5.27	軍川奥の院跡西久保少佐戦死記念碑へ御成の閑院宮春仁王仝妃直子両殿下

表 14 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 5』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	昭和 8.6.1	本斗駅御着の閑院若宮 仝妃両殿下
102	昭和 8.6.1	本斗公会堂御出発の閑院若宮 仝妃両殿下
103	昭和 8.6.1	本斗海岸における閑院若宮 仝妃両殿下
104	昭和 8.6.3	大泊御来島の閑院若宮 仝妃両殿下
105	昭和 8.8.1	豊原駅前の東伏見大妃殿下歓迎門
106	昭和 8.8.3	樺太庁グランドにおける第二回総会に台覧の東伏見宮大妃殿下
107	昭和 8.8.3	豊原高等女学校において開催の御茶会 東伏見宮大妃殿下と愛国婦人会支部会員
108	昭和 8.8.3	小沼中央試験場に御成の東伏見宮大妃殿下
109	昭和 8 年 8 月	御来島の東伏見大妃殿下の歌碑
110	昭和 8 年 7 月	樺日社員消遊会登山撮影
111	昭和 8.9.24	水源地裏山植樹デー
112	昭和 8.10.2	豊原第一尋常高等小学校講堂において開催せる第三回樺太国防議会総会
113	—	開島記念碑

表 15 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 6』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	昭和9. 1. 1	樺太庁立豊原中学校配属将校 財部、山崎両氏
2	昭和9. 3. 20	豊原中学校講堂における午前十時 松野尾中佐の実戦法満州事変講演会
3	昭和9年7月	長浜湖畔風景
4	昭和9. 8. 27	大沢飛行場に飛来せる立川飛行九一式偵察機連隊豊原上空を飛翔し札幌へ引き返す
5	昭和9. 9. 3	皇太子御降誕奉祝のため昭和九年九月三日貴族院より献上の坂上田村麻呂
6	昭和9. 9. 4	大泊に飛来せる大湊海軍飛行機着水の刹那
7	昭和9. 9. 4	同上 大泊港内に着水
8	昭和9. 9. 4	午後五時四〇分 大泊港内に着水する大湊水上偵察機
9	昭和9. 9. 4	同上 歓迎観衆
10	昭和9. 9. 14	大沢飛行場に不時着せる林相撮影の下志津陸軍飛行機
11	昭和9. 9. 14	同上
12	昭和9年12月	歳晩 豊原町夜店通りの年の市
13	昭和10年2月	豊原市の街上所見
14	昭和10. 2. 11	日露戦没樺太出征軍戦没将士慰霊会建立の碑
15	昭和10年7月	同上
16	昭和10. 9. 6	大泊に入港せる帝国連合艦隊旗艦 山城
17	昭和10. 9. 6	大泊に入港せる帝国連合艦隊海軍軍楽隊の演奏会
18	昭和10. 9. 6	同上軍楽隊演奏会の聴衆
19	昭和10. 9. 6	同上
20	昭和10. 9. 7	豊原を訪問せる帝国連合艦隊乗組員を歓待する今村樺太庁長官夫人
21	昭和10. 10. 25	大泊に上陸せる歩兵第28連隊秋山郷土部隊
22	昭和10. 10. 25	同上、大泊埠頭連絡船より上陸する軍旗
23	昭和10. 10. 25	同上、大泊桟橋通過
24	昭和10. 10. 25	旭川歩兵第二十八連隊秋山郷土部隊 樺太訪問、大泊桟橋通過
25	昭和10. 10. 25	同上、大畑原野における演習
26	昭和10. 10. 25	豊原公園付近における演習
27	昭和10. 11. 20	小樽高商 山上グランドにおける第七師団長宇佐美中将ほか
28	昭和10. 11. 24	堂守の不注意により焼失したる日持上人の碑
29	—	同上
30	昭和10. 12. 14	義士を偲ぶタベ(会場プリンス楼上)蘇水会
31	昭和10年	泊居大橋
32	昭和11. 4. 29	蘇水会春季大会(会場樺太劇場)
33	昭和11. 7. 21	豊原町太子堂祭典宵宮祭
34	昭和11. 7. 21	大泊桟橋御上陸の梨本宮正王殿下
35	昭和11. 7. 21	樺太神社御参拝の梨本宮正王殿下
36	昭和11. 7. 22	樺太全島消防組御親閲。令旨を賜る殿下
37	昭和11. 7. 25	敷香の土人部落オクトの森に成らせられる梨本宮正王殿下
38	昭和11. 7. 25	幌見峠展望所に成らせられたる梨本宮正王殿下
39	昭和11. 7. 25	国境に立たせられるる梨本宮正王殿下
40	昭和11. 7. 26	王子製紙会社真岡工場甲クラブ前の梨本宮正王殿下
41	昭和11. 7. 27	八眺嶺展望所の梨本宮正王殿下
42	昭和11. 7. 27	南樺太鉄道株式会社内幌炭山乾鍋工場事務所へ成らせらるる殿下
43	昭和11. 7. 27	本斗公会堂前より市街地港湾を展望あらせらるる梨本宮正王殿下
44	昭和11. 7. 28	大泊神楽岡 東伏見宮殿下記念碑御参拝の梨本宮正王殿下
45	昭和11. 7. 28	大泊町の梨本宮正王殿下奉迎門
46	昭和11. 7. 28	大泊支庁御出発の梨本宮正王殿下
47	昭和10年9月	西久保少佐戦死跡記念碑
48	—	日露戦役摘出弾丸一覧
49	—	同上
50	—	同上

表 16 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 6』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	—	同上(奉天戦其六)
52	—	日露戦役 山頂における第七師団戦没者の墓
53	—	同上 北陵における第七師団戦没者の墓
54	—	康平縣康平おける第七師団戦没者の墓
55	—	旭川における第七師団の凱旋 招魂社参拝
56	—	日露戦争当時の旅順旧市街
57	—	同上 旅順港
58	—	旅順港口
59	—	旅順港口の我閉塞船
60	—	日露戦役 旅順港の敗窮艦 レトライザン、ホルタワの二艦
61	—	旅順陥落後の露兵捕虜(於旅順)
62	—	日露戦争当時の奉天宮殿
63	—	同上
64	—	日露戦争当時の奉天喇嘛塔
65	—	同上 奉天城廓
66	—	日露戦争当時の奉天城内
67	—	同上 奉天の鼓楼
68	—	奉天城外
69	—	同上
70	—	奉天北陵中央門
71	—	同上、石門
72	—	日露戦争当時の北陵廟廟
73	—	同上 奉天北陵
74	—	同上 奉天北陵南正門
75	—	同上 奉天北陵
76	—	日露戦争当時の遼陽付近露兵の土窟
77	—	遼陽の白塔
78	—	日露戦争当時の鉄嶺停車場
79	—	日露戦争当時の鉄嶺柴河の鉄橋
80	—	鉄嶺全景 其一
81	—	同上 其二
82	—	同上 其三
83	—	同上 其四
84	—	旅順陥落後 大連における露軍捕虜の日本内地輸送汽船乗組
85	—	日露戦争当時 大連支那車両集合の図
86	—	同上 営口遼河河岸
87	—	同上 営口遼河結氷
88	—	同上 鳳凰城
89	—	同上 満州城
90	—	同上 満州 祭典餘興獅子舞
91	—	同上 満州 祭典餘興仮装行列
92	—	同上 満州大石橋
93	—	同上 僊山
94	—	同上 僊山の仏閣
95	—	同上 開原停車場
96	—	同上 福陵
97	—	同上 福陵の墳墓
98	—	昌図駅を距れる約半里北方の鉢巻山
99	—	昌図駅北方鉄橋
100	—	日露戦争当時の昌図廟

表 17 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 6』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	—	同上 新民屯清心寺
102	—	同上 新民屯孔子廟
103	—	同上 新民屯師範学堂
104	—	同上、露軍の遺棄せる砲車
105	—	同上、野戦砲兵の野砲発射
106	—	不鮮
107	—	不鮮
108	—	不鮮
109	—	不鮮
110	—	不鮮
111	—	不鮮
112	—	不鮮
113	—	不鮮
114	—	不鮮
115	—	不鮮
116	—	不鮮
117	—	不鮮

表 18 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 7』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	—	不詳
2	—	不詳
3	—	不詳
4	—	不詳
5	—	不詳
6	—	不詳
7	—	不詳
8	—	不詳
9	—	不詳
10	—	不詳
11	—	不詳
12	—	不詳
13	—	不詳
14	—	不詳
15	—	不詳
16	—	不詳
17	—	不詳
18	—	不詳
19	—	不詳
20	—	不詳
21	—	不詳
22	—	不詳
23	—	樺太遠征軍上陸記念碑
24	—	半田日露澤国境碑
25	—	同上(拓本)
26	—	第四天測境界標石(日露国境碑)
27	—	大日本天測点
28	—	日露境界線上の目標
29	—	会議後休憩室における委員一行
30	—	遣露使節竹内下野守一行(其一)
31	—	同上 (其二)
32	—	鉄道乗車券
33	—	同上裏面(注意書)
34	—	陸軍中将原口兼清ほか三名の肖像
35	—	樺太南部占領部隊司令部
36	—	某師団将校の乗船
37	—	同軍 のピリヨンスキーの山嶺通過
38	—	北遣艦隊の各提督
39	—	同 艦隊吾妻艦の全乗組員
40	—	同 艦隊北部樺太軍の上陸援護砲撃
41	—	我軍上陸日光景と各碇泊船上陸の光景
42	—	7月4日、春日艦の樺太砲撃
43	—	樺太占領戦の壮観
44	—	樺太島に武功を輝かせし軍艦千歳対馬に賜りたる勅語及令旨
45	—	河川砲艦 軍用船を保護して東伏見湾に入れる時の光景
46	—	皇軍、樺太に迫る(中村不折画)
47	—	沿海州海岸に敵敗窮艦の座礁露艦 イゾムルド
48	—	コルサコフの桟橋消失の光景
49	—	同上
50	—	七月八日我が陸軍がコルサコフ付近に上陸

表 19 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 7』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	—	日本領事館員ほか
52	—	コルサコフ日本領事館、焼失後の光景
53	—	コルサコフ桟橋付近、市街の中央部
54	—	兵□後のコルサコフ
55	—	コルサコフ港務長官官邸
56	—	コルサコフ監獄
57	—	樺太分捕写真
58	—	ポロマントマリの上陸軍
59	—	第一アルコフの砲撃
60	—	第一アルコフ、ルイコフ間にあるカームイシエフ峠
61	—	晴気村、旧ウラジミロフカ
62	—	同上
63	—	我軍、旧ウラジミロフカを占領す。晴気村
64	—	ウラジミロフカ旧市街(後に晴気村と仮称す)
65	—	ウラジミロフカ新市街の全景其二
66	—	ウラジミロフカ旧市街(後に晴気村と仮称す)
67	—	ウラジミロフカ新市街の全景の全景其三
68	—	ウラジミロフカ旧市街(後に晴気村と仮称す)
69	—	アレキサンドルフスキーの桟橋
70	—	艦アレキサンドルフスキーの占領倉庫と急造桟橋
71	—	樺太北部アレキサンドル市の占領
72	—	占領後のアレキサンドル府市街、寺院など
73	—	アレキサンドルフ市の占領(中村不折筆)
74	—	病院船小〇丸にて亜港桟橋上陸の赤十字看護婦の第十二、第二十二班一部
75	—	我海軍陸戦隊占領後のアレキサンドル府
76	—	第1アルコワの付近
77	—	樺太北部の占領
78	—	ルイコフ教会堂における軍使の会見
79	—	ルイコフ教会堂より敵の軍使帰還
80	—	ノオミハイロフスコエ村
81	—	ダアリネにおける我砲兵中隊陣地サウイナヤバーチ村より、我騎兵の将に前進せんとするところ我輜重兵ダアリネに
82	—	ダリアリネ付近における我軍砲兵陣地
83	—	ダリアリネにおける捕虜訊問
84	—	メシヤ海岸の壮観
85	—	メシヤ付近にて我軍の活動
86	—	第二上陸地点 ポロアンドマリ
87	—	同上
88	—	ツーエ市街
89	—	ツーエ付近の炭鉱採掘
90	—	樺太神社
91	—	同上
92	—	同上 本殿
93	—	同上
94	—	豊原神社
95	—	樺太神社
96	—	同上 三の鳥居より豊原市街中央部遠望
97	—	官幣大社樺太神社より豊原市街を望む
98	—	樺太神社境内より豊原市街遠望
99	—	樺太神社手洗場
100	—	春の樺太神社付近

表 20 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 7』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	—	春の樺太神社境内
102	—	夏の樺太神社境内
103	—	樺太神社霜の花
104	—	樺太神社展望所より豊原市街北半を望む
105	—	樺太神社境内 ノーイック号煙筒
106	—	樺太神社境内
107	—	同上
108	—	樺太神社社務所内部
109	—	同上
110	—	同上
111	—	樺太神社並木通り
112	—	樺太神社参道中川並木の碑
113	—	豊原神社祭典 奉納弓会
114	—	樺太神社本殿敷地 地鎮祭介助の景
115	—	同 神社 中川並木記念碑
116	—	同 神社参道中川並木の碑
117	—	同 神社参道中川並木
118		元コルサコフ市長ズーヤーギン

表21 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 8』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	—	旧樺太招魂社名標
2	—	旧樺太招魂社(豊原神社境内)
3	—	樺太招魂社(正面)
4	—	同上 (側面)
5	—	同上 境内
6	—	同上 境内
7	—	軍川戦跡記念碑
8	—	殉職警察官忠魂碑
9	—	消防殉難碑
10	—	消防ポンプ放水試験
11	—	樺太庁 長官官邸
12	—	樺太庁
13	—	樺太庁
14	昭和4. 11. 30	樺太庁鉱務課
15	—	樺太庁保安課前放水試験
16	—	樺太庁鉄道事務所
17	—	同上
18	—	樺太庁鉄道機関車
19	—	樺太庁鉄道 モダン列車
20	—	同上の内部
21	—	旧庁立豊原医院
22	—	樺太庁豊原医院工事
23	—	樺太庁立 豊原医院
24	—	同上
25	—	樺太庁立 豊原医院の内部
26	—	同上
27	—	豊原医院 精神病棟
28	—	樺太庁立 豊原医院の内部
29	—	旧豊原郵便局
30	—	豊原郵便局
31	—	同上
32	—	豊原郵便局前の雪景色
33	—	豊原郵便局付近
34	—	豊原郵便局
35	—	豊原局自動式電話
36	—	逓信課官舎
37	—	樺太地方裁判所
38	—	同上
39	—	同上
40	—	豊原在郷軍人分会(元豊原警察署)
41	—	樺太庁博物館
42	—	同上
43	—	同上
44	—	樺太庁中央試験所工事
45	—	樺太庁中央試験所
46	—	中央気象台 臨時豊原地磁気観測所
47	—	小沼農事試験場の緬羊
48	—	豊原町 樺太守備隊跡
49	—	豊原町役場
50	—	豊原町役場

表22 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 8』 (2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	—	同上
52	—	豊原町役場
53	—	豊原上水道水源地
54	—	豊原発電所
55	—	豊原町消防本部望楼
56	—	豊原町火防宣伝
57	—	豊原町公会堂
58	—	同上
59	—	豊原公会堂上空のアブロ機
60	—	豊原商工会議所
61	—	豊原公園の公園開き
62	—	同上
63	—	豊原公園の熊
64	—	豊原公園
65	—	同上
66	—	豊原中学校
67	—	豊原中学校奉安庫
68	—	豊原中学校スケート場
69	—	豊原中学生徒のスキー練習
70	—	豊原高等女学校
71	—	同上
72	—	豊原高等女学校 奉安庫
73	—	同上
74	—	旭ヶ丘スロープの豊原高等女学校生徒
75	—	豊原高等女学校の内部
76	—	豊原高等女学校生徒旅行隊(箱根にて)
77	—	豊原高等女学校寄宿舎 浴室
78	—	豊原実践女学校
79	—	豊原第一尋常高等小学校
80	—	同上
81	—	雪の豊原第一尋常高等小学校
82	—	豊原第一尋常高等小学校の新入学
83	—	豊原第一小学校上空のニューポール機
84	—	同上 アブロ機
85	—	豊原第二小学校
86	—	同上 運動会
87	—	豊原第三小学校
88	—	豊原第四小学校
89	—	旧豊原停車場
90	—	豊原停車場
91	—	豊原駅前の雪解け
92	—	朝の豊原駅
93	—	初雪の豊原駅
94	—	王子製紙会社豊原工場の遠望
95	—	王子製紙会社豊原工場
96	—	同上
97	—	同上 正門
98	—	同上 発電所
99	—	同上 工場の内部
100	—	王子製紙会社 豊原工場内部

表 23 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 8』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	—	王子製紙会社 豊原工場内部
102	—	同上
103	—	同上
104	—	王子製紙会社 豊原工場甲倶楽部
105	—	同上 テニスコート
106	—	王子製紙会社 豊原工場甲倶楽部
107	—	酒井 雲一行 王子製紙豊原工場見物
108	—	旧北海道拓殖銀行豊原支店
109	—	新北海道拓殖銀行豊原支店
110	—	北海道拓殖銀行豊原支店応接室
111	—	北海道拓殖銀行豊原支店内部
112	—	樺太日々新聞社
113	—	樺太中央新聞社と小島氏
114	—	豊原町 東本願寺別院
115	—	豊原町 畢徳寺
116	—	豊原町 乗願寺
117	—	豊原町 畢徳寺境内観音像
118	—	豊原町 スキーヶ丘 日持上人銅像
119	—	豊原町 浄土院
120	—	豊原町 天主公教会
121	—	豊原町 小沼農事試験場
122	—	同上
123	—	豊原町 小沼農事試験場の放牧
124	—	豊原町 小沼農事試験場の緬羊

表24 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 9』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	—	樺太綜合スキー場 樺太シャンツェ
2	—	豊原スキーヶ丘
3	—	樺太庁前グランド
4	—	豊原競馬場
5	—	豊原旧市街
6	—	豊原町旧市街入口
7	—	旧豊原町 行啓道路旧態
8	—	豊原町市街
9	—	豊原市街其一
10	—	同上 其二
11	—	豊原町大通
12	—	同上
13	—	同上
14	—	同上
15	—	樺太拓殖共進会
16	—	同上
17	—	同上
18	—	同上
19	—	同上
20	—	同上
21	昭和5年6月	豊原町西大橋架替工事
22	—	豊原町西大橋
23	—	同上
24	—	同上
25	—	豊原町北辰園風景
26	—	豊原町北辰園
27	—	同上
28	—	同上
29	—	同上
30	—	同上
31	—	樺太劇場
32	—	恵比須座
33	—	旧豊原劇場
34	—	豊原町カフェ-華壇
35	—	昭和座
36	—	豊原町カフェ-平和軒
37	—	豊原町カフェ-プリンス
38	—	豊原町東洋軒
39	—	豊原町カフェ-アヅマ
40	—	豊原町カフェ-ゴンドラ
41	—	豊原町樺太ビルディング
42	—	花屋ホテル
43	—	花屋本店
44	—	豊原デパート
45	—	豊原町第一廉売場
46	—	豊原町豊湯
47	—	豊原町妙見場
48	—	豊原町西一条通
49	—	同上
50	—	同上

表 25 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 9』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	—	豊原町西一条通り 生駒商店前大売り出し
52	—	同上 大売り出し
53	—	豊原町 鈴木商店
54	—	豊原町大通り 江戸っ子呉服店
55	—	同上 武者人形
56	—	豊原町 岡田内科医院
57	—	豊原町 森時計店
58	—	豊原町大通り 大野商事合名会社
59	—	豊原町 中央サイダー株式会社の内部
60	昭和4. 11. 4	豊原町 元乾溜工事遠望
61	昭和4. 4. 25	豊原町 真岡通の火事
62	—	消防望楼より王子製紙工場方面を望む
63	—	豊原競馬場より神社山を望む
64	—	豊原旭ヶ丘 神社山の遠望
65	—	豊原町の吹雪
66	—	豊原町 真岡通り新年門松の準備
67	—	豊原町 東二条南六丁目雪の塀
68	—	豊原町 雪解けの街路にて
69	—	春の豊原郊外
70	—	豊原郊外の残雪
71	—	春のどか、豊原町神社通りにて
72	—	残雪 豊原郊外
73	—	豊原町 初夏の街路にて
74	—	豊原郊外 谷牧場付近
75	—	秋の豊原郊外
76	—	大泊全景其一（五枚続き）
77	—	同上 其二
78	—	同上 其三
79	—	同上 其四
80	—	同上 其五
81	—	樺太拓殖共進会
82	—	同上
83	—	同上
84	—	同上
85	—	同上
86	—	同上
87	—	同上
88	—	大泊に在りし樺太庁
89	—	落成の日近き大泊警察署
90	—	落成せる北海道拓殖銀行大泊支店
91	—	大泊図書館 事務室
92	—	王子製紙会社 大泊工場
93	—	大泊パルプ工場 甲倶楽部の全景
94	—	樺太八景候補地 大泊神楽ヶ丘
95	—	同上 其二
96	—	同上 其三
97	—	同上 其四
98	4 月 13 日	春の大泊港 船着場
99	—	春の大泊港
100	—	夏の大泊港

表26 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 9』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	—	初冬の大泊港
102	—	大泊港桟橋
103	—	同上
104	—	同上
105	—	同上
106	—	大泊港内
107	—	同上
108	—	旧大泊停車場
109	—	竣工を待つ大泊停車場
110	—	落成を待つ大泊停車場
111	—	大泊港桟橋
112	—	同上
113	—	焼失後、落成せる大泊港駅桟橋
114	—	大泊港駅待合室
115	—	大泊港駅内
116	—	同上
117	—	大泊港桟橋
118	—	同上
119	—	同上
120	—	大泊港駅プラットホーム
121	—	大泊港内の帆檣
122	—	旧大泊港駅埠頭
123	—	新大泊桟橋埠頭

表 27 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 10』(1)

No.	年月日	タ イ ト ル
1	—	氷上荷役中の千歳丸 大泊港にて
2	—	同上
3	—	同上(愈愈氷上荷役が始まった)
4	—	大泊港桟橋に横付けの千歳丸の勇姿
5	—	大泊港桟橋の千歳丸
6	—	大泊港埠頭の亜庭丸
7	—	亜庭丸
8	—	大泊港桟橋の亜庭丸
9	—	明大丸 大泊港にてパルプ氷上荷役
10	—	日本郵船 小樽～大泊間 弘前丸
11	—	大泊港に来航せる連合艦隊
12	—	樺太丸
13	—	大泊入港の特務艦 大和
14	—	大泊へ入港せる大泊艦氷上の景
15	—	大泊港 波止場
16	—	大泊港の船入澗
17	—	同上
18	—	同上
19	—	大泊港外の鰊漁船
20	—	歳晩の大泊港
21	—	大泊桟橋送迎の雑踏
22	—	大漁旗 春風に翻り各漁場に歓喜漲る。
23	—	大泊港における唯一の浚渫船 北進丸
24	—	同上
25	—	浚渫船
26	—	大泊港内沈没軍艦ノーウィック引上げの状
27	—	大泊港内のコマイ取り実況
28	—	樺太大泊における氷上網
29	—	大泊港内の氷下漁獲
30	—	大泊川所見(晩秋や水影消し橋の雪)
31	—	着着進行しつつある大泊水道工事
32	—	大泊所見(漁粕もタテとなって)
33	—	大泊町 道路部購入新鋭機ローラーの試運転
34	—	火防街頭宣伝行列(大泊)
35	—	大泊町の初雪
36	—	陸軍記念日 大泊分会の仮装行列
37	—	大泊の近郊女麗市街と日露戦役樺太遠征軍上陸記念碑の遠望
38	—	大泊 記念橋附近 初音町
39	—	大泊犬橇の競争
40	—	大泊町所見(春寒し)
41	—	大泊街頭所見(悪路)
42	—	同上
43	—	大泊 美満寿館(森永ミルクキャラメル愛用無料活動写真)
44	—	大泊町 歓楽街(カフェー街)栄町東一条通
45	—	大泊栄町本通りの大売り出し風景
46	—	大泊町旭町通り 大売り出し風景
47	—	大泊栄町の年末大売り出し風景
48	—	大泊連合大売り出し景品引換所
49	—	春早き大泊町船見町崖下
50	—	大泊附近か

表 28 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 10』(2)

No.	年月日	タ イ ト ル
51	—	大泊附近か
52	—	樺太 真岡町全景
53	—	縣社 真岡神社
54	—	樺太 真岡駅
55	—	縣社 真岡神社
56	—	樺太 真岡悲恋塚
57	—	同上
58	—	樺太 真岡町公会堂
59	—	同上
60	—	真岡山手町及び谷町を望む
61	—	真岡 栄町通り
62	—	王子製紙真岡町工場
63	—	同上
64	—	同上
65	—	真岡町 荒貝 飛行場予定地
66	—	真岡節踊り
67	—	知取市街(千歳町、初音町、栄町)
68	—	知取川鉄橋
69	—	知取町 5千米上空より撮影
70	—	富士製紙知取工場 その1
71	—	知取町 飛行場予定地
72	—	富士製紙工場 その2
73	—	遊仙閣附近より知取岳を望む
74	—	知取富士製紙工場、網場
75	—	知取本流石山水天宮付近の景
76	—	富士製紙知取工場知取川アバ
77	—	落合町
78	—	同上
79	—	落合消防望楼より、落合第二小学校方面を望む
80	—	落合町の前身ガルキノウラスコエ
81	—	落合観測所支所より王子製紙落合工場を望む
82	—	落合停車場の構内
83	—	富士製紙落合工場 甲倶楽部
84	—	落合富士製紙工場
85	—	同上
86	—	同上
87	—	同上
88	—	恵須取町 市街南部
89	—	恵須取町 浜通りより南部を望む
90	—	新興の恵須取町の亜港町
91	—	王子製紙会社 恵須取工場
92	—	王子製紙恵須取工場及び社宅の一部
93	—	恵須取工場 インクラインにて木材引上げの光景
94	—	恵須取川上流の森林
95	—	同上 河口
96	—	恵須取工場より太平炭山行きの軌道
97	—	恵須取太平炭山の露天掘りの一部
98	—	樺太留多加町役場
99	—	同上 本通り
100	—	樺太留多加町大豊市街の全景

表 29 市川文庫写真資料一覧 『スクラップ 10』(3)

No.	年月日	タ イ ト ル
101	—	留多加町 浜路公園
102	—	留多加 大沼公園
103	—	同上
104	—	同上
105	—	留多加大豊村付近の釣り橋
106	—	留多加町大字大豊 豊仙峡紅葉橋付近
107	—	留多加 村松忠和氏 留多加川流送中のおんこ古木
108	—	留多加牧場
109	—	留多加町 村松忠和氏庭園内に移植せんとするおんこの古木
110	—	留多加川の木材流送
111	—	留多加競馬場一周一哩

余市水産博物館研究報告第15号：33－44. Mar. 2012

ヨイチアイヌと沖の神「カムイギリ」

乾　芳宏
北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

Ⅰ はじめに

アイヌ民族の民具「カムイギリ」はアイヌ文化研究者でもほとんど知られていない。
筆者自身、平成9年（1997）に余市町で勤務し、水産博物館会議室に木製のシャチ像が掛けられていたが単なる飾り物としか思っていなかった。

ある日、余市郷土研究会の青木延広氏が博物館を訪れた際に、この木製のシャチ像は、西村エカシが製作したもので、余市においてシャチ信仰を示すカムイギリと称する貴重な資料であることを教えて頂いた。その後、北方民具研究会の難波琢雄氏を紹介して下さり、所蔵するカムイギリの実物を実見するとともに、何度か北方民族や民具などのお話を聞く機会を得た。

平成18年（2006）に特別展「海に生きるアイヌ民族」を企画・担当することとなり、現存する実物資料をこの機会に展示したい旨を難波氏に打診したところ快諾して下さり、念願であったカムイギリ2点を初めて一般公開することができた[1)]。この展示は余市地方のアイヌ資料を一同に会したものであるが、日本海沿岸のアイヌ文化を知りたい多くの研究者や一般の方々の来館があり予想外の反響があった。

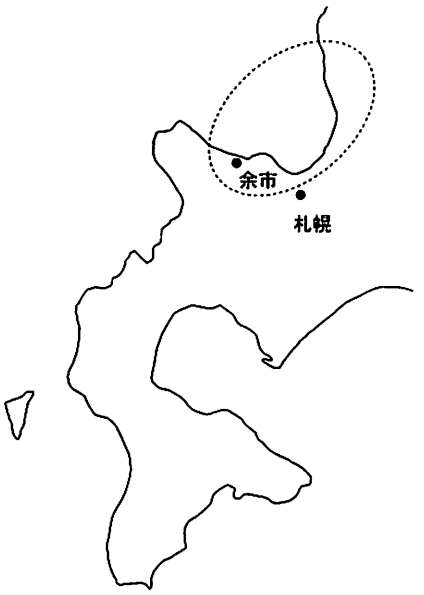
その後、平成21年（2009）に難波氏からご好意によって実物のカムイギリが余市水産博物館に寄贈され多くの方々に見てもらえるようになった。

このカムイギリについては、青木・難波両氏による資料紹介をはじめ、西村エカシからの聞き取り調査、シャチに関する民族例をふまえた考察も報告されている[2)]。

本稿では2つのカムイギリの新たな知見を加えて資料説明をするとともに、古文書および考古学から見たシャチを通してアイヌ文化との関連について若干の考察を述べたい。

Ⅱ カムイギリと関連資料

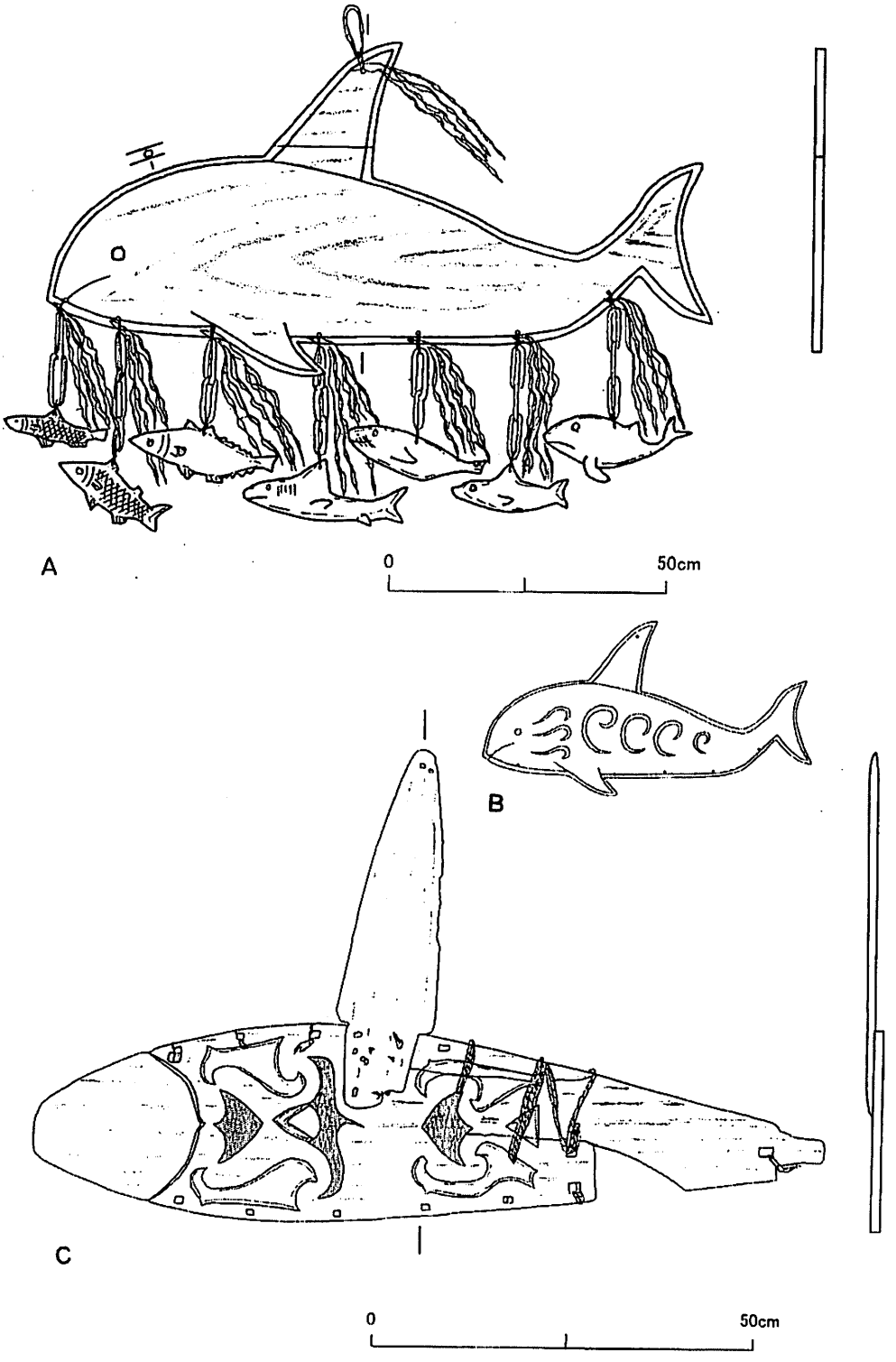
カムイギリはシャチを表現した木製の民具であり、実際に生きているシャチそのものを指してはいない。カムイギリは室内の祭壇に祀られ、豊漁を祈願するための信仰に関わるもので、レプンカムイ（沖の神）であるシャチが自分の配下である魚や海獣を従えて海の幸を授けるためにやって来るもので、それを象徴したものである。この特徴的な民具について、古くは余市から石狩地方の西海岸一帯で祀られていたものらしいが従来の民族誌では知られていない（第1図）。カムイギリの意味についてカムイ・イキリ（神の・ひと集まり）ではないかとしている[3)]。ここでは写真と実測図を掲載しながら資料についての説明をする。



第1図　カムイギリの分布推定図

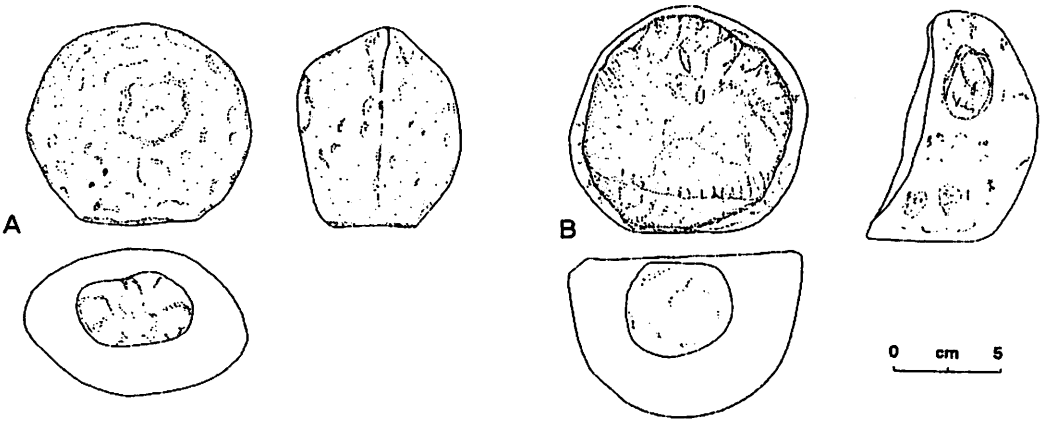
（1）資料1：復元のカムイギリ（写真1-A：第2図A・B）

西村良次郎氏が平成元年（1994）6月頃に復元製作し、水産博物館に寄贈されたものである。カツラ材の張り板を代用したもので、かつてのものはクリ



第2図　カムイギリの形態

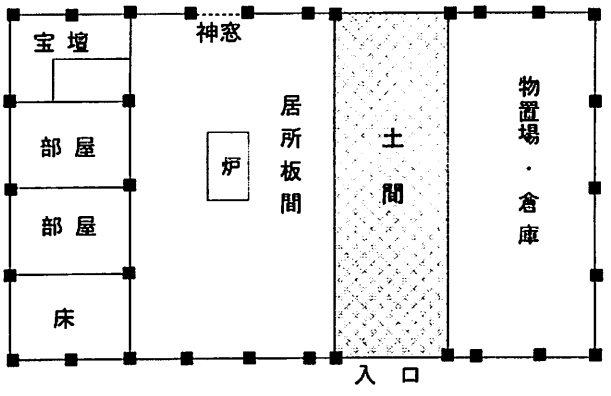
A：復元資料　　B：文様の想像図　　C：実物資料



第３図　シャチの眼
A：伝・西村家　　B：伝・違星家

材であった。長さ 120 cm、高さ 60 cm、厚さ２cmを測る。張り板であることから背びれ部分は別に作り接着剤で接合している。背びれ上部に吊下げのため１穴がありイナウキケ（削りかけ）をつけている。腹部に７穴があり、図のように左からヘロキ（ニシン）、カムイチェプ（サケ）、シビ（マグロ）、カルマ（サメ）、トッカリ（アザラシ）、タンヌ（イルカ）、フンベ（クジラ）の木彫りをサビタ（ノリウツギ）の木鎖で繋ぎ、イナウキケ（削掛け）は先端部分を木鎖を結んでいる糸に刺し込んでいる。シャチは表裏とも同様の彫刻をし、輪郭に沿って一条、そして目をまるく表現している。

以前に自宅で置かれていたカムイギリには波模様が彫られていたらしく、残された型紙から想像図を示した（第２図Ｂ）。



第４図　西村家の住居の想像図
桁間 10 間　梁間 6 間　60 坪（注２ｂより作成）

かつての西村家はカヤ葺きの大住居の構え（第４図）で、家の東北側の６畳間は神聖なイヨイキリ（祭壇）の場として、家神のイナウや宝物の行器、鉢、椀、刀剣、矢筒、首飾りなどが積み重ねられていた。カムイギリはその祭壇の上に吊り下げられたものであり、祭壇の前には漆塗りの高杯と捧酒箸、キツネとシギの神頭骨、海から拾い上げた丸石や海岸に寄る鳥形木、山海の初物が高膳にのせて供えられていたようである。

（２）資料２：実物のカムイギリ（写真１-Ｂ：第２図Ｃ）

札幌市在住の難波琢雄氏が昭和 57 年（1982）頃に骨董屋から入手したもので、平成 21 年（2009）10 月に水産博物館に寄贈されたものである。板材は広葉樹のトリネコ属で[4]、現存の長さ 108 cm、高さ 67.8 cm、厚さ２cm、背びれの長さ 41 cm、背びれの幅 13.8 cmを測り、頭部・胴部、背びれ、尾部（消失している）の３部分からなっている。頭部はアイウシ文（棘のある括弧文）の線刻で胴部と区切っている。胴部は鳥形の透かし彫で、背びれの両側に対象的に配置されている。背びれは単独で作られ、胴部とは和釘で固定しているが、基部の右部分が割れて損失しており、胴体部分にわずかにその痕跡が認められる。尾部付近は割れのため縄で縛っており、縄ずれを防ぐように背の当たる部分をわずかに凹面としている。背びれ上部には吊下げるために２穴があり、縄ずれが見られる。背部に４穴、腹部に６穴、尾部に１穴が見られるがさらに１～２穴が尾部付近にあった可

能性もある。穴はノミによるもので、長辺約 10 ㎜、短辺約８㎜の長方形をしており、穴付近にはイナウキケ（削掛け）の一部が紐で結ばれており、穴から吊下げたと思われる各種の木彫りはすでに失われている。この製作および使用年代は定かではないが、全体的に煤で黒くいぶされていること、和釘が使用されていることなどから、明治時代頃まで遡れるのではないかと考えている。

（３）資料３：シャチの眼

この資料はかつて古老がシャチの目玉として祭壇に置かれていたもので、青木氏が譲り受けたものである。使用年代については近世以降との伝承であるが定かではない[5]。呼び名から化石となったシャチの眼と思われるかもしれないが、拳大の円形をした泥岩であり、余市町内では産出しないことから遠路から運ばれたものと考えられる[6]。

Ａ：伝・西村家資料(写真１-Ｃ：第３図Ａ)

色調は灰色で、全体に光沢をもち、わずかながら凹凸がある。大きさは長径 10.5 ㎝、短径 9.4 ㎝、厚さ 7.5 ㎝、重さ 1,005ｇである。やや扁平なレンズ状で一部が平たんであるため立置することができる。

Ｂ：伝・違星家資料（写真１-Ｄ：第３図Ｂ）

色調はやや褐色で、全体に光沢をもち、すべすべしている。表面を観察すると人為的に磨いた細かな擦痕が見受けられる。半壊しているが、これも人為的に敲打したものと思える。大きさは長径 12.8 ㎝、短径 12.6 ㎝、残存の厚さ 6.82 ㎝、重さ 1,900ｇである。半割でありながら一部が平坦であることから立置することができる。

Ⅲ シャチについて

シャチは学名でオルカ（*Orcinus orca*）、俗にクジラを襲うことからキラーホエールと称することもある。日本ではサカマタ（逆戟）・クジラトオシ・シャチキリ[7]、『北海道方言辞典』[8]にはカミギリなどの名称を記している。

シャチはクジラ目ハクジラ亜目マイルカ科であり全世界に生息し、日本近海では８～11 月頃に北海道東岸やオホーツク海、２～３月は紀伊半島沖でよく見られる。海のギャングと恐れられるようにクジラ、アザラシ、イルカ、海鳥、魚、ウミガメなど様々な動物を食べる。オスは背びれが垂直に高く立ち、メスおよび未成熟個体は背びれが鎌状となり、群となって生活、移動をすると説明されている[9]。

平成 17 年（2005）２月に羅臼町相泊で起きたシャチ 12 頭の流氷による集団座礁事件は記憶に新しい[10]。

（１）アイヌ文化から見たシャチ

ここではシャチの呼称・伝承と余市における民族事例についてふれたい。

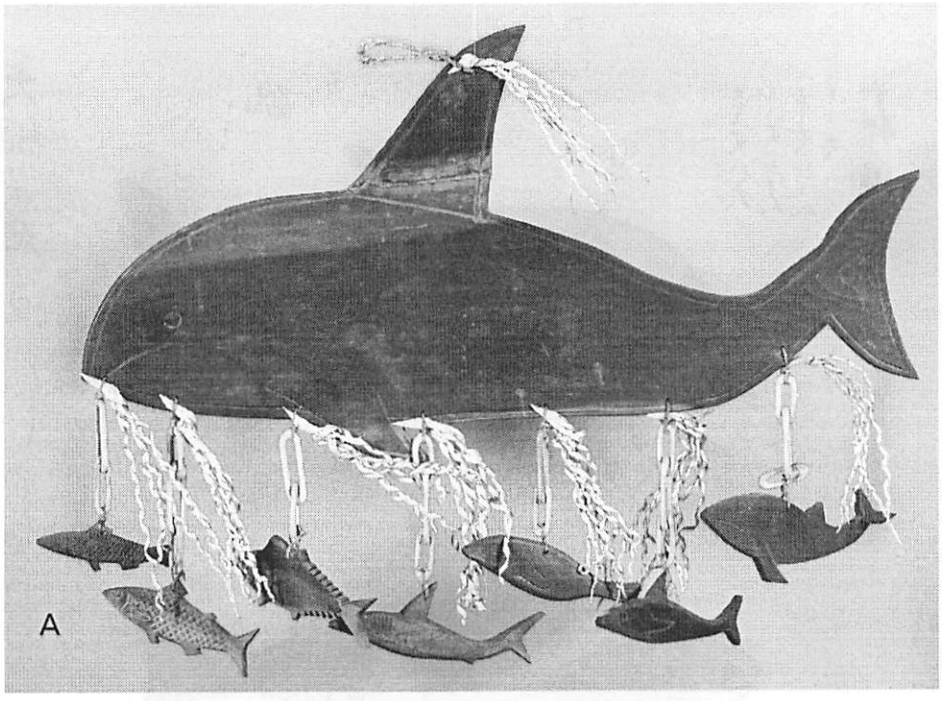
『分類アイヌ語辞典』[11]によればレプンカムイ（沖にいる神）、カムイフンベ（神のクジラ：胆振・日高）、イコイキフンベ（物をとるクジラ：豊浦礼文）、トミンカルクル（宝物・見る・神：幌別）、カムイインカルクツ（神・見る・神）、イソヤンケクル（海の幸であるクジラを浜へ上げる神：幌別）、イコイキカムイ（それ、すなわちクジラをいじめる神：長万部）、イモンカヌクル（われらの手の上をそなわす神：豊浦礼文）、カムイオッテナ（神なる頭目：豊浦礼文）、カムイチップ（神・舟）、トマリコロカムイ（入り江を支配する神：幌別））、チオハヤクル（われらがおそれる神）、アトゥイコロカムイ（海を支配する神：樺太島東海岸・白浦）など地域によって多くの呼称がある。

カムイユーカラ（神謡）には小さいシャチが鯨を獲った話、小さいシャチのオキクルミの妹神の恋する話、シャチの女神が山神の娘と格闘した末に栗鼠に化生する話、シマフクロウとシャチ神の話などの自叙伝が伝承されている[12]。いずれもアイヌの人々にとってシャチは海の神として崇められており畏敬の念がこめられていた存在といえる。

余市の例として日本海を見渡せる高台にあった豊浜稲荷神社では、境内にシャチ頭骨が２体祀られ、かつてヌサを設けカムイノミをして豊漁を祈った場所と伝えられている[13]。また余市川河口では、違星家のヌサに熊の神（キムンカムイ）と沖の神（レプンカムイ）が祀られ[14]、熊送りに使用する花矢にシャチや熊の足跡を彫刻したものを特別にカムイアイ、他はチロシと呼んで区別していたことが注目される[15]。このようにヨイチアイヌの人々は山の民・海の民であることを改めて知ることができる。

（２）古文書から見たシャチ

ここでは北海道および東北地方を対象とした近世～近代の記録についてふれる。



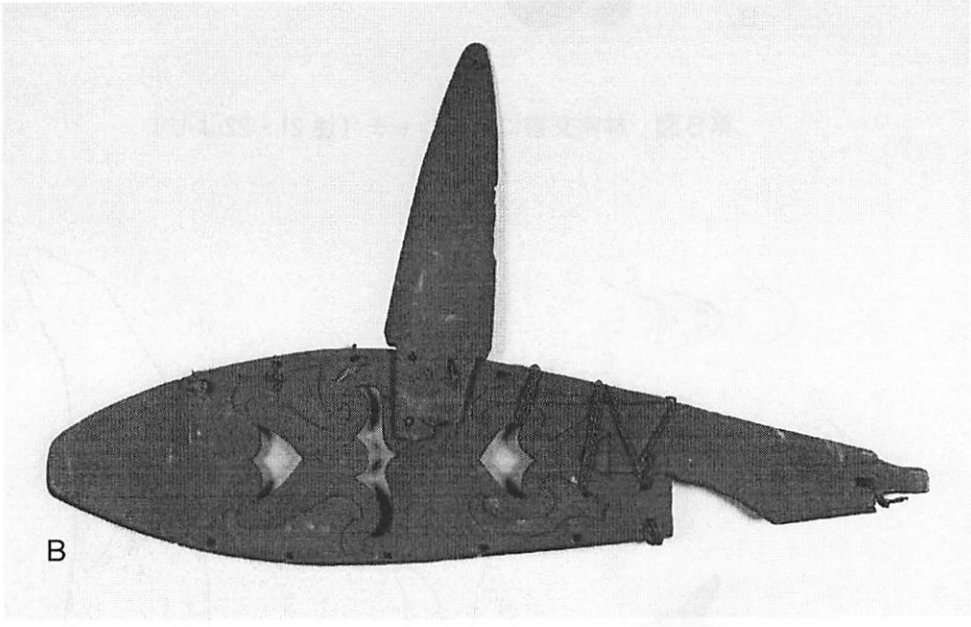
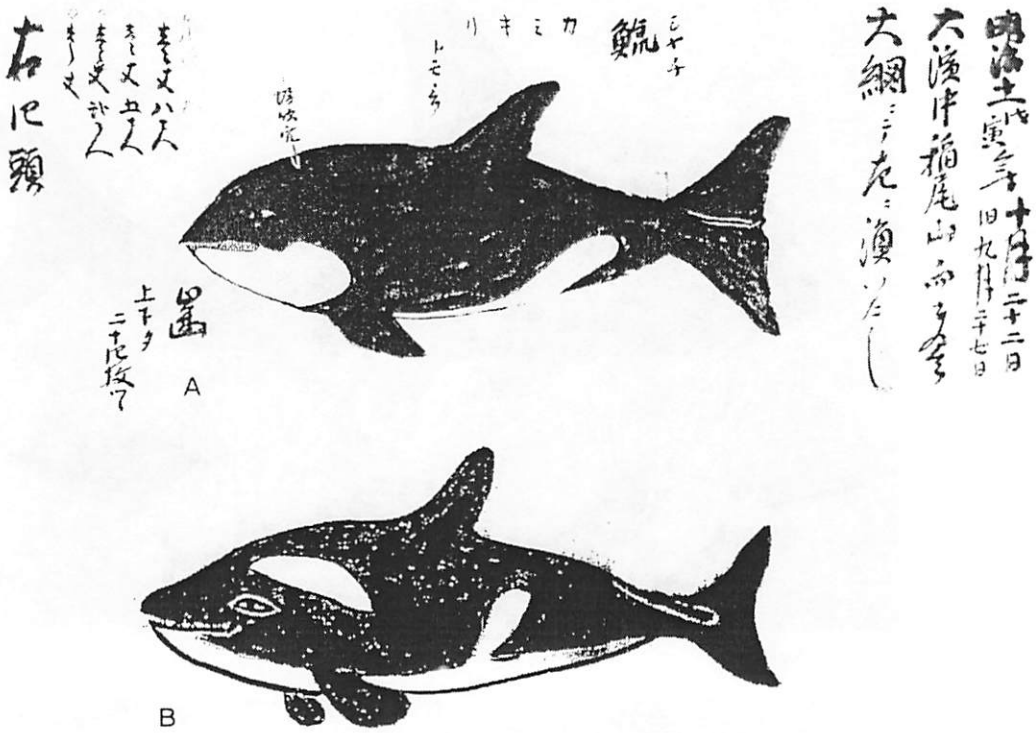
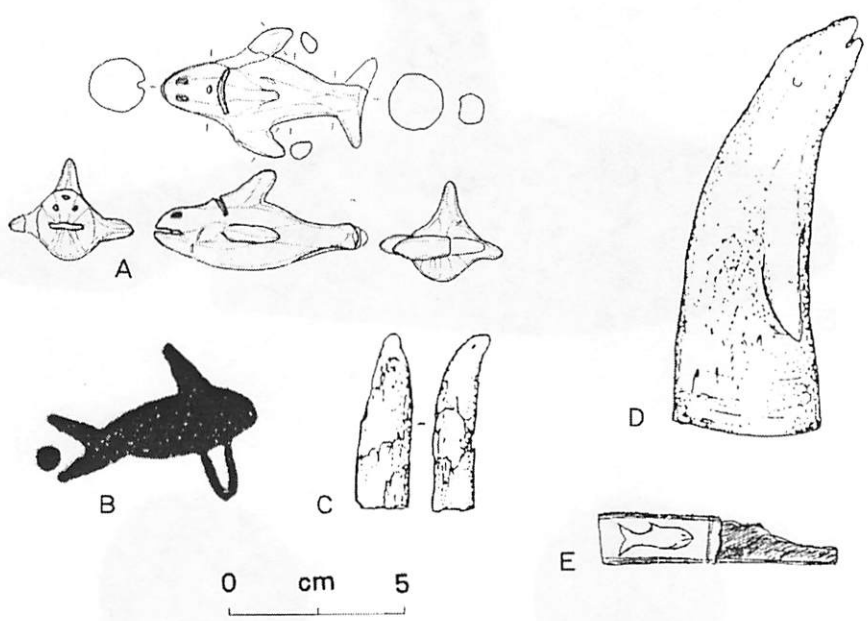


写真１　カムイギリとシャチの眼



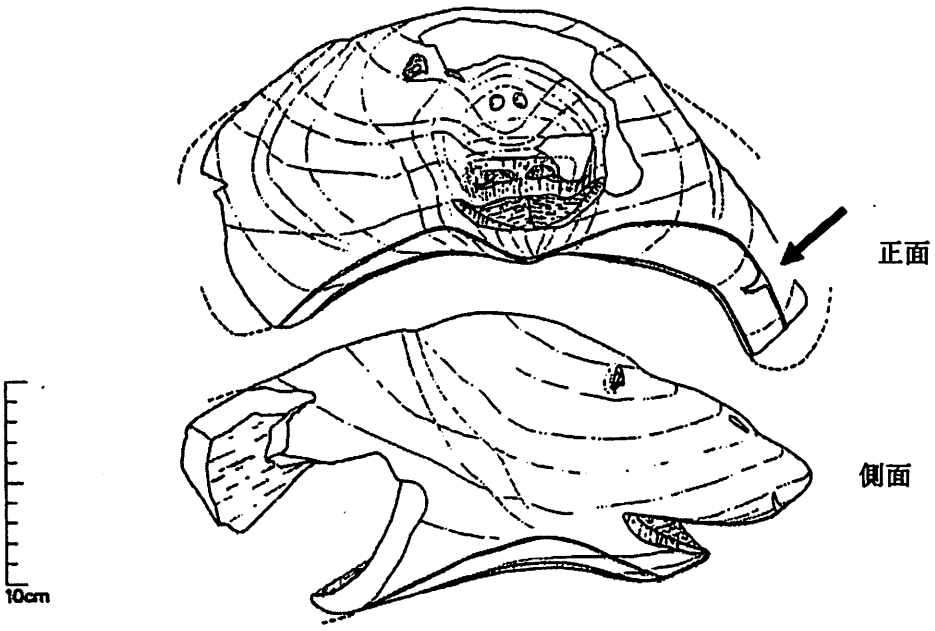
第５図　林家文書に見るシャチ（注 21・22 より）



第６図　シャチ形の考古資料

A：西桔梗２　　B：フゴッペ洞窟　　C・D：川西　　E：鈴谷貝塚

※Bのみ縮尺不統一（注 31・34・36・37 より）



第７図　熊頭付木製注口容器：松法川北岸遺跡

１）北海道の記録

正徳五（1715）年『松前志摩の守差出出候書付』[16]によれば「一　蝦夷人鯨取候儀、皆寄鯨にて御座候。カミと申す魚イルカに似申候て、尾ひれ長き魚にて御座候。尤大小御座候。此魚に切られ候鯨、蝦夷地へ流寄申候。又熊野浦のもりつき候鯨、此己前流れ寄り候儀も御座候。カミと申す魚多く有之候て切候故、死鯨多く流寄申候。惣て蝦夷人水練達者習に有之候間、蛔等のもの取候事御座候」とある。

元文４年（1739）『北海随筆』[17]には「一、東海にヲキナと云魚有。其大さ何程と云事を知らず。鯨を呑むと云り。春夏は南え出て秋より北海え帰る。東蝦夷の漁船共は度々出合て是を知れり。浮上る事は稀なり。海底雷のやうに鳴て波浪あらくなり鯨東西に走る時は翁来ると知て猟船共はやくにげ帰るとなり。まれに浮みたる時見れば大なる嶋三つ四つ出来たるごとくに成は背の中ひれなるべし。全体を見たる者はなしと蝦夷云り。又カミキリと云魚有て鯨を切て喰ふ」とある。

天明元年（1781）『松前志』[18]には「カミ　此魚の大洋中にあり。夷方これをフンベと云。カミとは方俗の称せる也。白石これを剣魚とす。東部シブサリ辺の蝦夷はこれをシイタムコルペと云。此魚群りて生鯨を食こと禽獣に虱の生ずる如しと云。また舟をもくひきると云へり。鰭ありて逆立り。大鯨もこれが為に死して海浜に漂着す。方俗カミキリ鯨と云。其大なるは一丈にちかし。按るに是即ちしゃちほこ鴟尾なるべし。今魚虎をシャチホコと訓ずるは非なりと篤信云へり。或云シャチホコは龍頭魚なりと、未詳。或云、此魚小魚なりと、疑くは誤りならん。夷地東部アッケシの蝦夷カミ魚の牙なりとて所持せるを予求めたるに、小物にあらざるなり。」

寛政２年（1790）『蝦夷国風俗人情之沙汰』[19]では「ヲゴン、テンケチロンノブ、レプンカムイ、トワユク、コシコンブ、イカラカモイ、ネハイコイキカモイ、イチムケ、フンベコイキ、九種類皆イルカなり」とある。しかしその中にはシャチが含まれていることは明らかである。

明治２年（1869）『恵曾谷日記』[20]には「イルカはカミキリといふ魚（シャチの事なり）に追われて、岩に上りたるをノットの者は獲たりとて持ち出す。

丈六尺斗なり。直ぐにに出すに油過て食ひがたし。油を取りたる品は味至ってよし。燈油は平為　魚油用ゆるに臭ひあしく、且暗し。イルカの油は臭ひなし。色澄て水の如し。燈も殊の外明らかなり。鯡の油も早取りの文は至ってよし」とある。

余市の林家文書では明治 11 年（1871）10 月に福山の林御店に報告したシャチ４頭の記録がある。「番外　一筆啓上仕候、然者今朝迄　鮭水上高七百九束、ブリ廿九束半、取揚申候、右是迄申上候分、正ミ之所ニ而聊掛直無御座候間、其御思召ヲ以外方へ御都合克御噺合　可被告遊候、但し塩フリ壱本廿銭位之平均ニ可相成候、是ハ百束ニ而百石目ニ御座候、一、昨廿二日之新聞申上候、大浜中イナヲ之下ニテ大引網へ鯱四頭入込、其侭引揚ケ申候、　尤異名カミキリ又ハカモイ鯨トモ申候、風味くじらより二、三等上り、網之内ニテ至テオトナシク、即日身卸シ三半船ニ而　三バイ相廻シ申候、生ニ而　大賣小賣致シ塩モ致候　委細絵図面ノ通り、凡そ代積り、左に、　一、三半船三そう　平均三十石目ニして石九十石目也、此目形三千六百貫目　値段十貫匁五円ニして代金千八百円也　右何卒此通にうる賣れば宜敷候得共、無覚奉存候、○朱引の内　○四尋壱本　○三尋壱本　○二尋壱本　○弐尋壱本　合四尾　○ハ△不残如此ニ御座候、恐惶謹言　十月廿三日　元小屋　忠治郎」[21]（第５図Ｂ）とある。この記録は北海道開拓記念館蔵の林家文書にも残され「明治十一戌寅十月二十二日　旧九月二十七日　大浜中稲尾山向おゐて大網ニテ左ニ漁いたし　鯱　カミキリトモ言・・・朱引之内　○壱丈八尺　○壱丈５尺　○壱丈弐尺　○壱丈　右四頭」（第５図Ａ）[22]と大きさについて詳細にふれている。

２）東北地方の記録

南部藩の歴史家であった横川良助の記録には元禄四年（1691）五月「去る二十日田名部岩屋村ほろへ川浜へ　たかかうじとも神魚ともいふ魚落候而寄候付　御代官共より見分遣候へは　長四尋二尺　口広サ一尺八寸　手かい長五尺　せひれ同四尺　えひ尾広六尺二寸　但頭ノ方に塩吹有之　鯨の様子之由右之魚入札　一両三歩五分七り落札にて払御定の如く代金は半分御取上之　半分は所之者に為取之」[23]

弘前藩庁日記には天和三年（1683）閏五月「一、三馬屋江鯨寄候由申来候、右之鯨神きりニ而少々よハリ申候か、狄共見当切殺候由、則右之鯨拾駄計狄共に切せ置候由申来之」[24]とある。

上記の史料から北海道および東北地方ではシャチをカミ、カミキリ、カモイ鯨、たかかうじと呼びアイヌ語名も記されていることが確認できた[25]。林家文書からはシャチの絵図をはじめ、肉についてクジラよりも美味しく、塩蔵にして売買をしようとしていることが読み取れて興味深い。

（３）考古学から見たシャチ

ここでは北海道における縄文～オホーツク文化における人々とシャチとの関わりについてふれる。

考古学的に見た場合、貝塚から出土した動物遺体や意匠遺物等から狩猟、漁撈活動を推測することとなる。時代および地域的に調査された西本豊弘氏によれば、縄文～続縄文文化の内浦湾沿岸ではオットセイ・イルカ・クジラ、津軽海峡沿岸ではオットセイ、日本海沿岸ではオットセイ、オホーツク沿岸ではオットセイ・トド・アシカ・イルカ類、太平洋沿岸ではオットセイ・トド・アシカ・イルカ類が多く出土している。イルカ類はリクゼンイルカ・カマイルカ・ネズミイルカなどを捕獲していた可能性がある。オホーツク文化ではオットセイ・イルカ類・クジラ類が多い。カマイルカ・イシイルカ・ゴンドウクジラ等の小型の歯クジラ類・ザトウクジラ・セミクジラの大形ヒゲクジラ類も意図的に捕獲されていた可能性を指摘している[26]。しかし、シャチについては確認されいないことから、あえて捕獲することはなかったと考えたい[27]。

海棲哺乳類の頭骨を埋葬した遺構も報告されている。縄文早期～前期の釧路市東釧路貝塚では５頭のネズミイルカ頭骨の嘴を内側に向けて放射状に並べられた状態で発見された[28]。続縄文時代前半の豊浦町礼文華貝塚では積石の下に直径１m、深さ 20 cmの土坑に５頭のイルカ頭骨を並べ上部に積石が見られた。近くでは配石の中にクジラの脊椎骨が置かれていた状態で発見されている[29]。また縄文後・晩期になると墓坑の遺体頭部からサメの歯が検出されることもあり、サメの歯を装着した被り物が推測できる。恐らくサメの強靭さや生命力に預ろうとしたものではないだろうか[30]。

シャチの意匠遺物についてはゴンドウクジラやイルカ等と類似しているため背びれなどの特徴が誇張されない限り特定は難しい。

縄文時代では函館市西桔梗２遺跡（第５図Ａ）[31]

のシャチ形土製品がある。縄文中期に相当する竪穴住居の覆土から出土した 6.2 cmの小型土製品で、目・噴気孔、背びれを強調するなど写実的な作りとなっている。他に八雲町コタン温泉、伊達市北黄金遺跡の土製品が知られるが破片のために特定は難しい[32]。

続縄文時代では函館市（旧恵山町）恵山貝塚の骨角器[33]、余市町フゴッペ洞窟（第６図Ｂ）[34]の岩面刻画に海獣やクジラ類らしい彫刻が見られる。後者はシャチの背びれを表現しているようにも見れるのでその可能性は高いと思われる。

擦文文化では意匠遺物そのものが希薄であり、クジラやシャチについては現在のところ発見されていない。

オホーツク文化では、シャチとして湧別町川西遺跡のシャチ上半身部を丸彫りした骨製品の彫刻（第６図Ｃ・Ｄ）[35]が知られるがやはり微妙に特定は難しい。しかし、この文化では根室市弁天島・礼文島香深井Ａ遺跡出土の骨製針入に描かれた捕鯨の刻線画、利尻富士町亦稚内貝塚出土のクジラを多数浮き彫りにした角製品などに見ることができることから、比較してみるとシャチの可能性が高いと思われる[36]。羅臼町松法川北岸遺跡[37]では、クマ頭状の木製容器の側面にシャチの背びれに似た彫刻文様が見られる（第７図）。また、同時代と思われるものにサハリンの鈴谷貝塚出土の骨製針入がある。刻線でシャチを描いているように思える（第６図Ｅ）[38]。

上記の例から、シャチの遺体については確認できないが、少なくともクジラやイルカの送り儀礼は行なわれていた可能性がある。また西桔梗２遺跡の土製品はシャチと推定できる唯一の全身像であり、豊漁や漁労の安全を祈ったものと考えたい。

Ⅳ まとめ

シャチについては獰猛なイメージをもつ人が多勢であるが、オオカミのように人間には危害を加えた記録はほとんど無い。アイヌの人々にとって多くの魚や寄りクジラなどを与えてくれる沖の神であり、海洋生物として食物連鎖の頂点に君臨しているのである。

考古学的に見るとシャチとの関わりは縄文時代まで遡れるもので、クジラやイルカなどの海棲哺乳類の葬送儀礼がすでに行われていたのである。

シャチについて史料を通して見てきたが、カムイギリの名称については伝承以外に確認はできない。現存するカムイギリは２点にすぎないが、形態からＡ型（資料１）、Ｂ型（資料２）と分けるとシャチの背びれ観察から前者はメス、後者はオスと識別ができる。

かつては余市から石狩湾地方沿岸で祀られていたようであるが、他での類例は知らない[39]。こうした現状をふまえるとシャチへの信仰は全道的に見られるとしても、カムイギリを製作する地域は限られており、アイヌ文化の地域性を考慮する上で極めて重要な資料と言える。

アイヌ文化における漁猟の儀礼として、噴火湾沿岸の長万部コタンにおける豊漁へのカムイノミやクジラ送り（祭り）の例が興味深い。家の内と外で行われるが、外では浜辺に作ったピシュンヌサの前で執り行われる。シャチであるカムイフンベ・レプンカムイは兄弟２柱となっていて兄神はシハチャクル、弟神はモハチャクルと呼び、それぞれにシノイナウを捧げている。クジラ送りではクジラの頭骨を沖に向けて安置し、儀礼が進められており、余市における豊浜稲荷神社境内でのカムイノミと相通じるところである[40]。またパスイ（捧酒箸・捧酒箆）の多くにアシペと呼ばれるシャチの象徴である背びれを彫刻した例が多く見受けられる点[41]や花矢に見られるシャチの彫刻[42]などは見逃すことはできないだろう[43]。

北海道でのシャチ送りは知られていないが、サハリン東海岸のニブフではシャチ送り儀礼が記録されているようである[44]。また間宮林蔵の『北蝦夷図説』[45]のスメレンクル夷の部には「海岸に魚獣の首を供し、木幣を添えて、海神を祭ること蝦夷のごとし」と記されており、北海道でも沿岸地域ではそうした光景が見られたと推測できる。

和人側からすると、シャチよりもクジラに重点を置き、恵比寿（恵比須・エビス）と呼び豊漁の神様とするところが多い[46]。

アイヌ文化と言えば熊送り（イオマンテ）がよく知られており、余市においても例外ではない[47]。その背景には定期的に熊を捕獲して、集落が一体となって行う盛大な儀礼であるために、和人には異質な慣習として注目されたこと、さらに北海道観光の見世物としていた面も大きく左右していると思われる。一方、シャチとの出会いは偶発的なものであり、送り儀礼はより格式の高い厳格なものであるために、

和人はその場面に遭遇することはほとんどなかった。さらに家に祀られたカムイギリも人目につくことなく世代交代とともに伝統的な儀礼が絶たれ、物送りされながら次第に消失したと思われる。

現代に甦ったカムイギリは、往古の海に生きたヨイチアイヌを彷彿させるもので、信仰の一端を知ることのできる貴重な資料と言っても過言ではないだろう[48]。

以上のようにシャチとカムイギリについて記してきたが、まだまだ情報や資料不足であることは否めない。多くの方々からご教示などを頂ければ幸いと思います。

この小文をまとめるにあたり藪中剛氏（新ひだか町教育委員会）には写真撮影、山下明子氏（余市水産博物館）に図面作成の協力を得た。また、難波琢雄氏（北方民具研究会）、青木延広氏（余市郷土研究会）、古原敏弘氏（北海道アイヌ文化研究センター）、水島未紀氏・三浦泰之氏（北海道開拓記念館）、田口尚氏（北海道埋蔵文化財センター）、新美倫子氏（名古屋大学）には多くのご教示を頂きましたことに紙面を借りてお礼申し上げます。

（引用文献）

1) 余市水産博物館　2006『第32回余市水産博物館特別展図録～海に生きるアイヌ民族』

2) a：青木延広　1990「ヨイチアイヌの民俗「カムイニリ」について」『北海道の文化』61
青木氏によればカムイギリであるとのことであった。
b：難波琢雄・青木延広　1992「沖の神（シャチ）とカムイギリ」講義配布資料
c：難波琢雄・青木延広　2000「沖の神（シャチ）とカムイギリ」『北海道の文化』72

3) 注２Ｃと同じ。

4) 北海道埋蔵文化財センター　田口　尚氏の樹種同定によるとハリギリ（別名セン）の可能性が高いらしい。
この木はとても素性がよく板材に適している。

5) 福岡市博物館　2001『日本とクジラ』特別企画展図録
担当した島巣京一氏はこの企画展（平成23年９月17日～11月６日）でシャチの眼２点を一般公開した。
因みにパンフレットには世界初公開として西村家の伝世品を写真掲載している。

6) 千歳化石会の浅野渓氏によれば資料Ａは化石を含むノジュールではないか、資料Ｂは半割の肉眼観察から生痕化石を含むノジュール推測している。内部は灰色で、外部が褐色である色調の変化について、ノジュールの成長過程を示すものと説明を受けた。

7) a：平凡社　2005「シャチ」『世界百科事典』
b：小学館　1989「シャチ」『日本大百科全書』
c：小学館　1974「シャチ」『日本国語大辞典』

8) 石垣福雄　1983『北海道方言辞典』（採集・戸井とある）

9) a：平凡社　1986『動物大百科～海生哺乳類』２
b：学研教育出版　2010「シャチ」『日本の哺乳類』
c：トマス・Ａ・ジェファーソン他　1999「シャチ」『海の哺乳類～FAO種同定ガイド』

10) 石名坂　豪・佐藤晴子　2011「知床羅臼のシャチ」『モーリー』23

11) 知里真志保　1962『分類アイヌ語辞典～日本常民文化研究所彙報』87

12) a：久保寺逸彦　2004「神謡19　小鯱の神の自叙」『アイヌの神謡』
b：　同　上　2004「神謡20　小鯱の神の自叙」　同　上
c：　同　上　2004「神謡21　鯱の女神の自叙」　同　上
d：1989「しまふくろうと鯨」『日本昔話通観～北海道（アイヌ民族）』1
e：知里幸恵1923「海の神が自ら歌った謡」『アイヌ神謡集』（郷土出版社2002『アイヌ神謡集』復刻）
f：四宅ヤエ・藤村久和・手島圭三郎『カムイチカプ』

13) 水島未記　2001「余市町豊浜の稲荷神社に置かれて鯨骨」『北海道開拓記念館調査報告』40

14) a：名取武光・犬飼哲夫　1939「イオマンテ（アイヌのクマ祭）の文化的意義とその形式（1）」『北方文化研究報告』２
b：同　上　1940「イオマンテ（アイヌのクマ祭）の文化的意義とその形式（2）」『北方文化研究報告』３

15) 名取武光　1985「アイヌの花矢」『アイヌの花矢と有翼酒箸』

16) 「松前志摩の守差出候書付」（1982高倉新一郎編『犀川会資料』）

17) 板橋源次郎　「北海随筆」(1969『日本庶民生活史料集成』4)
18) 松前廣長　「松前誌」(1972 大友喜作編　『北門叢書』2)
19) 最上徳内　「蝦夷風俗人情之沙汰」(1969『日本庶民生活資料集成』4)
20) 山田民弥　1869『恵曾谷日記』弐 (12 月 26 日記) 北海道立図書館蔵
21) 林家文書：所在不明であるが講座「鯨四頭捕獲始末記」として使用
22) a：北海道開拓記念館蔵　2007「鮭水揚留」『林家文書目録～北海道開拓記念館一括資料目録』38
三浦氏によれば北海道におけるシャチの混獲に関する最も古い記録ではないかと指摘している。
b：北海道開拓記念館　2007『第 63 回特別展～鯨』に掲載
23) 横川良介　「内史略」(1973『岩手史叢』2)
24) 弘前藩庁日記・御国日記」(2001『青森県資料編』近世 1)
25) シャチの呼び名は種々あるにもかかわらず、カムイギリについて文献上では確認することが出来ない。しかし、和人とアイヌ民族とが混在する中で、発音の問題としてアイヌ語でも理解できるが、和語のカミキリがカムイギリに転化した可能性もあるのではないかと思っている。
26) a：西本豊弘　1984「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈」『国立歴史民俗博物館研究報告』4
b：同　上　1985「北海道の狩猟と漁撈活動の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』6
c：同　上　1984「オホーツク文化の生業技術」『考古学ジャーナル』235:
27) a：名取武光　1939「噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』2
この中でアイヌの人々はカムイフンベ (シャチ) には銛を附けてはならないと記している。
b：名取武光　1969「アイヌの捕鯨」『アイヌ民族誌』
28) 沢　四郎　1969「釧路川流域の先史時代」『釧路川～その自然と生活』
29) 峯山　巌　1992「礼文華貝塚」『考える葦』
30) 宮　宏明・青木　誠　1994「サメの歯とサパンペ」『動物考古学』2
実際にアイヌ民具としてサメの歯を使用したサパンペ (冠) が現存している。
31) 北海道埋蔵文化財センター　1987『西桔梗 2 遺跡』北埋文 46
32) a：八雲町教育委員会　1992『コタン温泉遺跡』
b：伊達市教育委員会　1998『北黄金貝塚遺跡』
c：佐藤智雄　1998「北海道の動植物を意匠とする製品」『東北民俗学研究』11
33) 佐藤智雄・五十嵐貴文　1996「能登川コレクションの骨角器について」『市立函館博物館研究紀要』6
34) フゴッペ洞窟調査団編　1970『フゴッペ洞窟』
35) a：米村喜男衛　1956『北海道紋別郡湧別町川西遺跡』網走郷土博物館シリーズ 1
b：大塚和義　1968「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』11
36) 宇田川　洋　2001「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『アイヌ考古学研究・序説』
37) a：羅臼町教育委員会　1984『松法川北岸遺跡』
b：湧坂周一　2012「北の人びと」『モーリー』26
38) 名取武光　1936「北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相」『北大農学部附属博物館』1－34
(1972『アイヌと考古学』I 所収)
39) a：北海道立アイヌ民族文化研究センター　2005『北海道立アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書～ピリカ会関係資料の調査研究』1
ピリカ会資料の中に魚形の木製品 2 点 (シャチ？、ハリセンボン？) が含まれているが、カムイギリとは形態や製作技法が相違する。
b：東京国立博物館　1992『東京国立博物館図版目録～アイヌ民族資料篇』
40) 注 27 と同じ
41) Fosco　Maraini　1942『Gli iku-bashi degli Ainu』(フォスコ・マライニ　1994「アイヌの象徴文様」『アイヌのイクパスイ』財団法人アイヌ民族博物館編)
アイヌにとってシャチは勇気と勇敢を伴った自然力の総体であり、背鰭が武器と考えていると説明している。
42) 注 15 と同じ
43) 河野広道　1936「アイヌとトーテム的遺風」(1971『北方文化論』1 所収)
河野氏は民俗調査からレプンカムイについて、本文中は「シャチ」と書いているが「必ずしも鯨を指すものではなく、イルカやメカジキを総称している」と記している。
44) 佐々木史郎　2007「北方地域における熊送り儀礼」『アイヌのクマ送りの世界』
45) a：間宮林蔵　「北蝦夷図説」(1972『北門叢書』5)
b：加藤九祚　1986「ギリヤク」『北東アジア民族学史の研究』
46) a：谷川健一　1993「海彼の来訪者」『海と列島文化～漂流と漂着』
b：秋道智彌　1994『クジラとヒトの民族誌』
47) 乾　芳宏　2011「余市における熊送り」『余市水産博物館研究報告』14
48) アイヌ民族の漁撈活動は明治政府の政策によって大きく変貌した。場所請負制度の廃止、漁業組合準則 (明治 19 年)、漁業法 (明治 39 年) などがその大きな要因となっている。

（参考文献　50音順）

秋野茂樹　2008「場所請負制とアイヌの熊の霊送り儀礼」『帯広市百年記念館紀要』6
池田貴夫　2009『クマ祭り』
板橋守邦　1989『北の捕鯨記』
乾　芳宏　2003「記録に見るヨイチアイヌの民族誌」『余市水産博物館研究報告』6
　　2008「余市アイヌの歴史的研究」『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』7
岩崎グッドマンまさみ・野本正博　2000「アイヌ民族とクジラとの関わり」『モーリー』2
亀山慶一　1986『漁民文化の民俗研究』
菊池勇夫　2002「石焼鯨について」『東北学』7
木村信六　1938「樺太における動物意匠遺物」『郷土樺太』
古原敏弘　2010「余市水産博物館所蔵のアイヌ資料」『北海道アイヌ民族研究センター研究紀要』16
更科源蔵・更科 光　1976「シャチ」『コタン生物記～野獣・海獣・魚族篇』Ⅱ
坪井正五郎　1909「鯨捕りの有様を彫刻した石器時代の遺物」『東洋学芸雑誌』26―330
樋口英夫　1992『海の狩人～日本の伝統捕鯨』
平口哲夫　2003「縄文～古代捕鯨と食の多様性」『第1回長門開催の記録・日本伝統捕鯨地域サミット』
北水協会編纂　1935『北海道漁業志稿』
松下　亘　1968「北海道とその隣接地域の動物意匠遺物について」『北海道考古学』4
森　浩一・野村 崇　1988『日本の古代遺跡～北海道Ⅰ・Ⅱ』
森田勝昭　1994『鯨と捕鯨の文化史』
余市教育研究所　1966『余市郷土史1～余市漁業発達史』
余市郡漁業協同組合　1979『余市郡漁業協同組合創立百周年記念誌』
渡辺　裕　1992「アイヌの海獣狩猟」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1

余市水産博物館研究報告 15 号：45 - 52. Mar. 2012

余市町沢町遺跡　ＧＰ－20 墓壙出土の徳利形土器について

複製土器製作時の考察雑感

佐藤　美智雄
小樽市長橋２丁目 23 番 11 号

Ⅰ　はじめに

余市水産博物館に、不思議で魅力的な土器が展示されている。北海道の縄文土器に関する書籍には、よく写真が掲載される有名な土器である。

その土器は余市町沢町遺跡のＧＰ－20 墓壙より出土の土器で、「徳利（とっくり）形土器」と呼ばれる。（図－３）

この土器は縄文時代晩期前葉の墓壙から出土し、現在のところ北海道はおろか東北地方からも同形土器の出土はない。

同じ様な土器の出土がないためか「他の地方より、成品として持ち込まれた」とか「持ち込まれ土器の伝世品」など等の意見があるようである。

現在、縄文土器の製作工程も大部分が解明され、各地で土器を製作されているグループや趣味として、個人で製作されている方も多い。

かくゆう私もその一人で、仲間と毎年のように「よいち縄文野焼きまつり」[1]へ参加し、また機会があれば「江別土器の会」[2]の野焼きに参加させて頂くこともある。

私が複製土器に挑戦しようと思ったきっかけは、江別の土器会で活動している方の作品を頂き、その精巧さと、美しさに感動し、自分も土器をつくって見たいと思ったからである。

それまでは赤井川産の黒曜石を追跡調査し、石器の製作を中心に活動し、赤井川産黒曜石出土遺跡の北限、南限調査に、妻と二人で東北地方まで数回足を延ばしている。

しかし、各地の博物館、資料館で出会う縄文土器の素晴らしさに徐々に虜になり、大麻３遺跡で出土した「室谷下層式」出土の洞窟見学だけに、新潟県と福島県の県境まで山道を２時間かけても行くまでになった。

Ⅱ　余市町沢町遺跡について（図１）

（１）概要

余市町は小樽市、仁木町、古平町、赤井川村に接しており、積丹半島の東側付け根に位置し、石狩湾を望んでいる。2012 年２月現在、63 箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在し研究者が注目する遺跡も数多くある。沢町遺跡は余市町沢町 162 番地に所在し、農道の整備事業により、余市町教育委員会が発掘調査を行い発掘調査報告書を発行している。[3]

１）立地

遺跡はヌッチ川支流、中島川の右岸に位置し、標高が 113.8 メートルの通称「時田山」付近にある。

報告書によると「当初の予想を大幅に上回る遺構、遺物」に恵まれ、擦文時代の竪穴住居址４軒、縄文時代晩期前葉の墓壙 163 基が検出されている。海岸から直線でおよそ 1.5 キロメートルで、この距離に擦文時代の集落が営まれるのは多くないようだ。「遺跡の範囲数万㎡と予想され、調査部分は一部分にすぎない」と結語されている大遺跡であり、遺跡の主体年代は「縄文時代晩期」とされている。

２）出土遺物

遺跡より出土遺物は調査発掘の範囲を考えると膨大で、夥しいと表現されるにふさわしい量・質である。

図１　遺跡の位置

墓壙から新潟県糸魚川産のヒスイ玉類、石器（石鏃・石槍・ナイフ・錐・つまみ付ナイフ・掻器・石斧・石棒・石刀・石冠・擦石・砥石・石錘・石皿・敲石）等と動物遺体・種子等々の合計11万点とされるが、「結語」で控えめな数字であると報告されている。

本テーマ土器以外では、中期の円筒土器上層ｄ式、トコロ６類、小島の沢Ｉ式が、後期の土器では、涌元Ｉ式、入江式、ニセコ式、堂林式などが、擦文文化期の擦文土器、本遺跡では一点のみの出土である土師器の報告がされている。

（２）ＧＰ－20墓壙と徳利形土器

縄文時代の「お墓」の詳細は別の機会に譲るが、墓は死者が納められる、諸々の施設及び場所である。そして埋葬の仕方を「葬法」といい、縄文時代の墓の多くは「土坑墓」という。

地面に直接「穴」を掘り、そこに遺体を埋めるシンプルなものであり、おそらく墓穴（墓壙）の真上の部分に盛土をした程度のものだったと考えられている。お墓の大きさは遺体の埋葬姿勢によって変るがＧＰ－20墓壙（図２）はこの発掘では、２番目の大きさの「お墓」で、その規模は196cm×147cmである。

図２の中央に黒く示されている部分はベンガラ[4]が敷かれている部分である。墓壙からは本テーマ土器のほか、黒曜石の石器と大洞式Ｂ式あるいはＢＣ式土器の出土もある。ちなみに本調査で検出された、最大の墓壙はＧＰ－80である。規模は288cm×229cmで、土器、石器、玉などが副葬され、覆土上部からは1000点を超える遺物、土器が出土している。

ＧＰ－20墓壙について、報告書ではこの墓を「集団において中心的な役割を担った人物」と、また結語では「徳利形土器」を実用品ではなく「墓域共伴の特異な土器」としている。

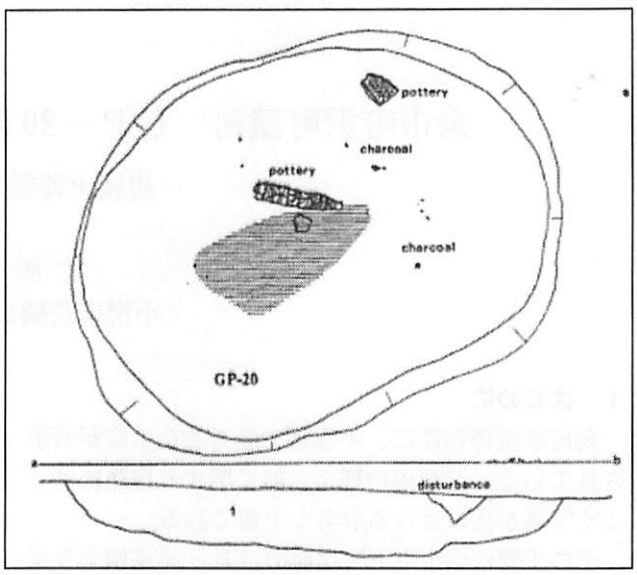


図２　ＧＰ－20墓壙

Ⅲ　徳利形土器のコピーを作る

（１）　土器の観察

この土器は亀ヶ岡式系の羊歯状文、弧線文などが施されており、大洞ＢＣ式に比定される。赤色に彩色・磨かれたバランスのとれた美しい土器である。

文様構成については以下のとおりである
（各図の縮尺は適宜）

文様帯は胴部に施され、３本の横走沈線で区切られており、底部と頸部上半は無文である。
文様は類似している①④と②③⑤～⑧２種類と⑨と⑩の文様の合計４種類で構成されている。

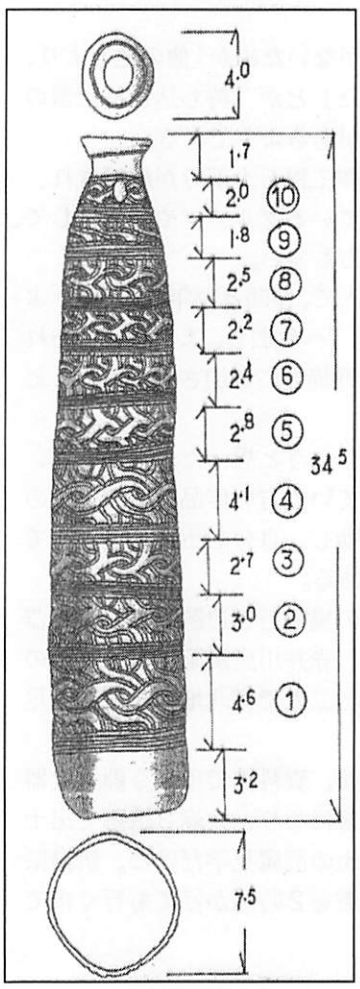
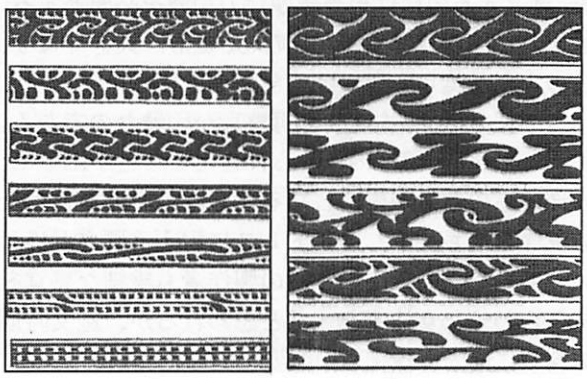
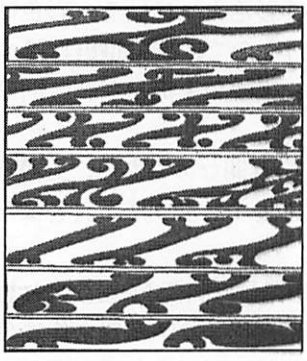


図３　徳利形土器（単位cm）

図３は報告書と復元資料をもとに，筆者が再計測した図である。図は適宜に縮尺してある。
○で囲んだ番号は文様帯を便宜上区分したものである。
報告書には表裏の図と器厚が表記された図が記載されているが本文では掲載を省略した。
各部の数値は以下の通りである
器高　34.5cm
底径　7.5cm
口径　4.0cm
器厚はおよそ3mm程度で，胴部表面に刻線（沈線）で文様が施されている。



（入組文）　　（羊歯状文）



（雲形文）

他に
・巴状文　・半円文
・弧状文　・X字状文
・工字文　・K字文
・大腿骨状文
・三叉状入組文
・平行沈線
・刻目又は列点文
等が知られている。

図４－亀ヶ岡式土器の基本文様[5)]

1）文様帯　①④

下部文様が中心で上図が完成文様である。

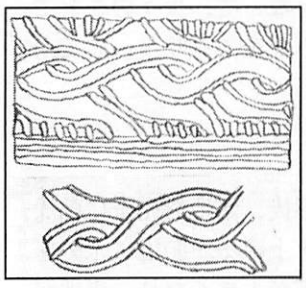


図５

・文様帯①の周は 23cm で約5.0cmの文様が６回出現する。（文様が重なっているために出現回数と周は合致しない以下同じ）文様帯幅は約 4.5cm である。

・文様帯④の周は 22.0cm で上部が少し歪になっており 5.0cm の文様が 6 回出現し、文様帯幅は 4.1cm である。

2）文様帯②③、⑤～⑧

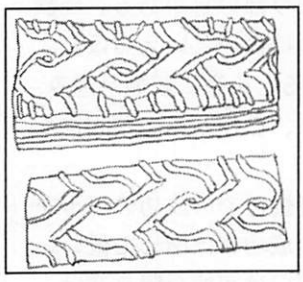


図６

・文様帯②の周は①と同じ 23.0cm で，4.5cm の文様が 7 回出現する。文様帯幅は約 3.0cm である。・文様帯③の周は 22.2cm で，2.8cm の文様が 8 回出現し，文様帯幅は 2.7cm である。

・文様帯⑤の周は 20.5cm、3.5cm の文様は８回出現し　文様帯の幅は 2.8cm である。

・文様帯⑥の周は 20.4cm、3.4cm の文様は８回出現し文様帯の幅は 2.4cm である。

・文様帯⑦の周は 19.1cm、3.5cm の文様は８回出現し文様帯の幅は 2.2cm である。

・文様帯⑧の周は 18.2cm、3.0cm の文様は８回出現し文様帯の幅は 2.5cm である。

3）文様帯⑨

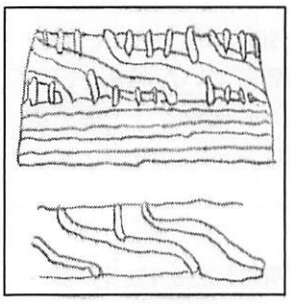


図７

この文様帯で徳利の上部がしぼられており，バランスのとれた美しい形となっている。3.5ｃｍの新しい文様帯が７回出現する。文様帯の幅は 1.8ｃｍである。

4）文様帯⑩

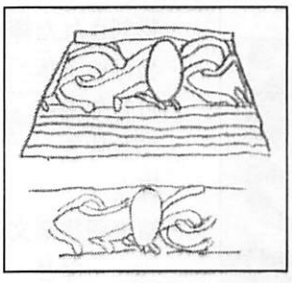


図８

文様⑩は、①や②に似ているようにも思えるが，やはり別の文様と見るべきなのだろう。周は下部が 12.5cm，上部が 9.0cm で、文様は 90 度に４回施されている。

（２）製作工程

土器の製作工程が解明されつつあるとはいえ、これが正解というものが存在しているわけではない。各自の方法に、それぞれが工夫をしておられるが、その手方、着眼点に感心させられる事も多い。しかし、目的は共通しているので、同じ作業が多いのは当然である。

一般的には
・粘土をこね、胎土から空気を抜く。
・成形の際にも、叩くなどして丁寧に空気抜きを行う。
・整形後、乾燥前に紐・道具を使い施文する。
・乾燥を待つ。（陰干し）
・野焼きで焼成する。
などが、誰もが行う共通の作業と思われる。

1）粘土を積み上げ、「徳利形」に成形する

複製土器製作にあたり、実際値より 10%ほど大き

くするのが第１のポイントである。土器は焼成の際に凝縮するのである。

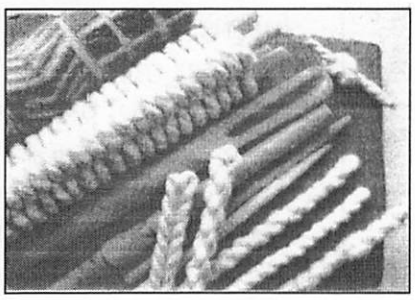
第２のポイントは、胎土の空気抜きで併せて、積み上げる作業での、内側を押さえ外壁を石などで敲く丁寧な空気抜きである。

多くの方は博物館などで、復元された見事な土器に驚き土器つくりは難しいと思い込むようだが、ミュージアムに収蔵されている土器の中から「特別で優れている物」が選ばれて展示されている。土器つくりは難しくはないのである。

道具なども買い揃えることも必要ないので、機会があれば是非ともお気軽に挑戦していただきたい。徳利形土器の成形もさほど難しくはなく、上部の空気抜きに工夫をした程度である。

２）施文具

縄文土器の施文具として使用されたのは、竹・木・骨製の篦（へら）・棒・刻みを付けた棒・紐・貝殻・植物などがあるが（写真１）、本土器の文様は沈線のみである。（写真２）



・彫刻された棒
・多軸絡条体
・竹管や細棒
・半截竹管
・縄文
・結束羽状縄文
など

写真１　施文原体[6)]

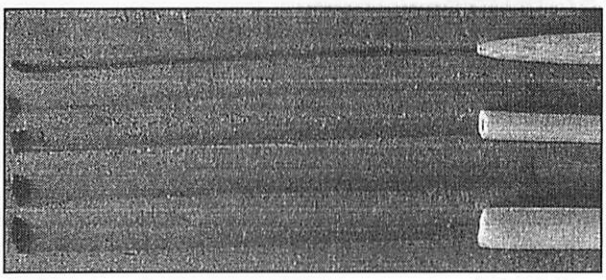


写真２　沈線文

３）文様をつける　・・・・　施文の時期

土器製作では、施文の時期に苦労することはあまりない。土器が乾燥を始めるまでには時間的に余裕があるので作製をそのために急ぐことはないのである。この徳利形土器は全て沈線で施文されている。つまり土器を削って文様を施している。かつ、相当に複雑に手の込んだ文様である。胴部約 23cm・体高 34.5cm で、器厚が３mm ほどの土器は粘土が脆弱なまま、施文するのには相当微妙な力加減を必要とする。無作為に手で押さえ線を刻むと、変形が大きくなり、このような美しい形にはできあがらない。

この種の形は、施文後の再整形が困難なのである。理由は再整形の際、内部から押さえることが困難で、外部からの整形が中心となる。したがってある程度の乾燥を待ち、少しのストレスに耐える硬さがほしいのである。多分この土器の製作者も繊細な感覚を持ち合わせた女性であったと思われるが、施文時期の判断には尚、繊細さが必要であったと思われる。

４）土器の研磨　（磨く）

この土器は磨かれ、赤く彩色されている。彩色は土器が焼き上がった後に行うので、全く問題はない。あるとすれば「ベンガラ」の使用であるが、今回はこれらの記述は省略する。

問題はやはり、「磨き」の時期なのである。土器は磨くと釉薬（ゆうやく）を塗ったように光沢をはなち、かつ丈夫になる。

「磨き」に使用された用具は「貝殻」「石」等と思われる。この「磨き」は施文時より、土器全体に負荷をかけるので乾燥が進んだ時期がよいが、過ぎると表面全体を緻密に磨くことができなくなるのである。

土器の乾燥は上部からはじまり、時間の経過とともに、下部へ進み、水分が蒸発して、粘土が固くなり、焼成直前にはカチカチとなって、少々のことでは壊れることがない。これらを全てクリヤーしてから「野焼き」が可能となる。

５）焼成前の乾燥

現在の陶器の製作でも成形後、素地を完全に乾燥させてから窯入れをし、焼き上げる。胎土に水分を含んだまま焼くと、収縮の差が大きくなり、素地が破裂するのである。

私は主に「よいち縄文野焼きまつり」に合わせて、土器を製作するので、６月中旬の作業となる。北海道の６月はまだ春で、実に爽やかである。しかし７月に入ると「夏が近い」と思う熱い日がある。経験から思うのだが乾燥は早ければ良いといえるほど、簡単ではない。乾燥が早過ぎると急激に収縮が進み、各部位の収縮差が大きくなり、ひび割れの原因となる。

ここでの「ひび割れ」は野焼きでの成功の可否を大きく左右し、かつ補修での成功率は極めて低い。であるから真夏の「土器つくり」は可能な限り避け、涼しい時季が向いていることが、経験上理解できる。

土器の乾燥は直射日光を避け、風通しの良い場所での時間をかけた陰干しがよい。土器に関する多くの書籍では「土器の製作は秋」と書かれている。さもあらん、本州の梅雨、真夏での乾燥は土器つくりに向いているとは、到底思えない。「秋の土器衣替え」説も存在するようだが、この乾燥の時期の面からでも「秋の土器つくり」説には賛成である。

6）焼成　（野焼き）をする

乾燥を終えると、土器は水分が抜けて白っぽく変色し、焼成が可能となるが、土器を焼くのに高温は必要ではない。薪を燃やすと出来る、外側が「オレンジ色」、中心部がさらに明るい炎がでる程度で十分であり、その温度は 800 度ほどである。私は「よいち縄文野焼きまつり」や江別土器の会での「野焼き」で焼成させていただくが、昨年度は雨天のため中止となったため仲間の土器を焼くために、野焼きを実施した。

現在、市街地での焚き火は許可を得るのは大変難しい。田舎の畑作地帯であれば、消防の許可も得やすい。

土器を焼く場合の注意すべき点と、私が行う順序を参考までに記述してみる。

①　薪の準備

薪はホーム・センター等で販売しているが、わりと高価なので廃材等を利用するが、塗料・防腐剤・防虫剤等の薬品を塗布したものや、含ませた物は必ず避ける。焼成された土器に科学的な色が移り、除去することが出来なくなる。また些細なことだがビニールなども同様な結果をまねくので、注意をはらいたい。

②　少量でも降雨がある、又は降雨予想がある日は野焼きを順延すべきである。(焼成中の降雨は、素材に急激な温度差を生じさせるために、土器が破裂、破損する)

③　焼成前に地面の水分を蒸発させるための焚き火を実施し、その火の回りに土器を並べ、暖める。(写真３）この時は作品をまわし、万遍なく、暖めようにする。(急激な温度を回避し、さらに乾燥の仕上げのため)

④　乾燥をさせた土器を並べ周りに薪を充分量積み上げ土器と土器の間にも、小さな薪を万遍なく入れ込み点火する。大形の土器の中には、薪あるいは小型の土器を入れても十分焼成は可能である。この時、重要なのは薪が全て燃え尽きると土器の焼成が終了するようにし（写真４）、途中での薪の追加はできるだけ避けるようにする。(途中での追加は、薪が土器に当たり破損することが多いのである)

⑤焼成終了後は、土器の温度が自然に降下するのを待ち決して人手による急激な降下をしない。

写真３　焼成前の地面乾燥と土器の再乾燥

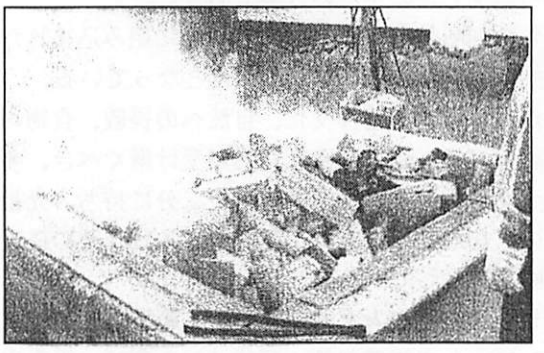


写真４　薪を十分に積み上げた後の点火

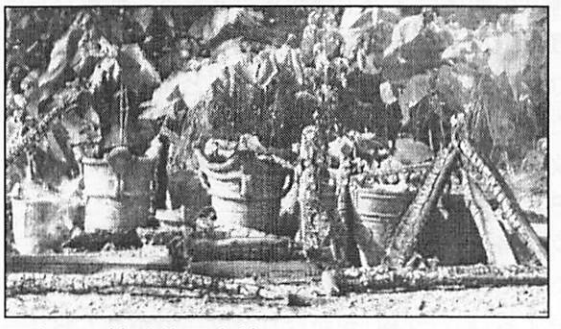


写真５　焼成終了直前

低温度といえども、約 800 度ほどの炎で焼成するので、くれぐれも、火傷の発生防止には充分注意されたい。炎の中で真っ赤に光輝く土器、野焼きの光景は例えようがないほど、美しいものである。

Ⅳ　土器製作後の感想と活用

（１）製作時の感想と推定

１）粘土の乾燥と重量の変化

この土器の１回目の製作時、施文前に自分の予想より乾燥が進み、慌てて施文したおりに力加減を誤り、首の部分を欠落させ、２回目の製作を余儀なく

された。いままで作製した、どの土器よりも乾燥が早かったのである。

いま一つの失敗は、製作直後の重量を検測しなかった事である。野焼きの日程と、施文に時間がかかる事に気持ちがあせり、急いでで再製作したので、乾燥前の重量の測定を失念した。焼成後の重量は 1.17kg になったが、器厚を薄くすることが不安で、どうしても厚くなる。完成後、土器に重さを加えて、重量を思いだそうと試みるとどうやら 1.8 kgほどに感じ、２kgは超えていないと思う。

高さ 35cm・周囲 34cm の土器の重量としては結構重い。

２）施文順序

２回の施文時に感じた事であるが、この土器の文様は上部から付けたのか、それとも乾燥を待ち、下部から施文したのかという事であった。

私たちの判断基準は、昭和 20 年以降に組み込まれた西洋的合理性が、残念ながら土台となっている。

しかし、土器や精神文化、自然への畏敬、食物への感謝など等、本来なら私たちが受け継ぐべき、多くの大切で重要な感性を彼等は十二分に持ち、先祖からの大切な知恵として生活に取り入れ、その経験を判断基準としていた。

同じ型式を持つ人たちは頭の中に範型（モデル）がインプットされており、デザインを選び、組み立てながら実表現として施文をしたのだろう。

施文の順序は多分上部からであろう。何故ならば乾燥は上部から進むので、早く行わなわなければならない。もし、下部からの施文だとすると、既に付けた刻線を手で押さえる事になり、線を潰し再度、施文の作業を繰り返す事となるのだ。

３）文様構成

文様帯を 10 に区分することも、どうやら決まっていたのではないかと思われる。その根拠は文様帯を区分する「横行沈線」がかなりラフに引かれており、文様帯の幅がまちまちである。が、次の文様帯の測定の基準点の位置はそれぞれ違っていて、文様帯全体のバランスをとっている。かつ、文様帯の最大値の計が器高値に近いので当初から頭の中にある範型は 10 区分となっていたのだろう。

また刻線が震えている部分は乾燥が進み、力を加えて施文したための結果と思われる。

４）細いところ・フックラしているところ

細いところは、乾燥が進んだところへの刻線で、相当な力を加えたので「凹んだ」のだろう。

またフックラしているように見える箇所は、その逆で、予想通りの乾燥部分に刻線施文が出来た結果なのだろう。であるなら、施文は１日では終わらなかったので、土器の乾燥を遅らせる手段を持っていたことになる。そうでなければ、器高 60cm を超え、隅々まで繊細な文様を施した、大きな土器への施文は不可能に思われる。

５）胴部の窪み・底部の歪み

胴部数ヶ所の窪みは、刻線施文する際に土器を支えた指で出来た窪みで、製作の時には気にならなかった痕跡が相当数できていた。底部の歪も施文時に底部の一辺を支え回転させながら刻文した時の変形の跡であろう。

重複するが、ここでの再整形は、不可能であり「上げ底」とは別の「外周が歪み底部中央が凹んだ」形ができた。ただし本土器の底部の大部分は発見されず、石膏で復元されているので、実態は不明である。

６）「磨き」の程度はこれで満足だったのか

あくまで個人の感覚だがこの土器の「磨き」に、「絶対にピカピカにする」という「迫力」というか「執念」とかいう何かが伝わって来ない。前述したように「磨かれた土器」には美しさの他に「磨くことへの執着」を感じる。写真では「磨き」の判別が出来ない程度である。製作者はこれで満足だったのだろうか、この辺が、腑に落ちない。

他の磨かれた「亀ヶ岡式土器」とは様子が違い、磨きが「浅い」のである。これは副葬の時期と関係しているのかそれとも、技術上の問題を超えられなかったかの何れかである。この土器が埋葬者の死後の製作とは考えにくく、儀式用あるいは、村の共同の財産又は、「特別の人間」の個人の財産でも、当初から赤色彩色する設計なら、なおの事丁寧に磨いて、より美しくつくりたい願望があった筈である。

しかし、技術的に力を加えて磨く事が出来ずに妥協したのではないかと思うのである。

黒曜石製の石槍、石鏃等で横圧剥離による作業段階で「割れるか、割れないか」の冒険的決断をさけ、妥協して横圧剥離を中止したと思われるものを見る事があるがこれと同じ判断で「磨き」を妥協した、と思うのである。

（２）土器を活用した授業

焼き上げた土器は、我が家の玄関や、私の書斎を飾ることとなるが、夫婦で毎年製作しているので、増える一方であり、希望される方には差し上げている。また市内の小学校からの依頼で、10 年ほど連続して縄文土器を使用し、実際に「ジャガイモ」を煮て食する授業を児童と行っている。

子供たちは土器が炎に耐えられるとは想像がつか

ないようで、土器の中が沸騰をはじめると、驚きをかくさない。また、目の前で煮えるジャガイモに目を丸くし、かわるがわる土器の中を覗き込む。

ジャガイモが煮えるまで、班単位に「野焼き」で失敗し、割れた土器をさらに砕いたものと、ガムテープで土器のパズルに挑戦させ、調査員、整理作業員の仕事の大変さと、重要さを教えている。焼成に失敗した土器にも使命がある。

ジャガイモが煮え、シートに車座となり、イモを食べる時は満面の笑みを浮かべてホッペを膨らませる。この授業で使用している土器は十年を過ぎてまだなお使用に耐えている。ただ、１年に３～４回の使用である。それでも、土器は意外と頑丈なのである。

１）土器を使う前の工夫

土器を製作されている方でも、実際に火にかけて料理したという人は、いかほどおられようか。

焼成後そのままだと、土器は驚くほど水を含む。そして器壁から、雫となって滴り落ちるほどになるのだ。そのまま火にかけると、炎の勢いがおち、焚き火は文字通り消沈してしまう。土器壁には相当な隙間があり、すぐに使用に耐えられないので、器壁の隙間を埋める手段があっと思われる。私は、アイヌの人たちが「オオウバユリ」の根を食料にしていた事を思い出し、澱粉質で土器壁を埋めていたのではないかと想像した。オオウバユリでの実験は出来ないが手始めに米の砥ぎ汁を入れ、実験した。

充分に含ませてから砥ぎ汁を捨て、乾燥させ水を注ぐと最初程ではなくなったが、やはり水は器壁から滴り落ちた。

つぎには小麦粉を解き、一日浸し、同じ方法で調べると滴り落ちるほどではないが、相当量の水を含むのは同じだ。そこで薄く解いた小麦粉水で、ごくごく薄い糊をつくる方法で試した。糊状直前で捨て、乾燥させると器壁は水を含んだままで落ち着いた。以後はそれ以上の変化はない。

繰り返し同じ土器を使い込むと、同じような結果にはなるのだろうが、彼らは手を施して使っていたのだろう。

２）　灰汁抜きとの強烈な再会

土器を使った授業の中で、「落し蓋」の利便性と、炉で焼いた拳大の石を土器の中に入れると、沸騰が早まり、相当時分が短縮されることを教えている。

７、８年前の授業で、男子児童に「落とし蓋」にするために「蕗」を採ってくるように言ったら、見事な蕗を３本、茎ごと採って来た。葉を「落蓋」に使い、本体は土器の中になにげなく放り込んだ。やがて煮えたジャガイモと一緒に取り出し、皮をむいて丸かじりして驚いた。あの「蕗臭さ」・蕗独特の「にがさ」が消え、かつ鮮やかに緑色の透き通った「上品な食材」に変っていた。

灰汁が抜けたのである。焼いて土器に入れた石には、大量の木灰が付いていたことを思い出した。

このような偶然が「灰汁抜き」につながり、知恵を膨らませ食材の範囲を広げ、豊かになっていったのではと思った出来事である。強烈な灰汁抜きとの再会のときであった。

３）土器に入れられたもの

この土器に出会った人が「中身」を考えるのは、ごく自然である。注ぎ口が 2.3cm の器に個体を入れたとは考えられず、液体であることは間違いがないだろう。液体でも多量を必要であるならなら、胴を膨らませ、壺形にした筈である。

700ml ほどの容量で、徳利の形に選ばれた容器に入った「液体」は一体なんであったのか、考えることは万人が同じであると思う。是非「お毒見役」に立候補したい。

Ｖ　おわりに

ＧＰ－20 墓壙の項で述べたように、特別な人物のお墓で、墓壙用の土器に異論はないが、お墓に埋めるため作られた土器ならば、他の墓(例ＧＰ－80 等)にでも、特別な人物のための墓は存在するが、土器を中心とする 1000 点を超える遺物の中に、このような実用ではない土器が副葬されていないのは不思議である。また副葬用の土器が生前の被葬者のどの位置に置かれていたのか、想像ができない。

彼らはどのようにして、この土器と付き合っていたのか。いずれ一緒に墓にはいる、もしくは入れられる「特別な土器」は被葬者が生存のおりは集落の何処にあったのだろう。そして、その存在の役割はいったい何だったのだろう。

集落に現在の神社仏閣のようなものが存在していたのだろうか、それとも「特別な人物」の住まいに神棚や仏壇のような祭祀のスペースがあったのか。それは彼にだけ許された特権なのか、共同の施設なのか不思議がいっぱいである。前述したがこの土器は埋葬者の死後、製作されたとは考えられない。

理由は、製作後の乾燥に必要な時間である。乾燥の早いタイプの土器としても、焼成が可能になるまでは７日間ほど必要であり、かつ死者はその間、墓

には入る事できなくなる。この墓は再葬墓ではない。

縄文人が「人間の死」をどのようにとらえ、どのように向き合っていたのかも、まだ全てが判然とはしていない。

しかし、現代社会が失いつつある、自然に対する感謝、祖先に対する感謝、仲間への思いやり等は、私たちをはるかに凌駕していた時代があったのだ。

縄文時代の英語命名をしたE・S・モースに『日本その日 その日』という著書がある。[7]

その中で彼は明治初期の日本人像を紹介するくだりで「自然を愛し、自然に感謝し、他人を愛し、人々に感謝し、自然とと向き合い、自然を（生活に）取り入れ、毎日笑顔で暮らしている」との内容の文章が残されている。

明治時代に戻らなくても、昭和30年頃の日本にも、彼が見た暮らしが私たちの、ごくごく、傍に存在していた。近頃ようやく循環型の生活の重要性に目が向けられるようになった。特に自然との向き合い方は、急いで方向転換しなければならないほど、追い詰められている。

このような時に、私たちの祖先である縄文人の暮らし方考え方、自然の取り入れ方、自然との向い方に学ぶべきことが多いのではないかと思うのである。

多くの謎と、素敵なロマンが縄文土器の向こうにある。

決して貧しくはない、大らかな人間の集団と、それらを支える、畏敬のある敬虔な暮らしが見えてくる。

<脚注>

1) よいち縄文野焼きまつり　毎年有志が実行委員会方式で、余市フゴッペ海岸で7月に夜通し「野焼き」を行う祭典
2) 元江別市郷土資料館長の故高橋　正勝氏の指導の下、25年間にわたり、正確な複製土器の作製に取り組んでいる会である。江別市郷土資料館を活動拠点とし、定期的に活動を展開している。
3) 余市町沢町遺跡発掘調査報告書　「沢町遺跡」 1989年　余市町教育委員会　宮　宏明　編集
鎌田　望　吉崎　昌一　松田　巍章　宵木　誠　他
4) ベンガラ（弁柄・紅殻）　オランダ語 Bengal　酸化鉄を多く含んだ 粘土を焼いてつくる赤色顔料。
かつてインドのベンガル地方産を輸入していたため、ベンガラと呼ばれた。
5) 杉原　寿栄男　編　日本原始工芸概説　1928　北海道出版企画センター1981（復刻版）
6) 江別土器の会　北海道の縄文土器（土器複製のために）　2007
7) エドワード・シルベスター・モース　日本その日その日 石河　欣一訳　東洋文庫　1970

参考文献　（50音順・敬称略）

・乾　芳宏　「考古学入門　土器の見分け方図鑑（縄文～擦文時代）」　余市水産博物館研究報告7号　2004
・同　上　「縄文時代晩期から続縄文時代への墓壙変遷ー北海道余市町大川遺跡を中心として」
村田文夫先生還暦文集　2002
・小川　康和　「大川遺跡における縄文晩期墓壙の特殊な検出事例について」余市水産博物館研究報告11号　2008
・熊谷　仁志　新北海道の古代　旧石器・縄文文化　「北海道の縄文土器」　北海道新聞社　2001
・小林　達雄　縄文土器大成－2「縄文土器の用途と形」　講談社　1981
・同　上　縄文土器の研究　学生社　2003
・佐藤　美智雄　考古学マニアのための「北海道の縄文土器」　2011
・佐原　眞　考古学研究　「土器の話（1）～（13）」　1970～1974
・鈴木　克彦　日本の古代遺跡29　青森　保育社　1986
・（財）北海道埋蔵文化財センター　余市町フゴッペ貝塚発掘報告書　「北埋文調報　72」　1990
・同　上　小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡発掘報告書　「北埋文調報　53」　1988
・同　上　遺跡が語る北海道の歴史　（財）埋蔵文化財センター25周年記念誌　2004
・斉藤　忠　日本考古学辞典　学生社　2003
・村越　潔　考古学ライブラリー　「亀ヶ岡式土器」　ニューサイエンス社　1983
・山内　清男　日本先史土器の縄文　先史考古学会　1979
・余市町教育委員会　「大川遺跡における考古学調査Ⅰ～Ⅳ」　2000・2001
・同　上　「大川遺跡」1988～2003・2005

余市水産博物館研究報告第15号：53－66.Mar.2012

北海道町村制度史の中の余市

鈴　江　英　一
（北海道史研究協議会）

1．はじめに　―町村制度について余市はいろいろなことが語れる場所―

◇余市が持つ一体的な地域性

ご紹介にあずかりました鈴江英一です。今日は、「北海道町村制度史の中の余市」という題で話しをさせていただきます。私は、北海道の町村制度について考えるとき、余市はいろいろなことが語れる場所ではないかと思っています。

ところで私と余市の関係ですが、私の姉が余市に嫁ぎまして、その嫁ぎ先が当時は余市神社の横にありました。義兄は紙箱の製造をしていました。後で札幌に引越しますが、高校生のころ、よく余市に来てはサクランボの木によじ登っていたものでした。

それから約20年後、1970年代の後半（昭和50年代）に『松前町史』の編集にたずさわることになりました。私は近代が担当のはずでしたが、近世も受け持つことになり、余市の林家文書に目を向けることになります。林家文書の「町年寄日記」を私が担当して『松前町史』史料編第2巻に全部掲載することになりました。「町年寄日記」はすでにマイクロフィルムに収めてありましたが、なお再点検のため調査と撮影の必要があって、携帯用マイクロ撮影機を抱えて水産博物館を訪れました。この撮影機は、20kgもある重いもので、水産博物館の坂下のバス停で下車してから、博物館まで持ち上げることをしました。あまりに重くて、車で来ればよかったと後悔したものです。

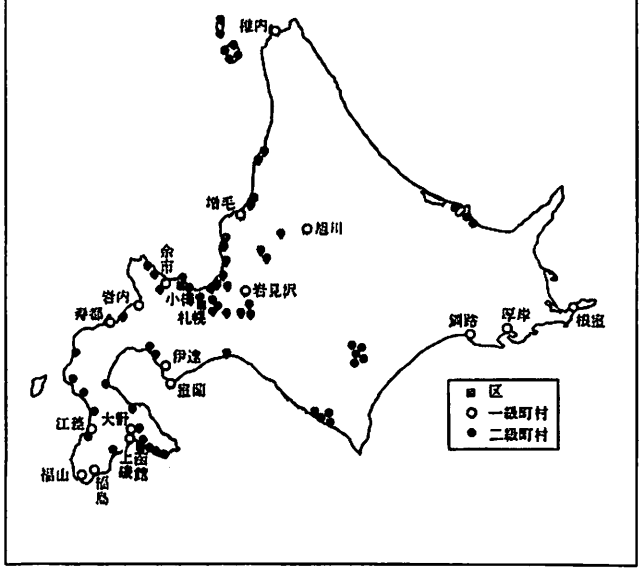
それからまた約40年して、このところは、余市町指定文化財となった「林家文書」の整理のために訪れました。道史協（北海道史研究協議会）研修部が計画して大学院生らとともに、ここ4年越しで博物館に通いました。

そこで私が余市についてずうっと感じてきたのは、余市は、まとまった町だなぁということです。余市川を挟んで一体感がある町だという印象です。それを今日のテーマである北海道の町村制度史がらみで証明できることが、一つあります。

1900年（明治33）に「北海道一級町村制」が施行されます。一級町村制については、後でくわしく話しますが、このとき一級町村に指定されたのは、16町村です。その前年に「北海道区制」が施行され、札幌・函館・小樽が区になります。つまりここで3＋16、19の区町村が誕生します。これが当時、道内で町村として確立した地域、政府が道内でも十分自治体として経営していけると判断した都市と村でした。

それから1世紀余、110年が経ちました。この間、19区町村のうちで合併もせず、分村も起こらず、隣の市町村との境界変更はあっても、引き続き単独の市町村として一体性を持って維持されてきた町村がいくつあるでしょうか？たった二つです。ご承知のとおり、一つは余市です。もうひとつは、どこか？それは増毛町です。増毛町は、留萌管内の南端、留萌市に隣接しています。実は増

区、一・二級町村の分布



毛町も留萌市などとの合併協議が進行しましたが、途中で破談となりました。結果として増毛町は、1900年以来、合併をせず、分村も起こらなかった町村の一つになりました。もっとも増毛町は、留萌管内の行き止まりですから、留萌市以外に合併相手はないのでしょう。余市町も今後どうなるか分かりませんが、目下は110年来、単独の町です。これは道内では二つしかありません。二級町村制は、1902年(明治35)に施行されます。これは62町村です。隣の古平町も最初の二級町村の一つですが、合併も分村もありませんでした。そういう町村は二級町村の場合にはほかにもありますが、やはりまれです。一級町村では余市と増毛だけです。めずらしい例です。そして地域としてもまとまりがあり、そのまとまりが定着しているのが余市町だと思います。

◇松前町史における林家文書の貢献

本題に入る前に、林家文書の『松前町史』への貢献について話さなければなりません。林家文書によって、松前城下の町年寄の職務や機能が解明されました。町年寄というのは、松前藩の町奉行の支配下にあって町方の庶務を統括する職で、配下に名主や町代等がいます。町年寄に任命されるのは、城下の問屋(といや)・小宿・場所請負人といった有力な町人層からです。例えば、幕末では三代目林長左衛門等が任命されます。

町年寄という名前ですからその職務の範囲が城下町に限定されているかというと、「町年寄日記」を見ると、そうでもなさそうだと分かります。町年寄は、どうも松前城下(福山と呼びますが)だけではなく城下付村々を管轄下においていたようです。つまり現・松前町全町、東側の福島町、知内町の支配に関わっていました。また町人、百姓のみならず、どうやら松前藩士や寺社に関わる事務も浮かび上がってきました。町年寄の職掌を見ると、それを通して町奉行の機能を垣間見ることができました。松前城下の町奉行は、村もまた寺社も、そのうえ家臣のこと、例えば家臣の縁組みもその事務として扱うという幅広さです。江戸時代の町奉行の職務には、家臣の縁組みなど出てこないのですが、松前藩の町奉行の職掌は、他藩の寺社奉行、郡奉行も兼任しているかのようです。松前藩は、他藩とこんなに違うのかと、驚きでした。

こうしたことが林家文書によって分かるようになってきました。林家文書の「町年寄日記」無くして、近世の松前の町や村は語れない、というわけです。

◇北海道における町村制度展開の中での余市

さて本日のテーマは、「北海道町村制度史の中の余市」です。最初に私は、「町村制度について余市はいろいろなことが語れる場所」と言いました。余市町では、1993年に『余市自治発達史』という大部で詳細な研究をおおやけにしています。余市の町政の具体的なことはそれをご覧いただきたいと思います。今日は、余市の具体的な事例を北海道全体の町村制度の流れの中に置いて考えてみたいということです。

いったい北海道の町村の制度は、府県(かつて内地といってました)の尺度とは一緒にならないものです。それは近世もそして近代もということです。例えば、江戸時代の村の一般的な姿には、村方支配の3原則が覆っています。まず、(1)村の土地には〈検地〉が行われます。これは土地調査です。(2)検地によって、○○村は石高何十石と村高が決まります。〈石高制〉です。(3)その村高に年貢率が掛けられて年貢高が決まります。その村の年貢を納入することを村が請け負います。村は、農民の土地の持ち高によって年貢の分担量を割り振ります。〈年貢の村請制〉です。それは漁村も同じで、村高があります。

しかし、松前藩領の場合は違います。(1) 検地が行われませんでした。少なくとも年貢徴収のための藩の検地はありませんでした。秀吉の太閤検地は全国くまなく実施することを命じましたが、津軽海峡を越えませんでした。(2) 検地は村の生産高・石高を決めるものですから、松前藩では検地が行なわれていないので村高を決めませんでした。村高が存在しないので、松前藩自体に石高がありません。一万石の格付けですが、あくまでも「格」です。大名の石高の基礎となる村高がないのです。(3)従って村高を前提とした年貢村請制がありませんでした。

松前藩の村々は多く漁業地帯、漁村でした。漁民の税は、例えば、鰊役ですと、漁家1軒当たり7束半という定量制でした。別の時代には、漁獲

物の 15 分の1という従量制で課税されていました。これを現物納または金納として納入します。漁家個々に課税しますから、村への課税にはなりません。いっぽう畑銭は、面積に対して課税します。

江戸時代の村は、年貢村請制によって村として成り立っています。年貢村請制が無く、村が村民を縛ることのないところが、村として成り立っているのはなぜか。『松前町史』でもたいへん謎なのですが、福島町の宮歌で少し知ることができます。宮歌村の例を参照しながら見ていくと、この村の存在意義というものが余市と絡んでいると分かります。余市の話しに行く手がかりに松前藩領の宮歌村の存在を考えてみます。宮歌には、珍しく江戸時代の村の文書が残っています。なぜ残っていたか、東隣白符(しらふ)村との境界争いがあったからです。その争いのためにどうしても文書を保存しておく必要があったと思われます。

2. 江戸の松前家と宮歌村支配

◇宮歌村の知行

宮歌村は松前藩主の一族で松前八左衛門(泰広)家の知行地です。この松前家は江戸の松前家と呼ばれていて、徳川家の直参で2千石の旗本になります。そして上余市場所も知行地とします。1669年(寛文 9)にシャクシャインの蜂起がありますが、松前泰広は大将となって松前藩兵を率いる役割を果たします。

江戸の松前家が宮歌村から収取する年貢については、或る年のものが記録されています。年代が特定できませんが、1800年(寛政～文化)前後の巳年3月5日の記録です。現物で納めるものとして数の子2箱、ワラビ52把、椎茸1箱(1200入)、昆布7把(1把50本結(ゆ)い)3箱がありました。多くは自家消費か贈答用です。椎茸は1200入とありますが、松前家だけでこんなに食べるわけではないでしょう。恐らく松前家では贈答用に椎茸を使用したのではないかと考えられます。私は一時、東京の史料館にいたことがありまして、同僚の江戸時代の儀礼を研究していた方から、尾張藩領で作っている干柿のことを教えてもらいました。これは贈答用として将軍に献上されています。それを将軍が各大名家に与えるという、物のやり取りをしており、これは幕府の統治上、重要なことでした。もちろん幕府に献上される鮭なども同様の扱いです。数の子・ワラビ・昆布はやがて現物納から金納化していきます。

役金13両2分というのがありますが、お神楽料、荷物送り料など納入経費その他が 11 両となっていて、差し引き2両895文となっていますから、江戸へ届けられる現金は、僅かこれだけです。別の年に役金17両1分、差し引き7両余という記録もありますが、僅かなものです。もし、宮歌村だけが知行地の松前藩士であったなら、これで家政が成り立たないのではないでしょうか。

◇宮歌村から余市場所へ

もっとも、宮歌村の場合、このほかもうひとつ、江戸の松前家への夫役(ぶやく)として、仲間(ちゅうげん)二人差遣(派遣)というのがあります。これは江戸の松前家にとっては、家政上、特産物の収取以上の意義があったのかもしれません。

宮歌村より江戸松前家への貢租など
(1800年代〔寛政－文化〕前後)

A. 現物納	
数の子(5斗入)	2箱
蕨	52把
椎茸(1200入)	1箱
昆布(7把入)	3箇(1把50本結)
B. 役金	
船御役金	
宮歌村分	8両
江差村分	3両1分
秋味御役金	
大茂内分	2両1分
計	13両2分
C. 納入経費・その他	
御神楽料	2両2分(寅正月)
江戸御仲間道中遣	2両(2人分)
御荷物送り入用	2分
御荷物駄賃　木札丁持銭	4両1分830文
八幡宮御寄進料	2両
計	11両1分830文
差引額(B－C)	2両895文(ママ)

出典)「江戸松前八兵衛様御内斉藤領助様酒井忠右衛門□□長左衛門」と表書のある書状綴

さて、宮歌村の人々はしだいに北にも進出し、江差や大茂内(おおもない)村(現・爾志(にし)郡乙部町榮浜)に出稼ぎ

に行きます。大茂内村は宮歌村の支村となります。それが 20 軒ほどになった頃、大茂内村に小頭が設けられます。ちなみに本村では肝煎(名主のこと)、年寄、小使(百姓代)という村役人が任命されていました。大茂内の集落が定着し、上余市場所へも出稼ぎに行きます。他の土地への出稼ぎ民を宮歌村の村役人は掌握しています。宮歌から大茂内、上余市へという宮歌村民の進出経路ができます。宮歌から大茂内、余市へと人が動きます。知行主松前家にとって、上余市場所の労働力の確保が必要ですが、宮歌村は余市場所への労働力の供給源になっていたと思われます。そして漁期が終わると蝦夷地からまたもとの村にもどることになります。2 名分の夫役を含めて宮歌村は江戸松前家にとって、大きな労働力の供給源になっていたのではないでしょうか。しかし、残念ながらそれ以上のことは、まだよくわからないのが現状です。宮歌村と余市の関係を今後、『余市町史』でもぜひ解明していただきたいものです。

3. 開拓使時代の村の創出

◇場所請負制度からの転換

ともあれ村と領主は、持ちつ持たれつの関係にあって、村が村として成立していたと考えられます。それが松前藩領の村ではないかと思います。

しかし、江戸の松前家と宮歌村とのもちつもたれつの関係は、1807 年(文化 4)、幕府の直轄、松前藩転封により知行制度が廃止となって解消されます。しかし村は村として存続します。

村からは蝦夷地に出稼ぎに行きますが、村民は漁期が終わると松前藩領に戻ってきます。母村は出稼ぎに行く根拠地ですが、また帰ってくる地です。

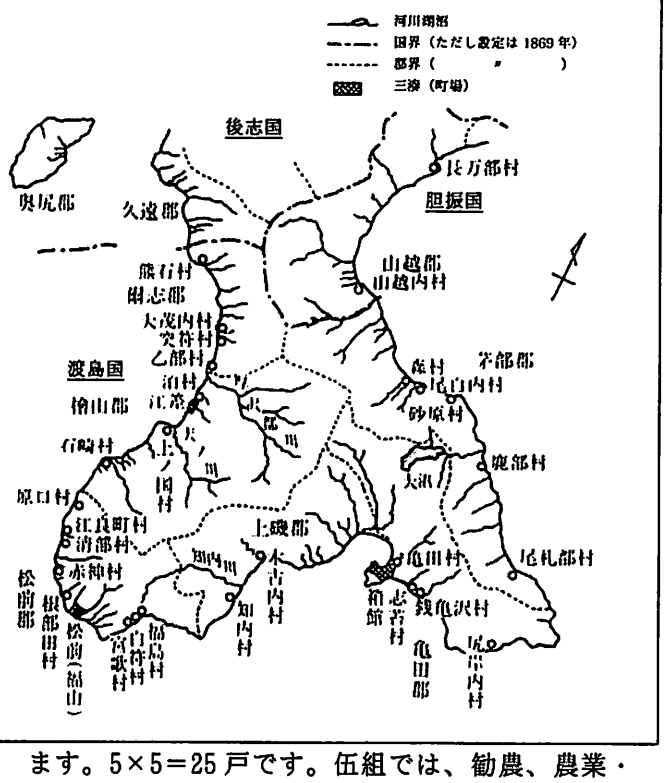
熊石・山越内で区切られる和人地・蝦夷地の区別は、幕末に廃止されます。明治維新後、開拓使時代になると松前藩や知行主に代わって開拓使が住民の把握に努めます。開拓使は設置早々に場所請負人制度を廃止し、かつての蝦夷地にいる漁民から直接、租税を徴収して財政の安定を図ります(もっとも、すぐ場所請負人の一部を「漁場持」と名称を変えて存続させます)。後志国の各郡も開拓使の直轄になります。二八取(にはちどり)と呼ばれた在地の中小漁家から場所請負人が私的に徴収していた漁場用益料を、開拓使は税金として徴収することにし、徴税機構を整備します。その際、村の人びとをどう行政的に組織してゆくかが課題となってきます。そこで余市郡を例にとれば、1870 年(明治 3)に 2 名の年寄役と 4 名の漁業取締(役)を置くということをします。

◇村機能の創出

人が集まっているからムラといいますが、しかしそのままでは「村」にはなりません。住民が意図して「村」という団体を作るのです。そこには自治の意識がなくてはなりません。或いは、行政が上から団体を作ることによって村が設置されます。開拓使は、上から村を作らせる施策をとります。

余市のような海岸漁業地帯では、始め郡単位に「村」役人を置きますが、やがて村の単位に村役人も置きます。上から下への組織化です。一方、農村では、移民を伍組そして伍々組として組織します。5×5=25 戸です。伍組では、勧農、農業・開拓奨励、そのための相互監視を行います。なにか江戸時代の五人組を連想しますが、開拓の奨励、勧農という点に主眼があります。それがさらに村制度へと発展します。

「和人地の村」関係要図



に入植した会津家臣団です。移民集団は統率がとれやすいのでかえって伍組、伍々組が早くに取り入れられたのかもしれません。開拓使は、伍組、伍々組を積極的に普及させようとします。その典型が余市で、開拓村における「村」制度のモデルとなっていきます。余市には、旧場所地帯の村制度の原型と開拓村の村制度のモデル、両方があります。「町村制度について余市はいろいろなことが語れる場所」であると言ったゆえんです。

4.「北海道一級町村制」と余市

◇大小区制から戸長役場制度へ

1872年(明治5)になると、北海道にも大小区制が施行されます。従来、名主・年寄とよんでいた村役人が戸長・副戸長と名を変えますが、伍組の伍長は機能を変えて存続します。大小区制は、各地域を区画して機械的に通し番号をつけます。大きなまとまりを大区、その部分を小区といいます。それで大小区制となるわけです。1874年(明治7)、余市郡10か村は、後志国第四大区第一区から第四小区までに区分されます。1876年(明治9)には、大区の区画を全道的に振り直し全26区とします。忍路郡と余市郡の14か村は、第四大区第一小区から第六小区に分けられます。

この後、1879年(明治12)、大小区制が廃止となり郡区町村編制法が適用され、戸長役場制度が出来、また総代人制度という代議制が誕生します。最初の一級町村制の話しに戻します。

◇北海道特別町村制の施行

一級町村制というのは、「北海道一級町村制」のことです。1900年(明治33)前後に制定・施行された北海道特別町村制の一つです。ほかに区制と二級町村制というのがあります。1900年頃、北海道では、村が町になるというより、戸長役場が二級町村に、二級町村が一級町村に、さらに現在の市に相当する区になることが、自治体の格が上がるという、四重の構造になっていました。全国的には、その10年ほど前、法律第1号で「市制町村制」が1888年(明治21)4月に公布され、1889年(明治22)に施行となります。この88年制定というのは或る意味があって、89年2月発布(公布)の「大日本帝国憲法」、1890年(明治23)11月の第1回帝国議会開会に先立つものです。憲法公布、国会開設に先立っての市制と町村制の制定です。政府は、市町村制度を議会の審議に付しませんでした。ご存知のとおり、当時は自由民権運動が盛んな時であり、当時の政府の中枢にいた山県有朋は帝国議会開設を前にして地方政治を安定した状態に置き、政争の波風が立たない制度にしようとしていました(実際は、そうはなりませんでしたが)。

現行の「日本国憲法」では、地方自治の条項が第8章(第92～95条の4か条)として定めていますが、「大日本帝国憲法」には、地方自治に関する条項はありません。地方自治というのは、帝国憲法では国民の権利に位置づけられていなかったのです。

「市制町村制」では、「町村制」の附則第132条

市 区 町 村 制 の 階 層 構 成（1902年現在）

地域の区分＼施行対象地方		全　国	北海道	沖縄県
A	都 市 部	[1889年施行] 市　制	[1889年施行] 北海道区制	[1896年施行] 沖縄県区制
B	都市部以外の地域	[1889年施行] 町村制	[1900年施行] 北海道一級町村制 [1902年施行] 北海道二級町村制	[1899年施行] 沖縄県間切島規程 ([1908年施行]) 沖縄県及島嶼町村制
C	上記（A，B）未施行地		([1879年施行]) 戸長役場制度	

【「区・一二級町村の分布（1902年末現在)」参照】

に、北海道、沖縄、島嶼（島々）には適用を除外するとしていました。政府は市町村という基礎的自治体の制度を確立するに当たって、北海道と沖縄及び島々は、土地柄が町村制の条件にあわない、町村の運営ができない地域と考えて適用除外としていました。それで遅ればせながら、1896年(明治29)に「沖縄県区制」、翌97年(明治30)「北海道区制」「北海道一級町村制」「北海道二級町村制」を、法律ではなく勅令で制定します。しかし内務省は、これでも北海道には荷が重いと考え、公布はしたが施行せず、大幅に改正したうえで1899年(明治32)、「北海道区制」、1900年(明治33)、「北海道一級町村制」、さらに1902年(明治35)、「北海道二級町村制」、仕上げに1907年(明治40)、「沖縄県及島嶼町村制」を施行します。こうしてみると、北海道と沖縄の町村制は関連があると分かります。

◇「北海道一級町村制」とは

北海道、沖縄そして島々(対馬・伊豆大島など)が町村制度では、特別扱いになっています。特別扱いという点では、一級町村制よりも二級町村制の方が際立っています。一級町村制の方は町村制にやや近いものです。しかしどこが違うのか。次の5点が注目されます。

(1)「公民」要件の強化
(2)町村長・助役などの有給化
(3)執行機関の権限・機能の強化と町村会の権限後退(例えば議決事項の制限)
(4)財政基盤の強化
(5)上級官庁の監督関係の強化

まず(1)「公民」要件の強化です。「公民」というのは、住民と同じではありません。公民の資格要件は、住民のうち帝国臣民であって公権を有する独立の男子です。この資格継続年数が3年以上(町村制は2年以上)あって、町村の負担を分任し納税あるいは不動産を所有していることです（地租年額40銭以上または直接国税年額2円以上を納入或いは耕宅地所有3町歩以上を所有)。「町村制」の場合は、耕宅地を所有していれば公民の要件を満たします。あるいは地租をいくらかでも納めればよいのですが、北海道では、3町歩以上の土地所有が要件です。本州では3町歩の農地所有などそう多くいるものではありません。土地持ちであれば公民の要件を十分に満たします。財産持ちでその町村に長く根を据えて生活している人が公民であるべきだ、というのがこの制度の考え方です。北海道は開拓途上なので、持っている財産は一定程度なければ公民にはなれないということです。

次に(2)町村長・助役などの有給化について述べます。公民という人たちは、町村長や助役、また議員、委員など町村の公職に就くことができます。町村自治は公民によって担われるという考え方です。公職に就くというのは、権利であり義務です。府県の制度である町村制では、これらの公職は、無給の名誉職でした。町村長、助役なども名誉職

「町村制」「一級町村制」の公民資格要件の比較

資格事項／町村各制	町村制（代七条一項）	一級町村制（第五条一項）	参考／区制（第五条一項）	欠格条件
一帝国臣民	◇	◇	◇	公費貧民救助後の年数
二公権を有すること	◇	◇	◇	二年経過未満
三独立の男子	◇	◇	◇	三年経過未満
四資格継続の年数	二年以来	三年以来	三年以来	三年経過未満
①町村の住民	◇	◇	◇	
②町村の負担分任	◇	◇	◇	
③納税・不動産所有要件	以下、二項のうち一つ	以下、三項のうち一つ	以下、三項のうち一つ	
地租年額	（額の下限なし）	年額四〇銭以上	年額五〇銭以上	
直接国税	二円以上	年額二円以上	年額二円五〇銭以上	
耕宅地所有	（要件になし）	三町歩以上	三町歩以上	

◇印…共通の該当事項

で有給は例外でした。北海道は有給を原則にしましたから、町村制の重要な修正になります。北海道では町村長、助役などがボランティアでは難しかろうと考えられたからです。

無給の名誉職となるのは公民の権利であり義務ですが、なかには就任を嫌って拒辞したり、任期中に退職したりする人も出て来ます。そういう人が頻繁に出て来ては困りますから、それを想定して制裁を課すことにしました。公民権停止とか、町村税の増額とかの規定です。これに対して一級町村制の公民資格要件は狭くなっていますが、拒

辞、途中退職に対する制裁は、ややゆるめに設定されています。一級町村制の町村長は有給で名誉職ではありませんから、就任拒辞などによる制裁はありません。

念の為、現在の市町村長や議員の選出との違いについて述べます。これは全国でも北海道でも同じですが、町村長は直接選挙ではなく議会が選出する間接選挙です。また議員の選挙は、立候補制でなく、その意思がなくても選出されます。被選挙権のある公民は、だれでも当選の可能性があります。名誉職の就任固辞が起こるのはこのためです。

議員選挙では、全国(町村制)も一級町村制も等級選挙制です。等級選挙制は、直接町村税（住民税）の額によって、有権者一人当たりの選出出来る議員の数が違うという選挙制度です。例を余市にとってみます。一級町村制施行時の余市町の人口は、本籍と寄留人の合計が、12,695名です。大きな町です。議員定数は20名です。当時の余市町会議員の有権者数を確かめることができませんでしたが、1614戸が町税を納入していますから、この戸数が有権者を想定するときの参考になりましょう。等級選挙制ですから選出議員数は一級選挙人による選出議員が10名、二級選挙人による選出議員が同じく10名です。この一、二級は一級町村制、二級町村制の一、二級とは別です。最初の選挙なので各級10人ずつを選出します。一、二級議員ともこのうち上位5人が6年任期、下位5人が3年任期になります。

1900年(明治33)の第1回余市町会議員選挙は次の通り報告されています。8月30日にまず二級選挙人による選挙が行われ、林重蔵112点(票)から最下位阿部勘五郎57点まで当選者が決まります。次いで翌31日に一級選挙人による選挙が行われ、西堀作太郎12点以下、5位に猪股安之丞11点、最下位の当選者若林が10点で当選します。次に町長選挙のための町会が招集されましたが、9月13日は定足数が不足して流会になります。5日に20名中13名が出席して会議が成立し、そのうち12票を得た西田菊馬が町長に選出され、さらに柴田熊三郎が助役に選出されました。

さて議員選挙の得票数を見ると、最上位で二級は一級の10倍、最下位で約6倍の差が生じています。分かりづらい等級選挙制ですが、もっと極端なケースを想定して説明して見ます。或る町に経済的に有力なA、B、Cの3名が居りまして、この3名で住民税の2分の1を負担してきました。この町の議員定数が12名だったとします。定数12ですと任期3年で半数交代ですから、一級、二級とも任期切れとなる3年に1度ずつ選挙となります。一級選挙人のA、B、C3名は、毎回の選挙で一級の議員3名ずつ、つまり6名を選挙することができます。いっぽう他の住民税2分の1を納入しているD以下の何百名かの二級選挙人が居ます。この人達も何百名かで残り6名の選挙を行います(1回の選挙ではこれも3名ずつ)。しかもこの選挙の順序は、先に二級の選挙を行い、その結果を待って一級議員の選挙を行います。するとどうなりますか。

一級選挙人のAは、被選挙人Mと被選挙人Nと両人の議員当選を願っています。二級議員選挙の結果(Aは二級の選挙権がありません)、Mが当選します。それを見てAは一級議員の選挙にはNに1票を投じました。多分それでNは当選したことでしょう。なぜなら3票で3名を選出する仕組みですから。等級選挙制では、このほか住民でないが町村税の多額納税者であるPという人いて、先のA、B、Cの3名の内1名より多い納税額であったとします。そうするとPにも1票の投票権が与えられます。そうすると一級選挙人は4名となり、3人の議員を選ぶための投票をすることになります。実際そういう例があったかどうか分かりませんが、多額納税者にとって有利に、町の地方自治への参加ができるようにする制度であることはおわかりでしょう。現在の自治法との違い、北海道が開拓途上なので、財産を一定程度もっている人たちに地方自治を担わせることを求めたのが、この制度といえます。

(3)執行機関と議決機関の関係ですが、北海道の区町村の議決機関は全国の市町村会よりも制限的です。例えば町村制では、町村会での議決事項を、条例・規則を制定する、予算を決める、決算報告を認定する、基本財産を処分する等としています。一級町村制もほぼ同じ内容を議決事項に挙げています。しかし挙げ方が違います。町村制は概略列挙主義です。これこれを決めるけれどもほかにもあると言うわけです。しかし、一級町村制(ほかの区制、二級町村制でもそうですが)では制限列挙主

義です。これしか議決できないという決め方です。いわば議会は余分なことはするなというようなことです。これは大きな違いです。

もうひとつ付け加えます。一級町村制にはありませんが、二級町村制では書面会議というものが規定されています。これは「軽易」な事案なら書類を回して賛否を諮り、3分の2以上の賛成で可決になるというものです。会議に出なくても良いというわけです。書面会議の存在理由について、北海道は開拓途上であって多忙であり、とくに冬などは積雪寒冷で議会に集まるのも大変だ、会議場に集まらなくても議決できるようにしたのだ、と説明されてきました。そういう面はあるかと思いますが、書面会議が「沖縄及島嶼町村制」にも規定がありますから、北海道独自のこととはいえなくなります。書面会議が北海道と沖縄などに共通の規程があるということは、両制度の設定に共通の面があるのではないかという考えに導かれます。それはもう少し後で述べます。

あと、(4)財政基盤の強化と(5)上級官庁の監督関係の強化は簡略にふれます。(4) 財政基盤の強化ですが、現在の町村の財政は、主として町村税、地方交付税に拠っていますけれど、北海道に限らず当時の町村財政は、まず基本財産の収益で維持することになっていました。北海道なら基本財産は、田、畑、漁業権です。町村は、この基本財産の蓄積を積極的に行い、財政を安定させるように上級監督官庁である政府、北海道庁から促されています。(5)上級官庁の監督でとくに目立つのは、北海道庁長官の権限が強いことです。なかでも基本財産の蓄積命令をとくに規定しています。

◇特別町村制施行の発想

いままで言って来たことは、全国の町村制が、帝国憲法に先立って成立してきたこと、公民が一定程度存在していて自治体行政を担うこと、この公民は、土地にしっかり根付いて長いこと住民であって資産があるという人びとであること、村自体も基本財産を持って安定的に財政が維持されていること、それを国や府県が見守り監督することによって実現するという、仕組みとして作り上げてきたというものです。それと同じようなことが、北海道でやれるのかどうか、と政府は考えます。

政府は、――北海道は目下開拓が進行中で、人びとがどっとやって来るが、土地の状況はすぐ変わる。たとえば岩見沢などは、鉄道の工事で一時賑わうが、鉄道の延伸で工事の場所が移ると、人も移動して一気に寂れる。しかも一攫千金の気風が横行しており、土地に居着かない。開拓途上の農村は貧しいいっぽうで、漁村は富んでいる。全道の町村に一律に負担する制度は難しい。しかも北海道の町村は広いから、一個所に集まって議会を開催するのも困難だ――という認識です。

それで開拓途上の北海道に見合う制度が必要だとなったわけです。北海道に特別な町村制が考えられ、一級町村制、二級町村制が生まれました。しかし最初に設置された一級町村、二級町村を見ると、道南、海岸地帯、札幌周辺、内陸でも帯広など一定程度豊かな町に適用されていることがわかります。いわゆる開拓地ではありません。多くの開拓地では、二級町村制でも町村行政を維持するのが大変でした。結局、これまでの戸長役場制度をながらく存続させることになります。全国の町村制を、北海道独自の一級町村制や二級町村制に変えても難く、それらが適用できるまで相当の時間が必要でした。

この一、二級町村制をつくるに当たって、何が考えられていたかがもうひとつの問題です。「大日本帝国憲法」制定の契機には、自由民権運動の参政権要求がありました。憲法制定によって議会開設、とくに衆議院の開設が期待されていました。1889年(明治22)に「衆議院議員選挙法」が制定されます。しかし、この第111条では、<北海道、沖縄、小笠原諸島は地方制度が準行されていないため除外>とされました。「府県制」またその前提である「町村制」が、これらの地域では適用されていないからです。従って北海道では、衆議院議員が選出されません。参政権が閉ざされたわけです。地方議会である府県会、北海道では北海道会の開設に当たっては、「郡制」の施行が必要ですが、「郡制」は「市制町村制」の未施行地では施行されません。町村制が施行されないと地方議会そして国会議員の選出ができないわけです。何とかして北海道議会を作り、衆議院選挙を行って代議士を出し国政に参加したい、そのためになんらかの町村制を北海道に適用させ、「郡制」「府県制」を適用させて衆議院議員選挙を実現させようという議論が道内で起こっていきます。

町村制を北海道に適用させるための一案としては、道南の人々だけで県制を敷き選挙をする、旧開地(道南、旧松前藩領)を北海道庁管轄から切り離して分県（たとえば開拓使廃止後の函館県のように)する案が出されます。これは道南以外の地方からは反発がありました。もうひとつは、道内の一部に府県同様の制度(町村制)を適用させ、ほかは特別制度を施す案です。さらにもうひとつは、北海道全域に特別町村制を施行する案です。これが「北海道区制」「北海道一級町村制」「北海道二級町村制」となります。

北海道に特別町村制を考えるに当たって、内務省参事官都築馨六文書にある「北海道行政組織ニ関スル意見書案」はこのような区分を言っています。――特別町村制を府県同様の制度に移すに際しては、岩内の雷電峠の以南と以北で区別する。以南では3～5年後、以北は10年後になろう――というのです。政府筋の見方では、岩内から余市あたりが、府県一般の制度を適用する際の境目地域になっています。北海道に対する当時の政府の見方、線の引き方が岩内～余市あたりとすると、これをどう見たらよいか。『余市町史』が1900年代の岩内～余市の地域の歴史をどう描くか、今後に注目されるところです。この地域は、ひとつのまとまりとして見ておく必要があるのではないだろうかと思っています。

一級町村制や二級町村制の適用は、概してこうした漁業地域から始まりました。漁業を基盤とした町村を政府はどう見ていたか。「北海道行政組織ニ関スル意見書案」の一節はこう述べます。

「前ニ陳述スル所ヲ略言スレハ北海道ノ町村ノ組織ヲ一変シ将来自治ノ区域ニ達セシムルニ適切ナル制度ヲ布クヲ以テ同道今日ノ急務ナリトス然リ而シテ盛衰期スヘカラサル漁業町村ヲシテ自治ヲ得セシムルニ最モ必要ナルモノハ基本財産ノ成立土着精神ノ発達トノ二ノモノ是ナリ

抑自治行政ナルモノハ農国ニ生出シ其発達モ亦タ農国ニ在リ自ラタガヤスノ土地ヲ愛シ其カマドノ在ル所ニ骨ヲ埋メタル□ル其ノ生計ニ変更少キ農民ニ最モ適切ナルノ自治制度ハ浮浪ト投機トノ精神ニ富タル漁民ニシテ且ツ北海道ノ如ク近時ニ於テ四方ヨリ聚合シ其大半ハ読ミ書キスラ尚ホ未ダ為シ能ハサルモノニハ最モ不適切ナルカ如シ故ニ此ノ如キ人民ヲ自治ノ境界ニ置カントスルハ宜シク注意ヲ重ネ漸々其方針ニ向ハシムルヲ以テ国家ノ為メ得策ト信スルナリ」

これを読む限り、政府は町村自治の基盤となる産業は農業であり、自治の担い手は、漁業者ではなく農民が適切であるとしていたことがわかります。政府が期待しているところは、他県でも北海道でも農業に基盤を置く自治体でした。安定した自治制度を作り挙げるのに、漁村については否定的でした。漁民の「浮浪と投機の精神」は、自治にもっとも不適切だというのです。制度を安定させるには、基本財産の強化、そして土着の精神だといいます。その実現のためには北海道庁の強い指導監督を必要とするという考えです。

政府の見解は、事の半面です。政府の設計した町村制度は、町村も住民も土地によって収入を得るという前提です。そのためには土地所有が法的にも確立していなければなりませんが、北海道は開拓途上でそれが未確立です。人口も流動的です。

では沖縄はどうであったのでしょうか。人口が流動的ではありませんが、産業、生活にしめる漁業のウエイトは大です。北海道と違って伝統的な村が確立しています。「浮浪と投機」というのは当てはまらないでしょう。ただ本土で行われた地租改正、つまり徴税のための土地調査は、沖縄では完了していませんでした。他府県のような土地からの収税がまだ期待できない北海道同様、府県なみの制度ではない「沖縄及島嶼町村制」が施行されることになります。両制にある書面会議の規定の存在は、北海道、沖縄に対して共通する政府の見方を象徴している様にも見えます。とはいえ漁業地帯は町村制には向かないという論理に対して、『余市町史』はどのような回答をあたえるか、私としては期待しています。

5.おわりに

◇余市の漁業と農業

では、余市の漁業と農業はどのような関係であったでしょうか。漁業家はどう動いたのでしょうか。それらは、皆さんがご承知でしょうが、私が学んだことを少し話します。本州の漁村は、農業が主、漁業が副となる農間漁業ですが、余市は漁業が主となる漁間農業であったといえます。

余市の農業は、会津藩士の黒川村、山田村等への団体移民が有名ですが、当初の農業は、鰊漁業時の食料(雑穀・野菜)を補うための開墾でした。余市郡の西部開拓は、鰊場親方(大漁業家)の林家、徳光家、猪股家、山本家などが、余剰となっている労働力を農業に投じることで発展します。大漁業家は資本力と労働力に恵まれ、大地積の未開地の払い下げを受け、小作人を入れて農場を発展させます。いっぽう小規模の刺網漁家は、鰊漁による収入を補完するため半農半漁の形態で、反・畝単位で地積の払い下げを受けて開拓に当たります。

漁業と農業の関係をさらに深く、大規模に展開するのは、1893年(明治26)の余市銀行設立です。林家が筆頭発起人となり、余市開墾会社また赤井川開墾株式会社を設立します。会社は、赤井川に約200万坪(660ヘクタール)の払い下げを受けます。当初は漁業に必要な薪炭材の確保ですが、漁業で得た資本を運用して、余市川中流域の開拓を進めます。赤井川村の農業は漁業に必要な資材を供給するという余市漁業の補完的な役割となりますが、第一世界大戦(1910年代)に赤井川の農業は産業として自立していきます。余市の鰊漁に左右されない段階になって、赤井川は、村としても自立します。ちなみに赤井川村の二級町村制施行は1906年(明治39)です。

◇余市町文化財林家文書の整理

最後に、私たち北海道史研究協議会(道史協)が、2008年～2011年に行った林家文書の整理体験について述べます。最初の年は、余市の研究会の方々も参加されていました。その後は、メンバーをひろげて、道史協研修部員と大学院生・学生が4年間、史料整理を行いました。現物の確認と目録作成を完了させました。目録が完成し、少なくとも閲覧が可能となるための最低限度必要なことは出来たと思います。今後どうするか、文化財の利活用は、町がおやりになることであると思います。私たちは、町内の方がたと一緒に林家文書整理を行いましたが、後は町を含め地元の方がたに委ねることになります。私たちは、この文化財保護にいささか貢献したことで、満足しています。

最初の整理のとき、2008年10月11日ですが、私は、参加された皆さんを前に、「地域の史料は、地域で残す」という題で話しました。地域の史料を残すのは、地域の力量であって、このように残っているのは、道内でもそうないことだと言いました。またこの時私は、同時に町の公文書も同じように保存されなければならないとも話しました。

私は、今日の話しの最初に、余市にはまとまった地域性があると言いました。それは私が言うより皆さんが感じて居られることだと思います。最初の整理の時にこうも言った覚えがあります。「地域の史料は、放っておくと必ず無くなります。残すためには地域の力が期待されます。地域の力とは、住民と行政と文化施設の努力の総合です」と。余市という地域に今後とも期待されるのは、地域の史料をみずから残す力量を発揮されることだと思います。地域の史料を残せるというのは、地域の力量を表わしています。関心を持っている方が大勢いるのは大変重要なことです。地域の史料はほっておくと無くなります。それを残していくのは地域の力であり、住民と行政の総合力であり、文化財施設はその担い手です。地域の史料は自ら残していくことがぜひ大切です。

長い間、ご静聴ありがとうございました。

略年表「北海道の町と村の成立」

西 暦	日 本 暦	北 海 道	全 国
1514	永正 11	蛎崎光広（松前氏）、大館（徳山）に本拠地を置く	
1600	慶長 5	蛎崎慶広、徳山の南台地に新城を築く	
1618	元和 4	イエズス会宣教師アンジェリスの報告（ヴォトナ、ケンダンの記事）	
1620	元和 6	同『カルワーリュの旅行記』（鮭漁場知行･･･）	
1635	寛永 12	宮歌村、松前八左衛門家知行となる	
1670	寛文 10	『津軽一統志』記事（侍町入交る･･･）	鎖国令（第1回）
1688	元禄 元	『快風丸記事』（松前家中、裏に家作、表店を町に貸す･･･）	
1692	元禄 5	『松前主水広時日記』（家臣へ、トトヤ場割渡･･･）	
1724	享保 9	「町年寄」初出（『松前福山諸掟』）	
1737	元文 2	下国金左衛門、乙部村一円支配訴訟に敗訴の処分（『福山秘府』）	
1741	寛保 元	松前・江差海岸大津波	
1747	延享 4	『上之国村納屋場改』	
1748	延享 5	『浜検地割帳』	
1772	安永 元		田沼意次老中就任
1783	天明 3		諸国飢饉
1798	寛政 10	中村小市郎『松前蝦夷地海辺盛衰上書』（鰊漁の盛行、土庶分住へ）	
1799	寛政 11	幕府、東蝦夷地を直轄	
1804	文化 元	幕府、蝦夷地を全面直轄、松前藩移封	
1809	文化 6	『村艦下組帳』	
1822	文政 5	松前藩復領	
1833	天保 4		奥羽・諸国飢饉
1854	安政 元	幕府、箱館と周辺を直轄、箱館奉行設置	日米和親条約
1855	安政 2	幕府、蝦夷地全域を再直轄（松前・江差地方を除く）	
1860	万延 元	三代林長左衛門、松前町年寄・下代兼勤就任（1867、御免）	
1867	慶応 3		幕府、大政奉還 王政復古の大号令
1868	明治 元	新政府、覚七か条。箱館裁判所設置。箱館戦争（～69.5）	太政官制発足
1869	明治 2	開拓使設置、蝦夷地を北海道と命名。太政官諭達 場所請負人廃止、漁場持と改称。西部 13 郡旧場所請負人へ達 道内を諸藩等に分領 札幌建設開始	
1870	明治 3	四代林長左衛門、松前町年寄就任、同年退任 開拓使、移民規則制定。農夫扶助米・塩噌料支給開始	
1871	明治 4	開拓使『細大日記』	廃藩置県

		有珠郡伊達家移民、「覚書」	戸籍法制定
1872	明治 5	開拓使10年計画 札幌市在等、町村役人へ戸長副兼任。ついで市在役人廃止、戸長・副戸長と改称 当別郡伊達家移民、「邑則」 開拓使、「勧農規則」	太政官布告、庄屋以下廃止 大蔵省布達、大小区の設置を容認
1873	明治 6	旧松前藩領（館県）、開拓使管轄となる	地租改正条例公布
1874	明治 7	開拓使、区戸長月俸規則を定む 札幌郡白石、片倉家移民、「勧農規則」 室蘭市中五人組合 各本支庁ごとの大小区画	区戸長の身分取扱・俸給を定む
1875	明治 8		第一回地方官会議、町村民会設置、大区に区長、小区に戸長をとの決議
1876	明治 9	開拓使、地租創定事業開始。海産干物の調査に着手 北海道大小区制設定（全面改正）	太政官、「各区町村金穀公借共有物取扱土木起功規則」公布（総代人制度の根拠） 内務省、「地方之体制等改正之儀上申」
1877	明治 10	根室伍組条例	地租減額、2分5厘に
1878	明治 11	開拓使、総代人選挙・総代人心得制定 太政官、郡区町村編制法の適用のみ許可	三新法（郡区町村編制法・府県会規則・地方税規則）公布
1879	明治 12	開拓使、大小区制廃止、函館支庁管内戸長役場配置。翌年、札幌・根室管内配置	
1880	明治 13	開拓使、戸長職務概目・区入分費分賦概則制定	区町村会法公布
1881	明治 14	開拓使官有物払下げ事件 函館区会開設	
1882	明治 15	開拓使廃止、三県（函館、札幌、根室）設置	
1883	明治 16	農商務省北海道事業管理局設置、旧開拓使官営事業を統括	
1884	明治 17	『維新前町村制度考』	区町村会法改正。戸長官選制に変わる 「町村法草案」立案
1885	明治 18		内閣制度発足（第1次伊藤内閣）
1886	明治 19	三県一局廃止、北海道庁設置 井上馨・山県有朋、北海道巡視（後、「北海道巡視意見書」） 北海道土地払下規則公布	
1888	明治 21		市制町村制公布（1889施行）
1889	明治 22	滝川村々規則 北海道炭砿会社（北炭）設立 『北海道毎日』、「政治上に於る北海道人民の進路」を連載	大日本帝国憲法 衆議院議員選挙法公布

1890	明治 23	佐瀬精一「函館区民に告ぐ」(『北海』) 道庁長官永山武四郎「北海道殖民政策ニ付上申」(函館に市制、その他に特別町村制)	府県制・郡制公布
1891	明治 24	上田重良「札幌・小樽有志の請願意見」(『北海道毎日』 久松義典「北海道施政改革案」(翌年、『北海道新策』) 改進党橋本久太郎、帝国議会へ建議(特別簡易自治制など)	
1893	明治 26	内務省参事官都築馨六、衆議院で町村制の北海道施行に時期尚早と答弁	
1894	明治 27	内務省「北海道ニ関スル意見書」	
1896	明治 29	道庁長官北垣国道「北海道拓殖計画大綱略述」	沖縄県区制公布
1897	明治 30	北海道区制・一級町村制・二級町村制公布 北海道国有未開地処分法公布 角田村戸長役場派出所設置上申書	
1898	明治 31	全道的な大洪水	沖縄県土地整理法公布
1899	明治 32	区制改正施行(札幌・函館・小樽)	沖縄県間切島規程公布
1900	明治 33	一級町村制改正施行(大野村ほか 15 町村) 北海道拓殖銀行設立 衆議院議員選挙法改正、道内からも議員選出を規定	
1901	明治 34	北海道会法・北海道地方費法公布 旭川村組合規約 北海道十年計画発足 『北海タイムス』創刊	
1902	明治 35	二級町村制全文改正施行(石狩町ほか 61 町村)	
1907	明治 40	札幌農学校、東北大学農科大学に昇格	沖縄県島嶼町村制公布
1910	明治 43	北海道拓殖十五箇年計画(第一期拓計)実施	
1911	明治 44		市制・町村制を分離、全文改正
1922	大正 11	札幌など道内に市制施行	樺太町村制公布
1923	大正 12	戸長役場を全廃し、道内全域に町村制を施行	
1925	大正 14		衆議院議員選挙法改正(普通選挙)
1927	昭和 2	北海道第二期拓殖二十箇年計画実施	
1929	昭和 4	一級町村制・二級町村制全面改正(旧勅令廃止)	
1943	昭和 18	一級町村制・二級町村制廃止。二級町村は指定町村となる。	
1947	昭和 22		日本国憲法施行 地方自治法公布、施行
1991	平成 3		第三次行革審第二次答申 「地方分権特例制度」
1995	平成 7		地方分権推進法公布、施行
1999	平成 11		地方分権一括法公布、翌年施行

［参考文献］　レジュメの図版は、※印の文献から転載した。

藤田武夫著　『日本地方財政発達史』河出書房　1949年
柴田啓次　「北海道一・二級町村制度の変遷」(1)－(3)（北海道自治協会編『北海道自治』第14巻4－6号、北海道自治協会、1964年、所収）
亀掛川浩著　『明治地方制度成立史』柏書房、1967年
余市町教育研究所編・刊『余市農業発達史（余市町郷土史、第2巻）』　1968年
北海道編『新北海道史』第4巻通説3、北海道、1973年
滑水昭典　「北海道における地方制度の成立と変遷」（関秀志編『北海道の研究』第5巻近・現代篇Ⅰ、清文堂、1983年、所収）
※鈴江英一著　『北海道町村制度史の研究』北海道大学図書刊行会　1985年
鈴江英一　「和人セクベイの子孫たち」（桑原真人編著『開拓のかげに―北海道の人びと（1）』（日本民衆の歴史　地域編7）三省堂　1987年　所収）
※鈴江英一「北海道一級町村制」小考―「町村制」各条項との比較を中心に―」（旭川市市史編集事務局編『旭川研究＜昔と今＞』第4号、1993年、所収）
余市町史編集室編『余市自治発達史（余市町郷土史、第5巻）』余市町総務部、1993年
※鈴江英一「「北海道二級町村制」についての考察―「北海道一級町村制」各条項との比較など―」（国文学研究資料館史料館編『史料館紀要』第26号、1995年、所収）
※鈴江英一「北海道区制、一・二級町村制の成立過程―　一九八〇年代の諸提議と構想を中心に―」（永井秀夫編『近代日本と北海道―「開拓」をめぐる虚像と実像―』河出書房新社、1998年、所収）
赤井川村教育委員会編『赤井川村史』赤井川村、2004年
鈴江英一「北海道町村制度史再考―研究の再構築のために―」（北海道史研究協議会編『北海道の歴史と文化―その視点と展開―』2006年、北海道出版企画センター、所収）

＜追記＞

この講演録は、2011年10月8日、余市町中央公民館で行なった余市郷土研究会主催の講演会での講演原稿を元に講演内容を復元したものです。読みやすくするため補正してありますので実際に行った講演とは、多少表現が異なっているかもしれませんが、話しの趣旨は変わっていませんので、ご了承ください。

（鈴江）

平成 23 年度博物館活動報告

1. 運営

（1）組織

余市水産博物館（余市町教育委員会 社会教育課）

（平成 24 年 3 月 31 日現在）

教育長	武藤　寿	学芸員 社会教育係長	浅野　敏昭
社会教育課長	飯野　徹郎		
社会教育課主幹	松井　正光	学芸員	小川　康和
社会教育課主幹	髙谷　秀治	嘱託職員	山田　稔
水産博物館館長 社会教育課主幹 （社会教育主事）	乾　芳宏	嘱託職員	山下　明子

文化財専門委員（5名）

委 員 長	本郷　保寛
副委員長	梶　政泰
委　員	林　満
委　員	見野　久幸
委　員	澤野　宗一
任　期　（平成 22 年 4 月 1 日～同 24 年 3 月 31 日）	

文化財関係施設管理運営委員（7名）

委 員 長	瀧澤　義三
副委員長	田村　政司
委　員	渡辺　雅行
委　員	川端　有
委　員	竹内　昌俊
委　員	近藤　芳二
委　員	野中　伸隆
任　期（平成 22 年 4 月 1 日～同 24 年 3 月 31 日）	

（2）平成 23 年度の主な活動状況

4月9日	文化財施設一般公開開始（～12 月 11 日）	7月2日	ソーラン祭り共催文化財施設無料公開（～3 日）
4月 21 日	余市町文化財ボランティア研修会	7月8日	雑誌「HO」取材・撮影　於 旧余市福原漁場
5月 22 日	石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会総会・研修会　於 札幌芸術の森（小川）	7月 12 日	浜頓別町文化財保護委員視察
5月 22 日	余市技能士会による旧下余市福原漁場　石蔵下屋庇部分漆喰の修復作業	8月2日	北海道史研究協議会　林家文書整理作業（～4 日）
5月 24 日	フゴッペ洞窟ミニ展「陶芸 古代文字」（～7/10）	8月 23 日	余市水産博物館特別展「スポーツ偉人伝～スポーツ史を彩った余市の人たち～」（～10/16）
6月2日	「ほっかいどう宝島 2011～旧余市福原漁場のはなし」ラジオ出演　於 FM 北海道（浅野）	8月 31 日	名古屋大学大学院生　資料調査
6月 24 日	余市町文化財関係施設管理運営委員会 余市町文化財専門委員会　於 余市町図書館	9月8日	北海道博物館協会学芸職部会研修会（～9 日） 於 中央公民館・余市水産博物館・旧下ヨイチ運上家・モイレ岬・小樽市忍路海岸
6月 28 日	福岡市博物館・北海道開拓記念館　カムイギリ・湯内漁場鳥瞰図資料調査	11月 16 日	石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会第2回研修会 於 地図と鉱石の山の手博物館（浅野）

9月 13 日	一ツ橋大学大学院生 魚加工関係資料調査（～15 日）	12月 13 日	旧下ヨイチ運上家 燻蒸作業（～16 日）
9月 15 日	小樽工業高校生 インターンシップ（就労体験）実習 於 フゴッペ洞窟	12月 26 日	厚真町教育委員会 フゴッペ洞窟出土復元土器調査
9月 17 日	開運文化財めぐりスタンプラリー（～19 日）	1月 12 日	北海道職業能力開発大学校 駒木氏 旧下ヨイチ運上家調査
9月 17 日	北星余市学校祭 展示協力と特別講座講師 於 北星学園余市高等学校（小川）	1月 27 日	文化財施設防火訓練
10月 16 日	日本建築学会 歴史的建造物見学（旧下ヨイチ運上家・旧余市福原漁場）	3月 15 日	BS日テレ「北海道すたいる」出演 於 フゴッペ洞窟（浅野）
11月 10 日	赤井川中学校2年生 インターンシップ実習 於 余市水産博物館	3月 17 日	ベトナム社会科学院都城研究センター研究員 フゴッペ洞窟保護展示施設視察
11月 15 日	独立行政法人国際協力機構札幌国際センター（JICA札幌）視察研修	3月 21 日	第２回余市町文化財関係施設管理運営委員会 於 余市町図書館

（3） 文化財施設利用状況

・平成 23 年度文化財施設見学者数（別表参照）

2. 教育普及活動

（1） 展示活動

・平成 23 年度余市水産博物館特別展『スポーツ偉人（ヒーロー）伝～スポーツ史を彩った余市の人たち～』

期間：平成 23 年８月 23 日（火）～平成 23 年 10 月６日（日）

展示資料： ①根上博氏（水泳）、藤沢隆氏・笠谷幸生氏・船木和喜氏・斉藤浩哉氏（スキージャンプ）、佐々木孝介氏・林裕也氏・本間篤史氏（野球）の紹介パネル、各氏が活躍した大会でのエピソードパネル、使用した用具類、札幌オリンピック関連グッズ、全国高校野球選手権大会関連グッズほか

（2） 教育活動

・余市町内３・４年生用副読本製作協力

・北星学園余市高等学校文化祭　展示協力・特別講演講師　「余市町内で発掘された遺跡」

9 月 17 日（土）～18 日（日）に開催された北星学園余市高等学校文化祭実行委員会より依頼があり、生徒たちとともに余市町の歴史などを紹介するコーナーの展示を実施した。

（3） 学芸員の館外活動

講師の派遣依頼等を受け，館所蔵資料を使用し町内外での報告会等に参加活動した。

月　日	活　動　内　容	活　動　場　所	担　当　者
4月 16 日	女性学級 歴史探訪講座「私たちが 10 歳代の頃の余市町」	中央公民館	浅野学芸員
4月 17 日	「竹鶴政孝物語」おはなしと映写会	余市町図書館	浅野学芸員
5月 12 日	小樽はつらつ講座「栄華を極めた、鯡大漁家　その後どうなったの？…」	小樽生涯学習プラザ	浅野学芸員
7月 14 日	余市町歴史探訪講座「余市町でおこったこんな話余話」	中央公民館	浅野学芸員

8月 14 日	黒川八幡区会親睦交流会「地域の歴史について見よう・聞こう・触れよう」	黒川八幡生活館	乾・浅野学芸員
9月 17 日	北星余市学校祭 特別講座「余市町内で発掘された遺物」	北星学園余市高等学校	小川学芸員
9月 20 日	大川第九区会敬老会「フゴッペ洞窟を含む 出土した遺物について」	大川第九区会 区会会館	乾館長
10 月 7 日	余市歴史教室　第１回目「余市町の環状列石」「遺跡における石の利用」	中央公民館	小川学芸員
10 月 14 日	余市歴史教室　第２回目「アイヌ文様について」「アイヌ文化と北斗について」	中央公民館	乾館長
10 月 16 日	大川第六区会敬老会「余市今昔」	ホテルサンアート	浅野学芸員
10 月 25 日	余市歴史教室　第３回目「地図で見る余市の移りかわり」	中央公民館	浅野学芸員
11 月７日	農業改良普及センター職員研修講師「余市町の形成に伴う農業・漁業の関わりについて」	農村活性化センター	浅野学芸員
2月 16 日	常例法座「むかしの写真　上映会」	仁木町　無量寿寺	浅野学芸員
2月 21 日	小樽観光大学　講座「おたる案内人１級講座」講師「小樽の街と鰊漁」	小樽商科大学講義室	浅野学芸員
3月４日	小樽観光大学　講座「おたる案内人２級講座」講師「小樽の街と鰊漁」	小樽商科大学講義室	浅野学芸員
3月 18 日	「おはなしと昔の写真 上映会」	乗念寺	浅野学芸員

3.　資料収集活動

平成 24 年２月 28 日までの受入資料は地質資料 12 点，記録資料４　点，生活資料　２点，水産資料２　点民俗資料１点の計 21 点であった。

4 調査研究活動

（1）文書調査　　担当：浅野敏昭

明治以降の町内漁家の漁場経営に関わる文書資料（川内家，奥寺家）の調査，積丹半島各地の鰊漁に関する資料調査を行ない、整理を行なっている。

（2）フゴッペ洞窟保存調査　　担当：浅野敏昭

平成 15 年度までのフゴッペ洞窟保存調査事業期間中に行なっていた内部壁面の定点撮影，浸透水の Ph 測定などを継続して行なっている。

（3）埋蔵文化財所在調査・試掘調査・工事立会　　担当：乾　芳宏，小川康和

８月 30 日～９月１日　北海道横断自動車道建設に伴う試掘調査（登町２・３・４・遺跡周辺ほか）

<別 表>

平成 22 年度文化財関係施設入場者数　（下段の数字は平成 21 年度）

施設名	フゴッペ洞窟	旧下ヨイチ運上家	余市水産博物館	旧余市福原漁場	総　計
4 月	411	106	95	108	720
	575	157	176	242	1,150
5 月	1,511	447	351	355	2,664
	1,410	601	282	490	2,783
6 月	1,216	420	282	443	2,361
	1,118	562	174	811	2,665
7 月	1,829	988	602	1,468	4,887
	2,313	1,152	835	1,152	5,452
8 月	1,763	601	453	609	3,426
	2,039	533	389	457	3,418
9 月	1,397	525	309	385	2,616
	1,676	711	318	499	3,204
10月	1,217	582	500	715	3,014
	1,183	447	300	350	2,280
11月	959	284	224	162	1,629
	461	137	190	300	1,088
12月	69	24	36	22	151
	81	25	15	27	148
1～3月	冬 期 閉 館				
計	10,372	3,977	2,852	4,267	22,468
	10,856	4,325	2,679	4,328	22,188

平成 23 年度文化財関係施設入場者数

施設名	フゴッペ洞窟	旧下ヨイチ運上家	余市水産博物館	旧余市福原漁場	総　計
4 月	545	127	97	101	870
5 月	1,486	420	188	292	2,386
6 月	988	460	266	354	2,068
7 月	2,532	1413	763	1,697	6,405
8 月	2,372	595	344	534	3,845
9 月	1,772	789	349	671	3,581
10月	1,105	746	201	371	2,423
11月	405	138	107	235	885
12月	33	10	15	15	73
1～3 月	冬 期 閉 館				
計	11,238	4,698	2,330	4,270	22,536

余市水産博物館研究報告　第 15 号

平成 24 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　余市水産博物館
〒046-0011　北海道余市郡余市町入舟町 21
TEL＆FAX　0135-22-6187